

天童山の無際了派とその門流

道元が入宋して最初に参学した臨濟禪者

佐藤 秀孝

はじめに

臨濟宗大慧派の無際了派（一一四九—一二二四）といえは、南宋の嘉定一六年（日本の貞応二年、一二三三）に入宋した永平道元（希玄、仏法房、一一〇〇—一二五三）が明州（浙江省）慶元府鄞県東六〇里の天童山景德禪寺に上山掛搭した際、最初に参学した南宋禅林の臨濟禪者として名高い。了派は大慧派の拙庵徳光（東庵、仏照禪師、普慧宗覺大禪師、一一二二—一二〇三）に参じて法を嗣いだ高弟として知られ、南宋初期に看話禅（公案禅）を唱導して絶大な接化をなした楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲（妙喜、大慧普覺禪師、一〇八九—一一六三）の法孫に当たっている。

道元が天童山に掛搭して了派に参学したのは、了派にとつて最晩年の二年間のできごとであり、やがて了派が示寂したことに伴って、道元は後席を継いで天童山に住持した曹洞宗の長翁如浄（浄長、一一六二—一二三七）のもとに投じ、身心

脱落してその法を嗣いで帰国している。いわば了派は道元を如浄に引き合わせる仲介役を演じて世を去つた感もあるが、道元に関わることで了派の存在は禅宗史上に不朽の名を留めることになったのであり、入宋した当初の一年間すなわち足掛け二年における道元の事跡を辿る上で、了派という禅者の消息を正しく捉えることはきわめて重要なものがあろう。

そこで以下、道元が入宋して最初に参学した師として比較的知名度が高いにも拘わらず、これまであまり本格的に考察がなされて来なかつた無際了派という人物について、諸史料を駆使して可能な限り詳細にその事跡を窺つてみることにしたい。幸いに平成一九年度（二〇〇七年度）に駒澤大学禅文化歴史博物館では、しばらく所在が不明となつていた道元真筆『正法眼蔵』、「嗣書」の巻（旧里見本）を入手する機会に恵まれている。「嗣書」の巻には、嗣書をめぐる了派との関わりがいくぶん詳しく語られており、こうした因縁も踏まえて了派が辿つた軌跡を一通り整理してみることにした。

また了派の法を嗣いだ門人には如何なる禪者が存し、彼らほどのような活動をなしたのか、その門流は果たしていつまで江南禅林に存続していたのか、在宋中の道元と関わった人も存したのか、などの点についても一考をなしておきたい。併せて法は嗣がなかったものの了派のもとに集った禅者たちの消息や、当時、天童山の了派のもとに投じていた日本僧の消息などについても、若干の考察を加えるものである。

無了派に関する伝記史料

そもそも無了派の章を載せる禅宗燈史としては、明代初期に臨済宗松源派の円極居頂（円庵、玄極、？一四〇四）によつて編纂された『統伝燈録』巻三五「明州天童派禪師」の章がもっとも古く、つづいて大慧派の南石文琇（一三四五—一四一八）によつて編纂された『増集統伝燈録』巻一「四明天童無了派禪師」の章が存している。ただし、いずれも了派が亡くなって一世紀半から二世紀近くを隔てて編纂されたものであり、記載内容はきわめて簡略で、残念ながら伝記的な面は何ら記されていない。その後、明末清初に至つて陸續として編纂された禅宗燈史においても、

- 『五燈会元統略』巻三（巻二上）「慶元府天童無了派禪師」の章
- 『統燈正統』巻一一「寧波府天童無了派禪師」の章
- 『祖燈大統』巻七二「寧波府天童無了派禪師」の章

- 『統燈存纂』巻一「明州天童無了派禪師」の章
- 『統指月録』巻二「慶元天童無了派禪師」の章
- 『五燈嚴統』巻二〇「目錄」の「天童派禪師 不列章次」
- 『五燈全書』巻四七「明州天童無了派禪師」の章

といった具合になり、『五燈嚴統』を除いて了派の章がほぼ一様に立伝見録されてはいるが、やはり伝記面のことを伝える記述は見られない。後世の禅宗燈史は概ね『増集統伝燈録』の記事をそのまま継承しているにすぎず、禅宗燈史を通しては派が徳光の法を嗣いで天童山に住持したこと以外、何も窺い知ることができないのが実情である。

ところが、幸いにも了派に関しては、『統伝燈録』や『増集統伝燈録』に先立つて、南宋末期の景定四年（一二六三）に編纂された『枯崖和尚漫録』（以下、『枯崖漫録』と略称）巻上に「慶元府天童無了派禪師」の項が存しており、

慶元府天童無了派禪師、嗣「仏照」。生於建安張氏。慶元四年、開「法常」之保安。上堂云、説即無功有過、不説又是罪過。自今各省「己過」、無以責人之過。拄杖不「応」放過、也要「従」頭按過。卓「拄杖」云、内卦已成、再求「外象」。又卓三下。占得風山小畜、变成「沢風大過」。卓一下、下座。初預「密庵」法席、有剪「紙塔」、戲「俾」、頌云、当陽拈「起剪刀」、裁「七級浮圖」。「手回」、堪「笑耽源」多口老、湘南潭北露「尸骸」。一衆服膺、讚「船子」云、「三寸離」鈞「減」一「橈」、百千毛「數」冷「颯」、雖「然」兩「手」親「分付」、

要「在渠儂」自點頭。讀「靈照女」云、老爺畏「尽生涯」後、累汝
沿「街」売「箒」筵、不「是家貧」兒「子苦」、此心能有「幾人」知「叢林」稱
之。嘉定間、在「天童」。示「疾辭」衆上堂云、十方無「壁落」、四面
亦無「門」、淨「躰」躰、赤洒洒、沒可把。喝一喝云、幾度「売來」還自
買、為憐「松竹引」清風。下座。入「丈室」端坐、泊然而化。寿七
十六、臘五十二。仏果下、大慧接「人」、多如「馬祖」。今「獨東庵」下
為「盛」

という記事が載せられている。記事的にはそれほど分量は多
くないが、了派の伝記に関する消息の一端を詳しく辿ること
ができる点で貴重な史料となっている。『枯崖漫録』三巻は
大慧派の枯崖円悟が編集して景定年間（一二六〇—一二六四）
にまとめられたものであり、南宋後期の禅者たちのなした多
くの逸話を収録している。円悟は了派と同門に当たる浙翁
如琰（仏心禅師、一一五一—一二三五）の法孫に当たっており、
本師の偃溪広闡（仏智禅師、一一八九—一二六三）は実際に若
い頃に久しく了派にも参学した経験が存している。禅門の逸
話集として編纂された『枯崖漫録』の記事内容はかなり限ら
れたものではあるが、了派が示寂してわずか四〇年を隔てた
時期にまとめられたものであることから、了派の生涯を窺う
上では他に見られない貴重な消息を伝えており、それなりの
信憑性を認めることができよう。

さらに入宋した道元が天童山の了派のもとに投じているこ

天童山の無了派とその門流（佐藤）

とから、『正法眼蔵』「嗣書」の巻や「明全和尚戒牒與書」な
ど、道元の著述にも断片的に了派の消息を伝える記事が存し
ており、これらも当然のことながら了派の伝記を知る上で貴
重な史料といえるものである。また同様のことは『三大尊行
状記』や古写本『建漸記』など道元の伝記史料にも窺え、そ
こには了派の消息がやはり断片的に語られている。

出生の地と年時

はじめに問題とすべきは了派が出生した郷里と俗姓に関す
る考察であつて、この点について『枯崖漫録』には幸いにも
「建安の張氏に生まる」と記されている。これによれば、了
派は建安（福建省）の出身で、俗姓が張氏であつたことが知
られる。建安とは福州（福建省）に隣接する建州（福建省）
建寧府のことであり、とくに建寧府治は建安県と称されてい
るから、この地が了派の出身地であつたことになる。

ところが、道元は在宋中に天童山で了派の嗣書を実際に閲
覧する機会に恵まれており、『正法眼蔵』「嗣書」の巻におい
て、拙庵徳光が了派に与えた嗣書を紹介して、「了派蔵主者、
威武人也」と記しており、了派が威武の人であつたことを伝
えている。ここにいう威武とは權威と勢力を具えた勇ましい
人という意味ではなく、あくまで地名として特定の地域を指
しているはずである。このように了派の出身地に関しては建

安の人とする『枯崖漫録』の説と、威武の人とする『正法眼蔵』「嗣書」の巻の説が併存しているわけであるが、建安と威武とが如何なる関係にあるのかが問題とならう。

実際のところ、威武とは唐末五代に福建の地に威武軍節度使が置かれたことに因む呼称であつて、建州を含む福建地域を総称した表記であることが知られる。すなわち、唐の元和年間（八〇六—八二〇）に福州・泉州・汀州・建州・漳州の五州を領した福建觀察使が置かれ、乾寧年間（八九四—八九八）にはこれが威武軍節度使と改められている。したがつて、威武とは現今の福建省に当たる地域一帯の総称であり、その中に建州（建寧府）も含まれているわけであつて、道元が書き記している「威武人也」というのは、広義では誤りでないことになる。このことは一面で道元の伝える記載内容がきわめて信憑性が高く、正確なものであつたことを物語る貴重な一例といつてよい。

建州は福建省でも海岸部の福州から西北に向かつた内陸に位置し、東溪と西溪が合流する地に当たり、江西省に通じる軍事上や交通上の要衝の地となつてゐる。唐代には建州、宋代には建寧府、元代には建寧路と称されている。東溪上流の建陽には唐代に南嶽下の馬祖道一（馬大師、大寂禪師、七〇九—七八八）が最初に卓錫したとされる仏迹嶺の聖跡寺が存しており、また『頓悟要門』の撰者として名高い馬祖下の大珠

慧海も建州の朱氏の出身とされる。

了派が活動していた南宋中期に、建州（建寧府）ないし建安県の出身として知られる主な禪者を一通り挙げておきたい。楊岐派の蓬庵端裕（仏智禪師、一〇八五—一一五〇）の法を嗣いだ寒巖道升（慧升、一〇九八—一一七六）が建安県の呉氏の出身として知られ、了派が受戒した直後に当たる乾道九年（一一七三）に福州閩県の鼓山湧泉禪寺に化導を敷き、淳熙三年（一一七六）四月に示寂している。大慧派の密庵道謙（建州子）も建寧府の遊氏の出身であり、世に儒学を業としたが、早くに父母を失つて出家したとされる。その後、道謙は大慧宗杲の法を嗣ぎ、福州侯官県の昇山玄沙院（安国院）に出世開堂し、さらに建寧府崇安県の開善禪寺に住持しており、一代の儒者である朱熹（字は元晦、号は晦庵、朱子、一一三〇—一二〇〇）がそのもとで参禅していることでも名高い。また『径山志』巻二「列祖」によれば、同じく大慧派の雲庵祖慶も建寧府の出身とされ、大慧宗杲の法を嗣いで杭州余杭県の径山能仁禪寺（後の興聖万寿禪寺）に住持している。とりわけ、道謙や祖慶らは徳光と同門であることから、了派にとつて法伯ないし法叔に当たる禪者であり、彼らの活動は早くから郷里の名僧として知られていたことである。

さらに興味深い消息として、『枯崖漫録』巻上「臨安府径山少林仏行崧禪師」の項によれば、大慧派の少林妙崧（仏行

禪師、？ 一一三三(一)が建州浦城の徐氏の出身とされている。妙松は了派と同じく拙庵徳光の法を嗣いでおり、杭州錢塘県の南屏山淨慈報恩光孝禅寺などに住持した後、同門の浙翁如琰の後席を継いで杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺の第三世に就任している。妙松は了派と同郷であるばかりでなく、同じく徳光の法を嗣いだ同門でもあることから、両者には親密な道交が存したはずであろうが、その詳細は何ら定かでない。了派より活動期間が遅れる禅者としても、『建州弘积録』巻下「崇徳第三」の「元建州白雲崇梵寺愚叟澄鑑禪師」の章によれば、同じ大慧派の無文道璨(柳塘、一一二四—一一七一)の法を嗣いだ愚叟澄鑑(通悟明印大師、一一三〇—一一三一)が建安県の光禄坊に存した白雲崇梵禅寺に化導を敷いている。

了派の示寂年時に関する考察は後に詳しく触れたいが、了派は嘉定一七年(一一三四)に世寿七六歳で示寂していることから、これをもとに年齢と世寿を逆算すると、出生したのは南宋政權が樹立して凡そ二〇年あまりを経過した紹興一九年(一一四九)であったことが知られる。

ところで、後に了派は拙庵徳光に参じて法を嗣ぐこととなるが、徳光の法を嗣いだ高弟たちの生年を窺うと、秀巖師瑞(？ 一一三三)は生年が定かでないものの、徳光の門下では長老格であることから、了派よりはかなり年長であったもの

らしい。また退谷彝雲(一一四九—一二〇六)は了派と同年の生まれであるが、了派より二〇年近くも先に示寂している。浙翁如琰は紹興二年(一一五二)に生まれれており、妙峰之善(一一五二—一二三五)はその翌年の紹興二年に生まれてくるから、この両者は了派よりは若干年少に当たっている。さらに北磻居簡(敬叟、一一六四—一二四六)に至っては隆興二年(一一六四)に生まれてくるから、了派よりは一五歳も年齢が離れている。また了派の後席を継いで天童山に住持した曹洞宗の長翁如浄は紹興三年(一一六二)に生まれてくるから、了派よりは二三歳の年少に当たっている。

出家する以前に了派が如何なる活動をなしていたのか、『枯崖漫録』においてもその消息については何ら伝えられておらず、幼少期の逸話や出家するに至る事情などは定かでない。ただ、了派は世寿七六歳、法臘五二歳で示寂していることから、受具は二〇歳代半ばの頃になされていることが窺われる。出家得度はそれ以前であるから、二〇歳になる前に郷里に存した何れかの寺院において仏門に投じて剃髪し、受業師より了派という法諱を授与されていることになる。後に詳しく述べるが、了派は嘉定一七年(一一三四)の夏安居が始まる直前に示寂したものでらしいから、その時点で法臘が五二歳ということになると、具体的には乾道八年(一一七二)に二四歳で具足戒を受けて正式の比丘となっているものと見

られる。

ところで、『建州弘釈録』や『重修建寧府志』などを通して、建州（建寧府）とくに建安県において宋代に著名な寺院を窺うに、建安県では城東の天寧報恩光孝寺や光祿坊の白雲崇梵寺が存し、甌寧県では雲際山麓の開元寺が存し、建陽県では県治西の仏跡嶺寺（聖跡寺）が存し、崇安県では呉屯里の瑞巖寿聖寺や五夫里の開善禅寺などが存している。こうした建州内の何れかの寺院において了派は仏門への第一歩を踏み出したものであろう。

では、了派という法諱は何に由来しているのであらうか。派とは元から分かれること、河川の支流や分流のことを意味している。了は完了する、終わるの意でもあるが、ここでは明らかにするとか、悟るの意で用いられているものと見られる。したがって、了派とは派を了する、ものごとの本質から分かれ出たものを明らかにするといった意となろう。建州（建寧府）の建安県では東北から流れてくる東溪が北から流れてくる建溪に合流しており、二つの河川が交わってやがて閩江となって福州の海に流れ出ていることから、こうしたことを意識して法諱が命名されているのであろうか。詳しくは後に示すが、破庵派の無準師範（仏鑑禅師、一一七七—二四九）は『仏鑑禅師語録』巻五「小仏事」の「為天童無際和尚起齋」において、「大海渺無際、漫天鼓黒風」とか

「故我無際和尚、慣諳水脉、一生鼓棹揚帆、不犯波瀾」と表現しており、了派の名を示すのに大海の波を引き合いに解している。

当時、法諱（僧名）の下字に「派」の語を用いた禅者は珍しく、了派のほかにはわずかに黄龍派の慈慧祖派という禅者が知られる程度であり、後の日本禅林では黄龍派（千光派）の江西龍派（蘇庵、木蛇老人、一三七五—一四四六）が名高い。これに対し、了派の前後で「了」の一字を法諱の上字に付けている禅者はかなり多く見られ、了派より早くには雲門宗の照堂了（一〇九二—一一五五）や黄龍派の慈航了朴さらに虎丘派の笑庵了悟などがあり、了派と同世代では大慧派の滅堂了宗や楊岐派の無証了修があり、遅れて破庵派無準下の西巖了慧（一一九八—一二六二）などが名高い。

一方、無際という道号ないし字を用いた禅者としては、了派より先に同じ大慧派に無際慧照尼（？—一一七七）があり、この人は大慧宗杲のもとで参学して悟道しているが、大慧下の無著妙総尼（一〇九五—一一七〇）の法席を継いでいるから、了派にとつては法伯母ないし法従姉ということになる。また元代にも松源派の虎巖淨伏（天瑞老人、仏慧定智禅師、？—一三〇三）の法を嗣いだ高弟として無際如本という禅者が存している。ただ、何よりも古く唐代に青原下の石頭希遷（七〇〇—七九〇）が無際大師の勅諡号を得ており、また南嶽下

の趙州從諗（七七八—八九七）が真際大師の勅諱号を得ている事実が注目されよう。

了派が二歳のときには楊岐派の蓬庵端裕（仏智禪師、一〇八五—一一五〇）が示寂し、三歳のときには曹洞宗の真歇清了（寂庵、悟空禪師、一〇八八—一一五二）が示寂しており、九歳のときには同じく曹洞宗の宏智正覺（宏智禪師、隰州古仏、一〇九一—一一五七）が示寂し、一五歳のときにはやがて法祖となる楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲が示寂している。このように南宋初期の紹興年間（一一三一—一一六二）を彩った錚々たる禪者が相繼いで逝去し、江南禪林も新たな時代を迎えた中で、了派は禪門への第一歩を歩み出したわけである。

密庵咸傑への参学

戒律（具足戒）を受ける戒壇を具えた律寺は限られているから、当然、了派は受戒して比丘となるため他州の律寺に赴いた経験も存したであろうが、本格的な諸方歴遊は受戒して以降のことであったと見てよい。

では、了派はやがて本師となる拙庵徳光に参学するまでに、果たして如何なる参学をなしていたのであろうか。この点についてはわずかに『枯崖漫録』に、

初預「密庵法席、有剪紙塔、戲俚、頌云、当陽拈起剪刀、裁、七級浮图心、手回、堪、笑耽源多口老、湘南潭北露、戸骸、一

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

衆服膺

という記事が存しているにすぎない。おそらく諸方に遍参するまでしばらくの間は郷里の禅刹にあって諸禪者に参学していたものと見られるが、具体的に郷里で参禅した禪者については何も伝えられていない。『枯崖漫録』には「初めに密庵の法席に預る」とあるから、二〇歳代の半ばで諸方に遍参すべく郷里を出たと見られる了派は、参学の初めに虎丘派の密庵咸傑（一一一八—一一八六）のもとに投じたものらしい。咸傑には『密庵和尚語録』が編集されており、その巻末に「塔銘」が付されていることから、それらによって咸傑の事跡を簡略に窺っておきたい。

咸傑は道号を密庵と称し、了派の郷里に近い福州（福建省）福清県の出身で俗姓は鄭氏とされる。虎丘派の応庵曇華（一一〇三—一一六三）に参じて法を嗣ぎ、乾道三年（一一六七）八月に衢州（浙江省）西安県東三五里の西烏巨山乾明禅院に開堂出世し、ついで同じ衢州西安県治北の大中祥符禅寺に遷住している。その後、金陵建康府（江蘇省）上元県の蒋山太平興国禅寺や常州（江蘇省）無錫県西三六里の褒忠顯報華藏禅寺に歴住し、淳熙四年（一一七七）正月には杭州（浙江省）臨安府余杭県西北五〇里の径山興聖万寿禅寺（もと能仁禅寺）に勅住している。淳熙七年（一一八〇）六月には杭州錢塘県の北山景德靈隱禅寺に遷住し、淳熙一〇年（一一八三）八月

に一旦は住持職を退いたものの、淳熙二年（一一八四）正月に明州（浙江省）鄞東六〇里の太白山天童景德禪寺に入寺している。咸傑が示寂したのは淳熙十三年（一一八六）六月二日のことであり、このとき世寿は六九歳、法臘は五二齡であったとされる。門下には次世代を担った松源崇嶽（老曠翁、一一三三—一二〇二）や曹源道生（？、一一九八）さらに破庵祖先（一一三六—一二二一）などすぐれた人材が多く輩出し、法孫の代に至って大きく躍進することになる。

了派が咸傑に参じたのが何時のことか、何れの寺院であったのかは定かでないが、受戒してから遍参歴遊しているのであるから、乾道八年（一一七二）より以降のこととなる。おそらく状況的には径山や靈隱寺で参学し、天童山まで随侍したとも解され、了派は同じ福建の出身であった咸傑のもとで親しく指導を受けていたものである。仮に了派が咸傑の示寂するまで随侍したとすると、すでに三八歳に達していたことになる。

ところで、『枯崖漫録』によれば、了派が咸傑のもとに在った折、紙を切つて切り絵の塔婆（紙塔）を拵えていると、咸傑が戯れに紙塔に因んで偈頌を作るように命じたとされる。このとき了派は一偈を詠じて、

当陽に剪刀を拵起して裁るに、七級の浮図、手に応じて回る。
笑つに堪えたり、耽源多口の老。湘南潭北、尸骸を露わす。

と咸傑に示したところ、寺内の一衆はみな感服したといつのである。当陽とは「真つ向から」の意であり、偈頌の内容としては六祖下の南陽慧忠（大証禪師、？七七五）の無縫塔立石の故事を踏まえている。いま、これを訳してみるならば、

真つ向から鉄を手に紙を切つていくと、しだいに七層の塔婆の
かたが手の動きに応じて自在にでき上がってくる。その昔、
南陽慧忠のために無縫塔を造らうと耽源応真はあれこれ御託を
並べたが、もともと湘南潭北（湖南省の地）はどこもかしこも
屍でいっぱいではないか。

といった意味合いとなる。この了派の偈頌は『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一「造塔 舍利附」に、

戯題「剪紙塔」 無際。

当陽拵「起剪刀」裁、七宝浮図「手回、堪」笑耽源多口老、湘南潭北露「屍骸」。

として載せられており、七級と七宝や尸骸と屍骸といった字句の異同が若干見られるものの、「戯れに紙塔を剪るに題す」という表題で知られたものらしい。『密庵和尚語録』には了派のことは何ら記されていないが、この偈頌によつて了派は咸傑の門下で頭角を現していったものと見られる。しかしながら、結局のところ了派は咸傑の法を嗣ぐことはなかったであり、咸傑の示寂まで随侍したか否かも定かでないが、やがてその門を離れて再び参師闡法の行脚に赴いている。

拙庵徳光への参学と嗣法

すでに述べたごとく郷里の建安（威武）で出家得度して受戒を終た後、了派は最初に密庵咸傑に参じていたのであって、直ちに本師となる拙庵徳光に随侍したというわけではない。

了派が法を嗣いだ本師である徳光については、幸い丞相の周必大（字は子充・洪道、諡は文忠、省齋居士・平園老叟、一一二六—一二〇四）が「圓鑑塔銘」を撰しており、『周文忠集』巻八〇（『平園統稿』巻四〇）の「道釈 塔銘」に収められている。これは『增修雲林寺志』巻五「芸文」に「圓鑑塔銘」として、また『明州阿育王山志』巻一一（『明州阿育王山統志』巻一）に「仏照光禪師塔銘」として収録されている。いま、この「圓鑑塔銘」を中心に徳光の行実を簡略ながら窺っておくことにしたい。圓鑑塔というのは徳光の墓塔の名称であり、『北磧文集』巻一〇「祭文」に「祭 仏照禪師円鑑之塔」代「秀巖」が収められている。また『渭南文集』巻一四「序」に「仏照禪師語録序」が収められているから、かつて徳光には語録として『仏照禪師語録』が編集されたことが知られるが、残念ながら現今に伝えられておらず、わずかに『仏照禪師奏対録』一卷が知られるのみである。

福建の地といえは、かつて曹洞宗の真歇清了（寂庵、悟空禪師、一〇八八—一一五二）が鼓吹する黙照禪を批判するかた

ちで大慧宗杲が看話禪を初めて唱導した地として知られる。当時、宗杲の高弟たちの多くも福建の諸刹に在って化導を敷いていた時期であり、当然、建安出身の了派が新たな大慧派の禪に引かれていくのも自然の成り行きであつたともいえる。おそらく了派は初め福建の地で大慧派の諸禪者に歴参し、その後、一旦は密庵咸傑に師事したものの、かつての縁故からやがて拙庵徳光に参学する機会に恵まれたものではなからうか。状況的には咸傑が天童山で示寂した後、了派は近隣の阿育王山広利禪寺に到り、大慧派の徳光のもとに投じたものではないかと解せられる。

徳光は臨江軍（江西省）新喻県すなわち現今の江西省樟樹市臨江鎮付近の出身であり、俗姓は彭氏と伝えられる。紹興一年（一一四一）に主戦論者に同調する者として配流の身となつた大慧宗杲が郷里の村を通り過ぎる姿を望み見て「此れ古仏なり」と感嘆し、出家の道を歩んだと伝えられる。徳光は諸禪者のもとを歴参して饒州（江西省）鄱陽県贛洲門の天寧報恩光孝寺において虎丘派の応庵曇華に参学し、しばらく随侍しているから、このとき曇華の門下に在つた密庵咸傑とも交友を結んだものであろう。紹興二十六年（一一五六）に宗杲が流罪から許されて明州鄞県の阿育王山広利禪寺に住持したのを聞き、徳光はその門に投じて杭州余杭県の径山能仁禪寺にも随侍している。

乾道三年（一一六七）に徳光は台州府主の李浩（字は徳遠・直夫、号は橘園、一一一六—一一七六）の請を受けて台州黃巖県西八〇里の浮山鴻福禪寺に開堂出世している。五年を経て台州府治東南一里一〇〇歩の巾子山報恩光孝禪寺に遷住し、まもなく郡城の大火で伽藍も焼失したが、檀信の浄財でこれを見ごとに復旧している。淳熙三年（一一七六）の春に詔により杭州錢塘県の北山景德靈隱禪寺に勅住し、さらに冬には召されて皇帝の孝宗（趙昀、字は元永、一一二七—一一九四、在位は一一六二—一一八九）の前で説法し、仏照禪師の勅号を賜っている。このときの徳光のことはをまとめたのが『仏照禪師奏対録』一卷にほかならない。淳熙七年（一一八〇）の夏に徳光は明州の阿育王山に遷住し、しばらく身を休めて修行僧の指導に専念したものをらしく、一〇余年にわたって接化に邁進したとされる。

紹熙四年（一一九三）に徳光は杭州余杭県の径山興聖万寿禪寺（もと能仁禪寺）に勅住しているが、この時期は徳光も世事に追われて思うような接化ができなかったもののようにあるが、径山に住持していたのは短期間に限られている。慶元元年（一一九五）に徳光は阿育王山に帰隠して東庵に閑居しており、東庵でも学人接化に努めたものらしい。徳光が示寂したのは嘉泰三年（一一一三）三月二〇日のことであり、このとき世寿八三歳、法臘六〇夏であったとされる。東庵の

後方に墓塔が建てられて圓鑑と名づけられ、勅諡号として普慧宗覺大禪師を賜っている。

ところで、『枯崖漫録』の了派の項には、「仏果の下、大慧人を接し、多きこと馬祖の如し。今独り東庵下を盛んと為す」と述べられており、圓悟克勤（仏果禪師 一〇六三—一一三五）のもとから出た大慧宗杲が唐代の馬祖下のごとく多数の門人を占めた消息を受け継ぐものとして、東庵下すなわち阿育王山の東庵に集った徳光の門下が隆盛したさまを伝えている。つぎに徳光の嗣法門人たちについて禪宗燈史や宗派図がどのようにに伝えているか整理しておきたい。

明代初期の『統伝燈録』卷三五には「育王光禪師法嗣」として「杭州靈隱妙峰善禪師」「杭州浄慈北磻禪師、名居簡」「杭州径山如琰禪師、字浙翁」「四明天童派禪師、字無際」「東禅觀禪師、字性空」「上方朴翁錫禪師」と六人の章を見録し、第四番目に了派を載せており、「目錄」にはほかに「育王宗印禪師」「浄慈義雲禪師」「径山妙嵩禪師」「育王師瑞禪師」「育王権禪師」「天童齊禪師」「雲居梵琮和尚」「鐵牛印禪師」の八人の法嗣を無録として名のみ記している。

一方、『増集統伝燈録』卷一には「育王仏照光禪師法嗣」として「杭州靈隱妙峰之善禪師」「杭州浄慈北磻居簡禪師」「杭州径山浙翁如琰禪師」「四明天童無際了派禪師」「福州東禅智觀禪師」「湖州上方朴翁義錫禪師」「四明育王退谷義雲禪

師」「四明育王秀巖師瑞禪師」「四明育王孤雲權禪師」「江州雲居率菴梵琮禪師」「四明育王空叟宗印禪師」「杭州靈隱鐵牛印禪師」「石庵正砲禪師」「四明天童海門師齊禪師」と一人の章を見録し、第四番目に了派を載せており、ほかに「此後無伝」として「径山少林妙松禪師」「虎丘鏡中大禪師」の名を挙げている。

また禪宗の宗派図はそれぞれの時代で作成されたときの宗勢を如実に伝える好史料であるが、破庵派無準下の東福円爾（聖一國師、一一〇二—一一八〇）が將來した東福寺所蔵の『宗派図』（『禪宗伝法宗派図』とも）には、「仏照光禪師」の法嗣として「疎山成禪師」「性空觀禪師」「石橋宣禪師」「鏡牛印禪師」「退谷雲禪師」「空叟印禪師」「秀岩瑞禪師」「浙翁琰禪師」「無際派禪師」「少林松禪師」「孤雲權禪師」「鏡中大禪師」「万年善禪師」「高臺月禪師」と四人の名を記しており、了派は第九番目に挙げられている。

高麗国において破庵派の無学自超（溪月軒、妙巖尊者、一一二七—一四〇五）が所伝した『仏祖宗派之図』には、「仏照光禪師」の法嗣として「秀岩瑞禪師」「無際派禪師」「浙翁琰禪師」「日本文日禪師」「雲居琮禪師」「孤雲權禪師」「朴翁鈺禪師」「少林高禪師」「北澗簡禪師」「空叟印禪師」「妙峯善禪師」「鐵牛印禪師」と二人の名を記しており、了派は第二番目に挙げられている。

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

無学自超のものと同じ系統を継承していると見られる尾張の一宮（愛知県一宮市）の長島山妙興報恩禪寺に所伝される南北朝期の『仏祖宗派之図』においても、「仏照光禪師」の法嗣として「浙翁琰禪師」「雲居瑞禪師」「日本大日禪師」「孤雲權禪師」「朴翁鈺禪師」「少林高禪師」「北澗簡禪師」「空叟印禪師」「妙峯善禪師」「鉄牛印禪師」と一〇人の名が横に並び、別段に「秀岩瑞禪師」「無際派禪師」の二人の名が記されており、状況的には自超所伝の『仏祖宗派之図』と同じく了派は師瑞につづいて第二番目に名が挙げられていると解することもできよう。

また北朝の永徳二年（一三三二）九月九日（菊節日）に刊行された『仏祖正伝宗派図』には、「育王仏照拙菴徳光」の法嗣として「径山浙翁如琰」「育王孤雲道権」「育王空叟宗印」「西禅無学宗印」「靈隠鉄牛心印」「径山仏行少林妙松」「日本大日」「径山石橋可宣」「上方朴菴義鈺」「雲居率菴梵琮」「育王秀巖師瑞」「福巖無二月」「東禅性空智観」「移忠頑石擇砲」「太虚容」「天童無際了派」「断山恩」「雪崖寧」「浄慈北澗敬叟居簡」「靈隠妙峯之善」と二〇人の名を記しており、了派は第一六番目に挙げられている。

さらに夢窓派の古冢周印が室町中期の応永二五年（一四一八）にまとめた『仏祖宗派図』には、「育王仏照拙庵徳光」の法嗣として、「径山浙翁如琰」「天童無際了派」「育王空叟宗

印」「日本大日」「育王孤雲道権」「双径石橋 宣」「靈隠鏡牛心印」「雲居率庵梵琮」「上方朴翁義話」「径山少林 嵩」「淨慈北磡敬叟居簡」「靈隠妙法之善」と二人の名を記しており、了派は第二番目に挙げられている。

これに対し、江戸初期の『正誤宗派図』三においては「育王拙菴徳光 仏照」の法嗣として「径山少林妙崧 仏行」「径山浙翁如琰」「育王孤雲道権」「雲居率庵梵琮」「太虛容」「断山正恩」「西禅無字宗印」「南嶽方広照」「宝峯端蔵主」「福州東禅智観性空」「雪崖 寧」「靈隠鉄牛心印」「虎丘鏡中大」「福厳無一月」「日本大日」「育王空叟宗印」「移忠頑石擇皀」「育王退谷義雲」「天童無際了派」「天童海門師齊」「石菴正皀」「上方朴翁義話」「淨慈北磡敬叟居簡」「育王秀巖師瑞」「靈隠妙峯之善」と実に二五人の名を記しており、了派は第一九番目に挙げられている。

徳光の法を嗣いだ高弟たちで、たとえば禅宗五山に当たる大刹の住持を勤めている禅者のみを挙げてみるなら、第五位の阿育王山広利禅寺に住持した禅者としては秀巖師瑞・退谷義雲・空叟宗印・孤雲道権があり、第四位の南屏山淨慈報恩光孝禅寺に住持した禅者としては少林妙崧・北磡居簡があり、第三位の天童山景德禅寺に住持した禅者としては浙翁如琰・海門師齊・無際了派があり、第二位の北山景德靈隠禅寺に住持した禅者としては鉄牛心印と妙峯之善があり、第一

位の径山興聖万寿禅寺に住持した禅者としては浙翁如琰と少林妙崧が存している。徳光の門下すなわち東庵下の禅者が大刹に住持し、要職を歴任していたことが窺われる。ちなみに了派の場合は五山の中では天童山にしか住持しておらず、かなりの抜擢であったものと見られる。

ただ、残念ながら『枯崖漫録』においても了派が徳光に参じたときの問答商量などは伝えられておらず、如何なる機縁によって印可証明を得ているのかは定かでない。後に詳しく触れるごとく『正法眼蔵』『嗣書』の巻によれば、入宋した道元は天童山で了派に参じた折に、了派の所持していた嗣書を拝覽しているが、そのときの嗣書拝観の消息として、

了派蔵主者、威武人也。今吾子也。徳光参侍径山泉和尚。径山嗣「夾山勳、勳嗣「楊岐演、演嗣「海会白雲端、端嗣「楊岐会、会嗣「慈明円、円嗣「汾陽昭、昭嗣「首山念、念嗣「風穴昭、昭嗣「南院顯、顯嗣「興化獎。獎是臨濟高祖之長嫡也。

これは阿育王山仏照禅師徳光、かきて派無際にあたるを、天童住持なりしとき、小師僧智庚、ひそかにもちきたりて、了然寮にて道元にみせし。ときに大宋嘉定十七年正月二十一日、はじめてこれを見る、喜感いくそばくぞ。

と了派の嗣書の内容をかなり克明に書き記している。ちなみに徳光が揮毫した嗣書の部分のみを書き下してみよう、およそつぎのごとくになる。

了派藏主は、威武の人なり。今、吾が子なり。徳光は径山の泉和尚に参侍す。径山は夾山の勤に嗣ぎ、勤は楊岐の演に嗣ぎ、演は海会白雲の端に嗣ぎ、端は楊岐の会に嗣ぎ、会は慈明の円に嗣ぎ、円は汾陽の昭に嗣ぎ、昭は首山の念に嗣ぎ、念は風穴の昭に嗣ぎ、昭は南院の顛に嗣ぎ、顛は興化の獎に嗣ぐ。獎は是れ臨濟高祖の長嫡なり。

これによれば、了派は明州鄞県東五〇里の阿育王山弘利禅寺において徳光に随侍しており、会下で藏主の要職を勤めていたことが知られ、このとき親しく徳光より嗣書を付与されているわけである。すでに述べたことく了派は建州の建安県の出身であるが、威武というのも建州を含む福建の地一帯の別称であるから、同一地域を指していることになるう。

徳光が阿育王山に住持していたのは、すでに述べたことく淳熙七年（一一八〇）から紹熙四年（一一九三）までの一四年間のことであり、当然のことながら徳光から了派に嗣書が相伝されたのもその間に限られることになる。おそらく了派が徳光の門に投じたのも阿育王山のことであつたと見られ、何らかの機縁によって証悟した了派は徳光より印可され、その後親しく嗣書を相承されているものであろう。

ところで、この時期に日本より大日房能忍（深法禅師）が門人の練中と勝弁を阿育王山の徳光のもとに遣わして法を求め、これに応じて徳光が達磨画像贊と自賛頂相を付与した消

息が知られる^②。徳光が能忍のためにこれらを揮毫したのは、淳熙一六年（日本の文治五年、一一八九）六月三日のことである^③が、当時おそらく了派もまた阿育王山の徳光のもとに随侍していたはずである。道元が了派の嗣書をことさら克明に伝えていたのは、もちろん道元自身の嗣書に対する関心の深さを示すものであるうが、いま一つ能忍が徳光から間接的に伝え受けた頂相や仏舍利などは相違し、眞の嗣書とは如何なるものであるのかを示すためであつたとも見られる^④。

徳光が径山に遷住したのは紹熙四年一月のことであり、この後も了派が徳光に随侍していたのか否かは定かでないが、少なくとも徳光の最晩年までその門に留まっていたわけではない。ただ、『正法眼蔵』「行持」の巻によれば、道元は本師の如浄のことを紹介して、

某甲、そのかみ径山に掛錫するに、光仏照そのとき粥飯頭なりき。上堂していはく、仏法禅道、かならずしも他人の言句をもとむべからず、ただ各自理會、かくのごとくいひて、僧堂裏都不管なりき。雲來兄弟也都不管なり。衲管与「官客」相見追尋するのみなり。仏照ことに仏法の機關をしらす、ひとへに貪名愛利のみなり。仏法もし各自理會ならば、いかでか導師訪道の老古錫あらん。眞箇は光仏照、不曾參禅也。いま諸方長老無道心なる、ただ光仏照箇兒子也。仏法那得「他手裏有」、可「惜可」情。

と取り上げており、径山の徳光に関する消息の一端を伝えて
いる。如浄は曹洞宗の足庵智鑑（一一〇五—一九二）が示寂
して後、径山の徳光に参ずる機会に恵まれたことが知られる。
ただし、如浄は徳光が示す「各自理會」の説示に幻滅し、官
僚と好みを結ぶことに汲々とする徳光の不徹底ぶりを痛烈に
批判しており、道元は「かくのごとくいふに、仏照児孫おほ
くきくものあれど、うらみず」と説明を加えている。後の行
動からすると、如浄は如琰や了派とは交友がかなり深かつ
たものらしいが、それはかつて径山の徳光のもとで両者と同
参であった期間が存したことに依るものであろう。とすれば、
了派は徳光が径山に遷住するのにも随侍し、しばらくの間は
その門に留まっていたと解するべきであらう。
徳光としても径山の繁多な住持職を必ずしも是としていな
かったことが知られ、徳光の真意としては阿育王山に退住し
て自由に学人接化をなしたい意向が存したものらしいから、
如浄が仰ぎ見た徳光の姿はあくまで径山という大刹に身を置
いていた時期の一面であつて、徳光自身の意図とは少し隔た
つていたことも考慮されねばならないであらう。

華亭円覚庵への住庵

ところで、『枯崖漫録』では何らの記載も見られないが、
拙庵徳光のもとを辞して後、一時期、了派は草庵に閑居して

いた時期が存したものらしい。了派と同門に大慧派の率庵
梵琮がいるが、その詩文集である『率庵外集』に、

送派無際住花亭菴。

广大無際円覚性、日日朝朝起于定、語黙不犯露全機、透
過迦邇皆響応。草木發生春為客、魚龍变化水為命、花亭千
尺浪頭高、踏躡船子没巴柄、頼有知音老性空、鐵笛橫吹同
此興、円覚庵中無際翁、逆須提持仏祖令。便於言外度迷
流、当頭撲碎大円鏡、堂空月転印禅床、風軟幽林度清響。
李白桃紅果自成、竹深荷淨花滿径、行人到此便知帰、一笑
無言心自領。
という偈頌が存している。この偈頌は具体的にいつ書かれた
ものかは定かでないが、ある特定の時期における了派の消息
を伝える貴重な内容といつてよい。いま、便宜上、これを書
き下してみると、およそつぎのごとくなるう。

派無際の花亭の菴に住するを送る。

广大にして際無し円覚の性、日日朝朝、定より起ち、語黙犯さ
ず全機を露わし、迦邇を透過して皆な響き応ず。草木の發生は
春を客と為し、魚龍の变化は水を命と為す。花亭の千尺、浪頭
高く、船子を踏躡して巴柄没し。頼いに知音の老性空有り、鐵
笛横に吹いて此の興を同じくす。円覚庵中の無際翁、逆に須ら
く仏祖の令を提持すべし。便ち言外に於いて迷流を度し、当頭
に大円覚を撲碎す。堂は空き月は転じて禅床を印し、風は幽林

に軟かに清響を度る。李は白く桃は紅くして果自ら成り、竹は深く荷は淨らかにして花は徑に満つ。行人は此に到りて便ち帰るを知り、一笑して言無く心自ら領す。

この偈頌の内容としては、古く唐末に青原下の華亭船子すなわち船子徳誠が活躍しているが、そのゆかりの花亭(華亭)の円覚庵に了派が住持するのに対し、同門の梵琮が饒別に送った作にほかならない。徳誠といえは道吾円智(宗智、修一大師、七六九—八三五)や雲巖曇晟(無住大師、七八一—八四一)とともに青原下の薬山惟儼(弘道大師、七四五—八二八)の法を嗣いだ高弟として知られ、華亭江にて船頭をなして夾山善会(伝明大師、八〇五—八八一)というすぐれた法嗣を接得したことで名高い。了派の師である拙庵徳光にも船子徳誠の画像に寄せた仏祖贊のことは残されており、当時、徳誠の詩偈とその古道を慕う諸禅者の頌贊を集めた『船子和尚撥棹歌』二巻一冊が編集されるなど、関心が高まっていた時期であり、了派に徳誠への思い入れが高かったとしても不思議ではない。

華亭とは宋代に秀州すなわち嘉興府(浙江省)に属した華亭県のことであり、嘉興県の東に位置しており、元代には松江府(江蘇省)に属している。ただし、嘉興県の円覚庵については具体的に県内の何れに存したのか、また如何なる歴史の変遷を経た庵なのかなど、詳しい消息についてこれを明ら

かにし得る史料を見出していない。

この「送派無際住花亭菴」の偈頌には、後に住することになる常州の保安寺や明州の天童山に関わるような語句が一切見られないことから、了派が拙庵徳光のもとを辞して保安寺に住するまでの間に居住したものでないかと推測される。ただ、すでに「無際翁」という表現が見られるから、少なくとも了派が修行期間を終えて四〇歳代に入って以降の消息と解するのが妥当であろう。

ところで、老性空とは『増集続伝燈録』巻一「福州東禅智観禅師」の章に「号性空」とある了派や梵琮と同門に当たる性空智観のことを指しているとも解されるが、おそらくかつて華亭江の青龍庵に居住した黄龍派の性空禅師妙普のことを指しているの見てよいであろう。すなわち黄龍派の死心悟新(一〇四三—一一一四)の法を嗣いだ門人に華亭妙普(性空禅師、一〇七一—一一四二)という庵主が存しており、この人は船子徳誠の遺風を慕って嘉興府秀水の青龍の野に庵を構えて住持し、終生にわたって鉄笛を吹くことを好んだとされる。

『嘉泰普燈録』巻一〇「嘉興府華亭性空妙普庵主」の章によれば、妙普は漢州(四川省)の出身で、久しく悟新のもとに随侍した後、嘉興の秀水に到って船子徳誠の遺風を追慕して結庵している。また妙普とは別に『嘉泰普燈録』巻九「嘉興府華亭観音禅師遺其名」の章が存しており、雲門宗の

招提惟湛（広燈禪師）の法を嗣いで華亭の観音に住持した禅者の存在を伝えている。この人は雪竇重顯・天衣義懷・浄衆梵言・招提惟湛・華亭観音と嗣承する雲門宗の禅者であるが、残念ながら法諱が何であったのかが定かでない。

梵琮は船子徳誠の意を知る知音として妙普を挙げており、妙普と同様の人物として了派を見ている。了派自身も道号の無際と法諱の了派という呼称は、まさに船子徳誠と一脈通じるものがあり、因縁浅からぬものを感じたに違いない。了派が嘉亭の円覚庵に居住した時期は定かでないが、おそらく慶元元年（一一九五）に徳光が径山の住持を退き、阿育王山に帰隠して東庵に閑居していることから、その頃には徳光の門を離れて円覚庵に住しているのではないかと推測される。

保安山崇恩彰孝禅寺への開堂出世

ところで、『枯崖漫録』によれば「慶元四年、常の保安に開法す」と記され、了派は慶元四年（一一九八）に初めて常州（江蘇省）の保安に出世開堂したとされている。慶元四年といえば了派が五〇歳になった年に当たり、禅者が開堂する時期としてはいくぶん遅い感はあるが、それだけの派が大器晩成型であったことを物語ろう。ここにいう常州の保安とは、常州宜興県の保安山の南麓に存した崇恩彰孝禅寺（保安寺）のことを指している。

南宋末期の咸淳年間（一二六五—一二七四）に刊行された『咸淳毗陵志』巻一五「山水山」の「宜興」や、明の成化二〇年（一四八四）に刊行された『成化重修毘陵志』巻一七「山川山」の「宜興」によれば「保安山、在県東北二十里」とあり、保安山が常州（毘陵）の宜興県東北二十里に存したことが知られる。一方、同じ『咸淳毗陵志』巻一五「観寺寺院」の「宜興」に、

崇恩彰孝禅院、在県北二十里。陳永定二年建、名「永安」。一云、唐天祐二年、周承祐捨宅建、名「保安」。熙寧三年、更名寿聖保安。隆興初、又名「広福」。乾道間、周参政葵、請為「墳刹」、改「今額」。

とあり、『重修毘陵志』巻二九「寺観二」の「寺宜興」も、保安禅寺、在県北二十里。陳永定二年建、名「永安」。一云、唐天祐二年、周承祐捨宅建、名「保安」。宋熙寧三年、更名寿聖保安。隆興初、又名「広福」。乾道間、周参政葵、請為「墳刹」、改「崇恩彰孝」。国朝復「今名」。正統間、重建千仏閣。

と記しており、崇恩彰孝禅院（保安禅寺）が常州宜興県北二十里に存したことを伝えている。おそらく保安山の一角に寺が存したため、県城からの位置が北と東北で微妙に相違しているのであるろう。この寺は古く陳の永定二年（五五八）に建立され、初めは永安寺と名づけられ、唐末五代には保安寺と改められている。さらに北宋の熙寧三年（一〇七〇）に寿聖

保安寺と改められ、南宋の乾道年間(一一六五—一一七三)には参政の周葵(字は立義、諡は簡惠、惟心居士、一〇九八—一一七四)が墳刹(家刹)となして崇恩彰孝禅寺となしており、通称として保安寺という表記が用いられている。

保安寺に住持した禅者としては、古く五代から北宋初期の頃に雪峰下の長慶慧稜(超覺大師、八五四—九三二)の法を嗣いだ保安連、雲門宗の雲門文偃(匡真禪師、八六四—九四九)の法を嗣いだ保安師密、法眼宗の清涼文益(大法眼禪師、八八五—九五八)の法を嗣いだ保安止などが存しているが、その後しばらく住持者の名が知られていない。一方、南宋初期に保安寺に住持した禅者としては、曹洞宗宏智派に善権法智の法を嗣いだ保安超(雁庵か)があり、さらに楊岐派では月庵善果(一〇七九—一一五二)の法を嗣いだ復庵可封(一一二二—一一八九)が淳熙年間(一一七四—一一八九)に一五年にわたって化導を敷いている。したがって、了派が保安寺に住持したのは可封が示寂してわずかに一〇年余りを経た時期であったことになる。また「枯崖漫録」巻下「龍溪闍禪師」の項によれば、南宋末期に龍溪闍という禅者が保安寺に住持しているが、この人は浙翁如琰の法を嗣いだ龍溪文と同一人物と見られ、了派にとっては法姪に当たる禅者である。④

ところで、『増集統伝燈録』巻一「四明天童無際了派禪師」の章には、「伝記的な記載は全く存していないが、つぎのこと

き五つの上堂が載せられている。

- (1) 上堂。三十五、月円当戸。然雖匠地普天、要且毫毫不露。对景憑誰話、此心、令人驪憶寒山子。
 - (2) 上堂。諸人、十二時中、上來下去、折旋俯仰、起居問訊、讓崇恩一点不得。只今坐立儼然、實主交參、面面相觀、崇恩亦讓諸人一点不得。既然彼此不相讓、為什麼自作障礙。喝一喝。因風吹火、用力不多。
 - (3) 上堂。昨夜安排一段禪、天明起來都忘却、而今打鼓衆雲臻、对面臨時旋捏合。遂回頭喚侍者云、記取者一著。
 - (4) 上堂。釈迦老子、昔向今辰、入大寂定。堪笑天下衲僧、刻舟求劍。二千餘年、區區不已。崇恩今日不動神機、捺軋疊疊鼻孔、不圖打草虵驚。只要大家相見。汝等諸人、各宜子細觀瞻、莫教蹉過。遂合掌云、不審不審。
 - (5) 上堂。仏法在「你日用處」、在「你著衣喫飯處」、在「你語言酌許處」、在「你行住坐臥處」、在「你屙屎送尿處」。擬心思量便不是也。咄。啼得血流無用處、不如緘口過殘春。
- この五つの上堂の中で、(1)の上堂は八月一日の十五夜(中秋)に満月の光が万戸を遍く照らしているさまを詠じたものである。(2)の上堂は十二時中の用心について示したものであるが、その中で了派は「崇恩、亦た諸人を讓すること一点も得ず」と述べており、自らを「崇恩」と称している。この上堂は保安寺(崇恩寺)の修行僧が問答を挑んでくるが、

誰も了派を一点も護ることができない、そのありようを正しくとらえ切れない障礙とは何なのかを問いつめる内容である。(3)の上堂は坐禅など日々の行持を通して禅旨をとらえていくべきことを示したものである。(4)の上堂においても「崇恩、今日、神機を動かさず、瞿曇の鼻孔を抜転し」と述べており、自らを「崇恩」と称している。この上堂では二月十五日の仏涅槃に際し、釈尊の眞の仏法をどのようにとらえるべきかを修行僧に迫っている。(5)の上堂は仏法が自らの日常の起居動作の中にこそ在ることを門下の修行僧に提示した内容である。いずれも了派がなした上堂として貴重なものであり、その禅風を知る上でも興味深い。

この五つの上堂の中で(2)と(4)の二つが保安山崇恩寺でなされたものであることから、(5)については断定はできないものの、これら『増集統伝燈録』に載る五つの上堂は、ほぼ保安山でなされたものであると推測され、なぜかその後の天童山における上堂は収められていないことが窺われる。

一方、大慧派の偃溪広蘭の法を嗣いだ枯崖円悟が撰した『枯崖漫録』巻中「龍峰定禪師」の項には、

龍峰定禪師、福之長溪人。嘗過毗陵時思庵、依無際。值開堂、拳、釈迦弥勒是他奴、他是阿誰。定曰、不。又拳、似之。又曰、不。無際拈住曰、一不。定失声答曰、泥団土塊。後於永嘉龍翔文絶象会中分坐。無際在明之太白、

詒書趣帰。昔仏智老師亦侍無際、故嘗言之。

という記事が存している。龍峰定は福州（福建省）長溪の人であり、毘陵の時思庵に赴いて了派のもとに身を寄せていることが知られる。毘陵とはすでに触れたことく常州一帯の別称であり、時思庵がどこに存した庵なのかは定かでないが、おそらく保安山の一角かその近隣に存した草庵と見てよいであろう。あるいは了派は一時期が保安山崇恩寺の住持を退いて時思庵に寓居することが存したものであろうか。

龍峰定はこのとき時思庵に開堂した了派と問答をなしており、了派の接化が知られて興味深い。問答の詳細は了派が具体的に如何なる学人指導をなしたのが窺えてきわめて貴重であるので、以下、若干の考察をなしておきたい。はじめに問答の部分のみを書き下すならば、

嘗て毘陵の時思庵を過ぎ、無際に依る。開堂に拳するに値つ、「釈迦・弥勒は是れ他の奴、他是れ阿誰ぞ」と。定曰く、「会せず」と。又た之れに拳似するに、又た曰く、「会せず」と。無際、拈住して曰く、「一も会せず、二も会せず」と。定、失声して答えて曰く、「泥団土塊」と。

といった具合になろう。時思庵の了派は龍峰定に対して「釈迦も弥勒もそいつの雇われ人だ。そいつとは誰だ」と迫っている。このとき龍峰定は「会せず」と答えているから、答えが出せなかったのである。了派は同じように重ねて示して

迫るが、やはり龍峰定は「会せず」と答えている。すると了派は龍峰定を打ち据えて、「一度目も分ならず、二度目も分らないのか」と言い放つ。拈とは打つこと、または刺すことであり、拈住で打ち据える意となる。このとき龍峰定は思わず「泥団土塊」と答えているが、失声とは思わず知らず声を立てることであり、覚えず出たことばである。このとき了派が問題としているのは、仏性とか本来の面目といった類いのことであるが、龍峰定は二度とも「会せず」と答えている。これは文字通り理解できないという意にも取れようが、おそらく龍峰定としてはそれが徹底して我々の感覚知覚ではとらえることができないものだと思つたのではなからうか。泥団とは泥を丸めて作った団子であり、土塊も土の固まり、土くれのことであるから、ともに人間の価値基準からすると意味のないもの、分別心をもっては捉えることのできないものを意味しよう。

その後、龍峰定は了派のもとを辞して温州（浙江省）永嘉県を流れる甌江の中洲に存する江心山龍翔禅寺に赴き、嗣承未詳の絶象 文のもとで分座説法している。その後、了派が天童山に住持した際、書を龍峰定に送つて天童山に呼び寄せたことから、再び帰参して了派のもとに投じている。しかも枯崖円悟が言うところによると、かつて僊溪広闡も了派のもとに随侍し、龍峰定と交友が存したものらしく、枯崖円悟も

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

広闡から龍峰定の消息を直に聞く機会が存したことを伝えている。

実際に広闡が了派に参学した消息については、中書舎人の林希逸（字は肅翁・淵翁、号は竹溪）の『竹溪鬳齋十一藁統集』巻二「墓誌銘」に載る「径山僊溪仏智禅师塔銘」に、

十八受戒。其初調_レ印鏡牛、印名_二具眼深、奇_レ之曰、法煉也。偏_二参諸老、与_二少室睦・無際派、追隨甚久。卒嗣_二琰浙翁。

初見_二於天童、針芥雖_レ投、自知_レ未_レ穩。去再見_二於双徑、翁知_二梅將_レ熟矣。

とあり、同じく『僊溪和尚語録』巻末に所収される林希逸が撰した「塔銘」にも、

十八受_二戒具。初調_二印鏡牛、印名_二具眼深、奇_レ之曰、法煉也。偏_二参諸老、与_二少室睦・無際派、追隨甚久。卒嗣_二琰浙翁。

見_二於天童、針芥相投、自知_レ未_レ穩。去再見_二双徑、翁知_二梅將_レ熟矣。

と若干ながら字句の異同が見られるが、ほぼ同様に記されている。広闡は福州侯官県的林氏の出身で、開禧二年（一一〇六）に一八歳で受具した後、初めに大慧派の鉄牛心印に謁している。心印は拙庵徳光の法嗣であるから、了派や浙翁如琰とは同門に当たっており、広闡の人となりを見て仏法を担う器であるとして「法煉なり」と称えたという。さらに広闡は諸方に遍参し、松源派の少室光睦と大慧派の了派の両

禪者に随侍することがもつとも久しかったとされる。光睦は虎丘派（松源派祖）の松源崇嶽の法を嗣いだ高弟であり、台州（浙江省）黄巖県の瑞巖浄土禅院などに化導を敷いたことが知られている。やがて広聞は天童山に赴いて浙翁如琰のもとに投じて機縁が契い、嘉定二年（一一二八）に如琰が径山に住持した際にも相見している。したがって、広聞がかつて了派に随侍したのも開禧二年から嘉定一年までの間ということになり、おそらく了派が保安寺ないし時思庵に住していた時期に相当しよう。ただ、先の『枯崖漫録』の記事からすると、広聞は鼈峰定と同じく天童山でも了派に参学する機会に恵まれていたものようであるから、後には天童山の了派と径山の如琰のもとを往来していたとも解されよう。

いま一つ興味深いのは『偃溪和尚語録』巻下「偈頌」に、
送一徹二公再参無際和尚。

両公未見無際前、謂從本有成話墮。両公既見無際後、謂是不同成両箇。明知見与未見時、蒼龍終不澄潭臥、雲巖晚歸玲瓏巖、老兒家有彌天禍。口皮辺禅憤弄弄、動輒引人人荒草、不知両公竟何意、春風又問東南道。貧思旧債濟北驢、再欲一頓懲作麼。當時失却一隻眼、賊過関門夾山老、後三十年有話在、珍重此行休放過。という偈頌が伝えられていることである。ここにいう「一徹二公」とは、一徹二という名の一人の禪者を指している

のではなく、文の初めに「両公、未だ無際に見えざる前、本より有り」と謂いて話墮を成す。両公、既に無際に見えて後、是れ同じからずと謂いて両箇と成る」とあるから、一と徹という二人の禪者を指している。この偈頌は両者が再び了派に参学せんとするのの際し、広聞が饒別に送った作である。また玲瓏巖の語が見られるから、両者が了派のもとに帰参したのは玲瓏巖が存する天童山景德寺での消息であったことも確かめられる。一については如何なる禪者なのか定かでないが、もしかしたら道元が入宋して天童山で関わった西堂の惟一のことではないかと推測される。また徹については了派の法を嗣いだ高弟である無境印徹のことを指しているものと見られ、印徹が了派に参学した過程が知られて興味深い。印徹のことは法嗣を考察する際に詳しく触れたい。

天童山景德禅寺への陞住

ところで、『枯崖漫録』によれば「嘉定の間、天童に在り」とあって、了派が嘉定年間（一一二〇八—一一二四）に明州鄞県東六〇里の天童山景德禅寺に住持していたことを伝えている。具体的な入寺の年時は記されていないが、状況的に嘉定一三年（一一二〇）より以降のことと推測され、了派が天童山で住持として活動していた期間は多くて数年間に限られよう。了派が天童山に住持したのは宰相の史彌遠（字は同叔、

諡は忠獻、一一六四—一二三三(一)が五山十刹制度を制定したとされる時期に相当しており、天童山は禅宗五山の第三位に列せられている。実際に『扶桑五山記』一「天童住持位次」には、了派の前後における住持の変遷について、

廿七、浙翁琰禪師。廿八、癡鈍穎禪師。廿九、海門齊禪師。三十、無際派禪師。卅一、淨禪師。卅二、枯禪鑄禪師。卅三、晦岩光禪師。

と記されている。当時、大慧派の浙翁如琰が第二七世に住持しており、『平齋文集』巻三「墓誌」に所収される「仏心禪師塔銘」によれば、如琰は嘉定十一年(一二二八)に天童山から杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺に遷住していることが判明^③。その後は明州奉化県の雪竇山資聖禅寺の住持であつた楊岐派の癡鈍智穎が第二八世に就任し、さらに如琰や了派と同門に当たる海門師齊が台州黃巖県の瑞巖浄土禅院の住持から第二九世として入寺して化導を敷いている。その後、漸く如琰や師齊と同じく拙庵徳光の高弟であつた了派が第三〇世の住持に迎えられているわけである。おそらく了派は同門の師齊が退住するか示寂するに際し、その依頼を受けるかたちで天童山に勅住しているものと見られる。師齊の墓塔は天童山の玲瓏巖の西崖に建立されているが、あるいは墓塔開眼や入塔納骨の仏事などは新命住持の了派が同門の好みて執り行なっているのかも知れない^④。

天童山の無際了派とその門流(佐藤)

ちなみに道元は長円寺本『正法眼蔵隨聞記』巻四において「宋土海門禪師」の因縁を取り上げ、師齊が天童山の住持であつたときに門下の元首座が自ら後堂首座の職を望んだ頼末を取り上げて示しているが、これは道元が天童山の了派のもつたにあつた際に実際に伝え聞いた逸話であろう。

また『石刻史料新編』第三輯第八巻の『鄞県志』巻五九「金石」に所収される「慶元府太古名山天童景德禅寺第四十代別山智禪師塔銘」によれば、

十九歳、往成都昭覺、依「劬牛全」、始学出世法。後出峽抵公安、聞「僧諱六巖語」喜之、径往「蘇之宮羅」謁「巖」巖著之堂中。因閱「華嚴法界品善財見」弥勒樓閣、因緣入已還閉之語、恍然如「夢而覺」、如「醉而醒」。遂領「雲雲見」桃花「機縁」云、万緑叢中紅一点、幾人歡喜幾人嘆。巖頌之。隨衆二年、往見浙翁琰。無際派・高源泉・淳庵浄・妙峯善、皆有「頭角之蒼」。最後見「無準範於雪竇」。

と記され、破庵派の無準師範の法を嗣いだ別山智(智大王、一二〇〇—一二六〇)が参学期に了派のもとにも投じていることが知られる。祖智は蜀(四川省)の順慶の出身で俗姓は楊氏とされ、一四歳のときに出家得度し、嘉定十一年(一二二八)に一九歳で成都府(四川省)成都東北一五里の昭覺禅寺に赴いて始めて本格的に佛法を学んでいる。やがて三峡を下って湖北の禅林(公安寺)に掛搭した折に一僧が楊岐派の六

巖 殺の語を誦しているのを聞いて啓発し、蘇州（江蘇省）呉県西南六〇里の穹窿山福臻禪院（穹窿寺）に到って六巖殺に謁してその禅旨に心酔している。六巖殺に参学すること二年にして再び行脚し、当代に名高い諸禅者のもとを歴参している。祖智が最初に参じたのは大慧派の浙翁如琰であり、定期的にすでに杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺の住持であったことが知られる。ついで了派にも参学しているわけであるが、これも天童山において参学しているものと見られる。さらに祖智は楊岐派の高原祖泉（一一二九）や淳庵善浄（純庵）および大慧派の妙峯之善（一一五二—一二三五）などにも参学しており、彼らの住持地は示されていないが、ともに祖智のすぐれた才腕を認めたことを伝えている。

最後に祖智は明州奉化県西北の雪竇山資聖禅寺において破庵派の無準師範のもとに投じ、やがてその法を嗣いで出世している。四川出身の祖智は日本の道元とは同年の生まれであり、あるいは天童山の了派のもとで道元と同参であった可能性も存するが、状況的には若干ながら祖智のほうが先に了派に参学しているのではないかと推測される。

さらに天台宗の頑空智覚（真悟大師）がやはり修行期に天童山の了派に参禅している消息が知られる。すなわち、『物初贖語』巻三「塔銘」に載る大慧派の物初大観（一一二〇—

一一二八）が撰した「頑空法師塔銘」には、

蚤年假道禪関、入太白無際之室、与諸老相抑揚、故見於講貫者、脱洒円活、与執紙上語者、大遠邈矣
という記事が存し、南宋末期から元代における天台宗の僧伝史料である『統仏祖統紀』巻一「法師智覚」の章にも、

早年假道禪関、入太白無際之室、与諸老相抑揚、故見于講貫者、脱洒円活、与執紙上語者、大遠邈矣

とほぼ同様に継承されている。大観は大慧派の北磻居簡の法嗣であるから、大観にとつて了派は法伯に当たっており、記事はきわめて信憑性の高いものであろう。頑空智覚は東嘉すなわち温州（浙江省）の項氏の出身で、天台宗の嘯巖文虎に参学した教僧であり、広智系の機先浄悟（豁菴、一一四九—一二〇七）の法孫に当たっている。ただ、智覚の生没年につ

いては、なぜか『物初贖語』『統仏祖統紀』がともに何ら伝えておらず、師の文虎の事跡も定かでないため、具体的な年月などは判明しない。蚤年とは早年と同じく若い頃の意であるから、智覚は天台宗の教学を修めていた若い時期に天童山に掛搭して了派の方丈にも入室し、了派やその門下の諸禅者とも問答商量して禅宗の接化に浴した経験が存したことが知られる。しかも了派のもとに参禅した消息が智覚にとつて後に天台の教学にも活かされていたことを伝えている。

このほか後世の編集であるが、『南宋元明禅林僧宝伝』巻六「北磻簡禅師」の章に、

未幾、出世台州紫籙、遷報恩及公孝、名大振。退居武林飛來峰之陰、卿士猶物色之、不顧。當是時、出弘照之門者、有靈隱善・徑山琰・天童派・東禪觀・上方鋸、交章勸簡、応「汗江刺史之命、又不顧。而江州使者、以東林・雲居力致之、簡亦不顧。

という記事が存している。これは北磻居簡が杭州錢塘県の武林山（靈隱）の飛來峰の陰に退居隱棲した消息をいう一段であるが、このとき同門に当たる靈隱寺の妙峰之善と徑山の浙翁如琰と天童山の了派、それに福州東禪寺の性空智觀と湖州上方寺の朴翁義鋸らがそれぞれ文章を認めて居簡に呈し、再び大剌で接化することを願ったとされる。しかしながら、居簡はその後も廬山東林寺や洪州（江西省）建昌県の雲居山真如寺からの要請を辞退しており、しばらく世縁を途絶していたとされる。ただし、了派と居簡との直接の関わりを伝えるような記事は、居簡の『北磻文集』や『北磻詩集』にも見られないため、この事実については定かでない。

日本僧道元と天童山の新到列位問題

冒頭で触れたごとく日本僧道元が入宋して最初に参学したのは天童山の了派であったが、黄龍派（千光派）の明全（仏樹房、一一八四—一二二五）とともに道元が天童山に到ったとき、掛搭安居は無難には進まなかったもののようである。と

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

きに道元とともに明全に随侍して天童山に上山したのは、同じ建仁寺住侶の廓然・高照であったことが知られている。

嘉定一六年（一二三三）四月に明州慶元府の港に着岸した道元は、暫しの間、師の明全とともに船から下りて景福律寺など明州府城の寺院を参観しているものらしく、『典座教訓』によれば、五月四日には船上で明州鄞東五〇里の阿育王山弘利禅寺から到った典座との間で有名な問答が展開されている。帰国した直後に道元が亡き先師明全の示寂前後の消息をまとめた『舍利相伝記』には、了派の名は記されていないものの、

ここに貞応二年みづのとのひつじ二月二十二日、建仁寺をはなれて、はるかに大宋国におもむく。五月十三日に慶元府太白名山天童景德禅寺にいたる。このところに錫をとどむるゆゑは、このみぎり、かの本師千光の旧游なればなり。

と記されている。明全が道元らを伴って入宋のため京都の建仁寺を出発したのは日本の貞応二年（一二三三）二月二日のことであり、ようやく天童山に到着したのは五月三日であったことが知られる。明全は入宋渡航に際して僧侶の身分を証明する必需品であった戒牒（受戒証明書）を携帯しており、度牒（得度証明書）も併せて携帯していたものと見られる。また当然のことながら、状況としては道元ら随侍の弟子たちも同じように身分保証として度牒と戒牒を所持し、準備

万端を整えて入宋渡航しているはずである。

明全や道元らが天童山を目指したのは、あくまで先師の明庵栄西（千光法師、葉上房、一一四一—一二二五）がかつて黄龍派の虚庵懐敏に参学したゆかりの地であったことに由来しており、初めから了派に参学することを目的として上山したわけではない。ただ、このとき明全ひとりが単独に天童山に赴いたと解するのはきわめて不自然であり、おそらく共に入宋した道元・廓然・高照ら随侍の僧衆もこの日に同じく天童山に辿り着いたと見るのが妥当であろう。

宝慶元年（一二三五）五月に明全が示寂した際、道元は明全所持の戒牒の端にその事跡を書き記した「明全和尚戒牒奥書」を残しているが、その中で明全が入宋してから逝去するまでの消息として、

已入唐、投_二天童山_一、入_二了然寮_一。于_レ時堂頭無際了派禪師住持也。首座智明、都寺師広。全公、在天童_レ經_レ三年、四十二歳、五月廿七日辰時、円_レ寂于_レ了然。于_レ時大宋宝慶元年乙酉載也。于_レ時堂頭和尚如淨禪師。全公入宋之時、乃大宋嘉定十六年癸未也。

という記載をなしている。明全や道元らが天童山に到ったとき、住持を勤めていたのが了派であったこと、首座の智明と都寺の師広が了派を補佐して東西両班の職位の筆頭にあったことが明確に記されている。

ところが、五月一三日に明全・道元らが天童山に上山して掛搭することと見られるが、このとき日本僧ないし外国僧に対する新到列位の問題が大きく立ちはだかったとされる。この問題を全面的に史実として捉えるべきなのか、まったくの虚構として史料に記された内容を全て意味なく捨て去るべきなのか、道元の入宋当初の消息をめぐって意見の別れるところではあるが、時期的には了派が天童山の住持であったときに起こったできごとということになる。おそらく日本僧が所持していた度牒や戒牒については何ら問題なく天童山でも認められたものであるが、それとは別に日本僧の座位に対する待遇の問題が浮上してきたのである。

そもそも『三大尊行状記』の「越州吉祥山永平開關道元和尚大禪師行状記」や『永平三祖行業記』の「初祖道元禪師」の章、さらに古写本『建誓記』では、かなりの分量を費やして三度にわたる道元の表書を載せており、この問題を解決させた功績を大きく称えている。

古伝が多くの紙面を費やして書き残している以上、この記事を史実に即しない単なる作り話として一蹴してしまうのは、きわめて問題ではなからうか。この内容は単に道元ひとりの問題などではなく、その後に入宋する多くの日本僧をも巻き込んだ重大な事跡が課題となっている。また内容は天童山一ヶ寺の判断を遥かに超え、五山全体ないし南宋の佛教

界全体に対する日本僧側からの待遇改善運動といつてよいものである。そこで以下、ことの顛末について、道元のみでなく天童山住持の了派の立場をも踏まえて論じてみたい。すなわち、『三大尊行状記』の道元の章によれば、一度目の道元の表書について、

始掛錫天童、廿四歳也。不依戒次、欲列新戒位。師表書云、此娑婆世界者、釈尊遺法流布国、戒法已弘通。仏法位次、不_レ論_二尊卑老少_一、先受戒者在_二先座_一、後受戒者在_二後座_一、蓋是七仏諸祖通戒也。何至_二日本・大宋_一可有_二別異_一哉。天童一山住持・両班・前資・勳旧、以_二先例_一尚定_二新戒位_一。其故、先入唐諸僧、始_二伝教・弘法_一、至_二汝師翁用詳上人_一、尽著_二新戒_一、蓋是国例也。大國小国之別異也。

と記しており、『永平三祖行業記』の道元の章もほぼ同文となつている。この点は瑞長本『建徳記』においても天童山の了派のもとに掛錫した記事につづいて、

戒臘次第二八不_レ立、新戒ノ位ニ列スヘキトテ、即時ニ成タル僧ノ如ク、大衆ノ末ニ列スヘシト云。道元闍給テ云、七仏已来、未聞未見ノ御法也、イワレナシトテ、不審ヲ立テ給。其表書ニ云、

此娑婆世界之内、釈尊遺法流布之國、戒法已弘通。仏法位次、不_レ論_二尊卑老少_一、先受戒者在_二前座_一、後受戒者在_二後座_一、蓋是七仏已来諸祖通戒也。何至_二日本・大宋_一可有_二差異_一、ト

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

云々。

如_レ是書ヲ捧ケ給エハ、天童一山ノ住持・両班・大衆集テ評定シ、先例ナリトテ、新戒ノ位ニ立ツヘシト云。其謂レハ、汝ヨリ已前、入唐ノ諸僧、最澄・空海ヲ始トシテ、汝之師翁用詳上人ニ至ルマテ、皆新戒ノ位ニ立ツ。蓋是国ノ例也。大國小国之差異也ト返事アリ。

と伝えてゐる。嘉定一六年に道元が明全に随侍して天童山に掛搭した際、天童山の当局は日本僧に対しては戒牒に基づかず、受戒してからの年次である戒臘に依らずに、初めて受戒したばかりの新参者の座である新戒の位に列せんとしたものでらしい。ときに道元はこれを不服として天童山に表書を呈して是正を訴えており、その言い分を書き下してみよう。

此の娑婆世界は、釈尊の遺法流布の国なり、戒法已に弘通す。仏法の位次は、尊卑老少を論ぜず、先に受戒せし者は先座に在り、後に受戒せし者は後座に在り、蓋し是れ七仏諸祖の通戒なり。何ぞ日本・大宋に至りて別異有るべけんや。

というものであつたとされる。道元の申し立てた内容としては、仏法が流布しているこの娑婆世界においては尊卑や老若の相違ではなく、あくまで受戒した先後によつて座席が定められるべきであつて、日本と大宋で別異を認めるなどあつてはならない、と不当な差別待遇に対して改善を求めて訴えているわけである。このとき天童山の住持である了派は山内の

東西の両班や前資・勤旧さらには修行僧の代表などの意見を取りまとめた結果、道元の訴えを却下し、先例に基づいて日本僧を新戒の位のままに定めたというのである。両班とは都寺の師広らの東班衆と首座の智明らの西班衆のことであり、前資・勤旧とはかつて天童山の要職を歴任した両班などの前任者であり、いわば年齢の高い古老たちと見てよい。

ときに了派ら天童山の当局がとった対応としては、

先に入唐せし諸僧、伝教・弘法に始まり、汝が師翁用詳上人に至るまで、尽く新戒に著く、蓋し是れ国の例なり。大国・小国の別異なり。

と記されており、その理由が簡略に示されている。この内容からすると、天童山側では表書を呈した道元のみでなく、ともに入宋した明全さらに廓然・高照ら他の日本僧全員に対しても同様の処遇をなしていたことになり、古くより日本僧は戒臘に依らずに末席に置かれるのを常としたものらしい。唐代に赴いた天台宗の最澄（伝教大師、七六七—八二二）や真言宗（密教）の空海（弘法大師、七七四—八三五）の先例がもともとの原文に存したか否かは問題であるうが、道元の師翁に当たる用詳上人（葉上房）すなわち黄龍派の明庵宋西の場合ですら、数一〇年前に天童山ないし中国の寺院においてこの先例に甘んじたというのである。住持の了派の立場としては、あくまで先例により大国と小国の差異を認め、日本僧ないし

外国僧に対しては戒臘に基づかず、あくまで新戒の席に配置する処置を崩さなかつたのである。これが史実であるならば、ときの天童山の住持であつた了派が中心となつて道元の上表に対応し、その申請を却下していることになるう。

正しい仏法（正法）を求めて入宋した血氣盛んな若き道元であれば、当然、こうした外国僧全体に対する不当な差別待遇に素直に甘んじることなどできなかつたはずであるう。『三大尊行状記』によれば、二度目の表書について、

師又重表書。諸仏教法、依国而豈可異乎。一家之兄弟、一仏之戒臘、都不可有差異。先座後座、支干分明、年月争乱乎。一寺不能断、五山評議、尚用旧規。

と記されており、『永平三祖行業記』においてもほぼ同文となつている。また瑞長本『建誓記』にも、

道元又重テ表書捧テ云、諸仏教法、依国而豈可異乎。一家之兄弟、一仏之戒臘、都不可有差異。前座後座、復支分明、年月争乱。

如此書ヲ捧ケ給ハ、天童一山不得理、五山評定シ、尚先例也ト、新戒ノ分ニ定ム。

とやはり同様に記されている。道元としては、あくまで仏教の正理からして受戒者は国の違いを越えて戒臘に基づいて同等に扱われなければならない、と重ねて訴えたわけである。これに対して、天童山側では一ヶ寺のみで判断することがで

きず、五山全体の評議をなし、その結果として従来通りの先例（旧規）を遵守することにしたとされるから、やはり二度目の表書でも道元の訴えは認められなかったのである。

了派が天童山に住持していた当時、そのほかの五山の諸寺に住持として化導を敷いていたのは如何なる禅者であろうか。五山第一位である杭州余杭県の径山興聖万寿寺には了派と同門に当たる大慧派の浙翁如琰が住持しており、後に道元自身がそのもとに参学している。五山第二位の杭州錢塘県の北山景德靈隱禅寺には虎丘派の枯禪自鏡が住持していたものらしいが、この人は如浄の後に天童山に住持したことで名高い。また五山第五位の明州鄞県の阿育王山弘利禅寺には虎丘派の晦巖大光が住持しており、後に諸山歴遊の過程で道元も大光に参じたことが知られる。一方、五山第四位の杭州錢塘県の南屏山浄慈報恩光孝禅寺では、この時点で了派と同門に当たる大慧派の少林妙崧（仏行禪師）が再住していた時期ではないかと見られ、その後まもなく曹洞宗の如浄が再住することになる。もし、新到列位の問題が実際に五山全体の評議に及んだとすると、道元が記した第二回の表書は、径山の浙翁如琰、靈隱寺の枯禪自鏡、浄慈寺の少林妙崧、阿育王山の晦巖大光らのもとにも回覧され、彼らの目にも止まったことになる。

この訴えが五山の評議においても却下された通達を知らさ

れた道元は、なお屈服することなく異議を申し立て、三度目の表書を天童山に呈している。『三大尊行状記』によれば、三度目の表書について、

三度表書云、仏法徧沙界、戒光照十方。況経曰、今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是我子。就中此娑婆世界者、釈迦牟尼仏土也、国已仏国也、人皆仏子也。兄弟不可混乱、次位法爾、具仏法世法、皆任正理、天神地祇、不昧理非。此理若不達、恐是乱世也。賢者不居乱世、直人不雜誑者。仏家膺次已不正者、王法正理豈可明察。幸仰中和之聖徳、泣宣優僧之鄙懐。天裁若無私、伏乞正戒次。取意。嘉定聖主、被下勅宣云、和僧所申有其謂、須依膺次。自爾、師名不隱叢林、優僧膺依之定了。遂掛錫于天童。

とかなり詳しくその間の事情を記しており、『永平三祖行業記』もほぼ同文である。この点は瑞長本『建漸記』にも、

道元又重テ表書ヲ捧テ云、仏法徧沙界、戒光照十方。況乎経曰、今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是我子。就中此娑婆世界者、釈迦牟尼仏之仏土也、国已仏国也、人皆仏子也。兄弟不可混乱、次位法爾、具仏法世法、任正理、天神地祇、不昧理非。此理若不達、恐是乱世也。賢者不居乱世、直人不雜誑者。仏家膺次已不正者、王法正理豈可明察。幸仰中和聖徳、泣宣和僧之鄙懐。天裁若無私、伏乞正戒次。取意。寧宗、仁文招武恭孝皇帝、嘉定年中主也、被下勅宣言、

和僧所申有「其謂、須依臘次、自爾、師名不隱叢林、大唐國裡普聞。」

是迄三度捧「給表書」、本記録ノ假二写ス也。日本國僧入唐、作僧ノ時ノ年月ノ戒臘二立事ハ、道元和尚ヨリ始メテ定ル也。

と同じく記されている。この三度目の表書は単に天童山ないし五山の枠に止まらず、仏法と王法のあり方にまで及んでおり、しかも嘉定年間（一二〇七—一二二四）の皇帝である南宋第四代の寧宗（名は趙擴、仁文招武恭孝皇帝、一一六八—一二二四、在位は一一九四—一二二四）への歎願というかたちを取っている。これを入宋までもない一介の日本僧にすぎない道元が自ら認めたものとする、ことは宋の朝廷をも巻き込んだきわめて痛烈な訴えへと変わっていったのであり、かなりの覚悟をもって道元は三度目の表書の草案を練ったものというところになる。従来通りの慣例を重視する天童山ないし五山に対して、同じ訴えをなしても事態が開閉進展することは望み得なかつたに相違ない。ここで残された手段としては、当然のことながら、五山十刹制度そのものを制定した南宋の朝廷に働きかける以外に術がなくなつたわけであり、道元としては正理を拠り所としてあえて寧宗への上表というきわめて大それた進言を目論んだものであろう。

当時は五山十刹の官刹制度が成立してまもない時期であり、これを制定した宰相の史彌遠（字は同叔、諡は忠獻、一一

六四—一二三三）やときの皇帝である寧宗は、仏教とくに禅宗教団と積極的に関わつており、禅宗叢林の規矩の充実を目指していたはずであろう。しだいに日本僧が増加していく中で、外国僧全体に対する待遇改善の申し出が日本僧道元の側から出されたとすれば、それなりに真摯に受け止めざるを得なかつたのではないかと推測される。この三度目の表書が史実とすれば、道元の呈した文書が天童山の住持である了派から国都杭州の府城に届けられ、さらに皇帝の寧宗によつて読まれたものということになる。また了派が一介の日本僧の申し出を三度まで真摯に受け取つてくれている点で、了派の誠意も感じられる内容となっている。ときに寧宗は日本僧道元の上書を実際に読んだとされ、道元の訴えを受け入れて「和僧の申す所、其の謂れ有り、須らく臘次に依るべし」という勅宣を天童山ないし五山に下したと伝えられる。日本僧が進言している内容はそれなりに正当の理由があるから、その申し出に沿つて戒臘によつて処理すべきであるとの判断を下したというのであり、ときの皇帝の判断を持ち出している点で、逆にきわめて史実性を増しているとも解される。

しかも『三大尊行状記』によれば「爾れより師の名、叢林に隠れず、倭僧の臆、之れに依りて定め了る」と記されており、瑞長本『建徳記』でも「爾れより師の名、叢林に隠れず、大唐國裡普く聞こゆ」とあり、さらに「是れ迄、三度捧

げ給う表書、本記録の俚に写すなり。日本国僧の入唐、作僧の時の年月の戒臘に立つる事は、道元和尚より始めて定まるなり」と注記が付されている。これらの記述によるならば、この三度にわたる表書によって、道元の名は南宋の叢林に広く知られることになり、日本国の僧が渡航して江南叢林に掛搭した場合、正しく戒臘に基づいた戒臘の次第によって座位が定められるようになったという。しかも、「本記録の俚に写すなり」とあるから、古写本『建誓記』は本記録をそのままに収録したことを明記しており、そこに恣意的な判断や添削を加えていないことが述べられている。本記録というのが具体的に如何なる文献を指しているのかは定かでないが、『建誓記』が著わされた室町中期までは、永平寺に道元自身の手控えがその写しのごとき何らかの基づく古史料が存したものであろうか。

いずれにせよ、この日本僧ないし外国僧全体に対する新到列位是正の問題はきわめて現実的な内容であつて、三度にわたる上書が事実を忠実に伝えているのであれば、道元が入宋した当初になした輝かしい功績として記録されたわけであり、当時の天童山における了派と道元との師弟関係を知る上でも重要な事跡といえるだろう。しかも伝記作者はこの事跡を多くの紙面を割いて細かに書き記しているのであり、道元の伝記を著す際、内容の取捨や吟味を経た上であえて貴重

な消息として記録に留められたものである。この点、『三大尊行状記』の道元の章をまとめたのが、道元と同じく入宋経験のある徹通義介（義鑑、一一二九—一三〇九）であつたとすると、この新到列位の待遇改善運動こそは他を差し置いて是が非でも記録に残しておきたい道元在宋中の功績であつたのではなからうか。

さらに言うなら、道元が亡くなつてわずか数十年を経て鎌倉末期に書かれた『三大尊行状記』の内容は、当時、臨済宗の禅者や日本の朝廷・幕府の官僚などが見聞した際にも何ら違和感なく読まれるものでなければならなかつたはずであり、とりわけ在宋中の記事は当時の入宋僧さらに入元僧にとつても十分に肯けるものとして書かれたと見られる。新到列位の問題もそうした観点からすると、ありもしなかつた荒唐無稽な内容が延々と列記された取るに足らぬ記事などではなく、その後につづく入宋・入元僧に対し、かつて道元が在宋中になした希有なる功績に思いを馳せてもらうべく、あえて残されていた記録を長文のまま挿入した貴重な消息であつたと見るべきであらう。このように道元が天童山の了派のもとでなした新到列位の是正運動とそのためになした上書は、かたりの面で史実を伝えていると解せられ、特筆すべきこととして長文の記録に残された点で、現今の曖昧な判断基準のみで無闇に抹消すべきものではなからう。日本僧全体の体

面を保つため若き道元が差別待遇に敢然と立ち向かつた輝かしい功績は、辛うじて後世に残されたともいえるのである。

道元の修行と了派の嗣書

新到列位の問題が道元の求めた理想のかたちで一件落着したことから、ようやく明全や道元らは天童山で正式な戒臘に基づいた掛搭が許されたことになる。これより以降、明全・道元らは天童山の了派のもとで本格的な修道修行を開始しているが、その時期こそ七月初め頃ではなかったかと推測される。『三大尊行状記』の「越州吉祥山永平開關道元和尚大禪師行状記」によれば、

遂随「從明全、航海入宋、日本貞応二年癸未、大宋嘉定十六年也。掛錫天童、初見派無際、問道聽法、雖及嗣書拜香、未決「拈大事」。其外、惟一西堂・宗月長老・伝蔵主及万年寺元鼎和尚、皆是第「嗣書」尊宿也。同雖「親近」、未契「心」。

とあり、この点は『永平三祖行業記』の「初祖道元禪師」の章もほぼ同文である。また瑞長本『建誓記』にも、

先ツ最初、明州太白天童景德禪寺二上り、掛搭ヲ望ム。其時ノ住持ハ、無際和尚也。師其時廿四歳也。

と記されている。間に先に触れた新到列位の記事を挟んで、さらに瑞長本『建誓記』には、

偏參學道問法問答ノ次第。太白山天童景德寺住持、派無際和尚

也。此住ノ時、道元掛錫

と繰り返した派への参学が記されている。天童山への掛搭を望んで許された道元は初めて了派に正式に相見し、了派のもとで参禅して道を問ひ法を聞いたことが特筆されている。おそらく道元は了派との間でも後の如浄との場合と同じように真摯な問答を交わしたものと見られるが、道元が了派との間で如何なる問答をなしたのか、その具体的な内容については何ら伝えられていない。

また道元は宝慶元年（一二二五）五月に明全が逝去した際、にその戒牒に備忘的に明全の事跡をまとめているが、その「明全和尚戒牒奥書」において、

已入唐、投天童山、入了然寮。于時堂頭無際了派禪師住持也。首座智明、都寺師広。

と記し、入宋当時の消息を伝えている。明全・道元ら日本僧は天童山に掛搭して山内の了然寮に居住したことが知られ、おそらく道元のみでなく明全も親しく住持の了派に参学する機会が存したものと見られる。ときに了派のもとで西班（西序）の首位である首座を勤めていたのは智明とされるが、この人はいは浙翁如琰の法嗣で了派にとっては法姪に当たる大慧派の介石智朋のことではないかとも推測される。また東班（東序）の首位である都寺を勤めていたのは師広であるが、この人はつぎに触れるごとく道元に対してかなり友好的

であったことが知られている。

いま一つ興味深いのは、明全・道元によって栄西顕彰のために天童山の一角に立石された「日本国千光法師祠堂記」に、後十年、其徒明全、復来山中、捐「楮券千緡」、寄「諸庫」、転息為「七月五日忌」設「冥飯」、衆本孝也。

という記事が存していることであろう。天童山に到つた明全が七月五日の栄西忌に楮券千緡の淨財を天童山の諸庫に寄進し、また一山の大衆（修行僧）に対して冥飯の供養をなしたというものである。ここにいう七月五日の栄西忌が入宋した嘉定一六年になされたものが、正しく十回忌に当たる嘉定一七年になされたものかは、実際のところ定かでない。ただ、嘉定一七年七月であれば、すでに了派は亡くなつていて新命住持の如浄もいまだ入院していない期間ということになり、この時期に明全が天童山の大衆に供養したと解するのは不自然となる。いまは一〇年というのがあくまで概算であつて、入宋した嘉定一六年の七月五日に明全・道元らは了派のもとで栄西忌の供養を遂行したものと見ておきたい。

いわば、明全・道元らは正式に天童山に掛搭が許され、天童山での待遇も他の中国僧と同等に扱われた時期に、先師栄西のために忌日の供養をなし、大金を投じて天童山の住持・両班・前賓・勤旧および大衆（修行僧）に対して齋会を催しているわけである。この忌日供養と齋会は入宋以前から計画

されていた催しであつて、明全・道元らは準備万端を整えてこれに臨んだものと推測される。また一面では新到列位問題で多大の迷惑をかけた天童山当局とりわけ了派に対して謝恩を兼ねた齋会であつたとも解されよう。ときの住持であつた了派にとつても、こうした日本僧による大齋会はきわめて印象的なできごととして受け止められたに違いない。

ところで、道元は『正法眼蔵』「伝衣」の巻において、了派が住持であつた頃の天童山の様相について、

予、在宋のそのかみ、長連牀に功夫せしとき、背肩の隣單をみるに、毎晝の開静のとき、袈裟をささげて頂上に安置し、合掌恭敬しき。一偈を黙誦す。ときに予、未曾見のおもひをなし、歡喜みにあまり、感涙ひそかにおちて襟をうるほす。阿含經を披閱せしとき、頂戴袈裟文をみるといへども、不分曉なり。いまは、まのあたりにみる。ちなみにおもはく、郷土にありしには、おしふる師匠なし、かたる善友にあはず、いくばくかいたづらにすぐる光陰をおしまざる、かなしまざらめやは。いま、これを見聞す、宿善よろこぶべし。もしいたづらに本國の諸寺に交肩せば、いかでか、まさしく仏衣を著せる僧宝と隣肩なることをえん。

と語つており、天童山にて修行を始めた時、僧堂の長連牀にて修行僧が唱える「搭袈裟偈」に感激しているが、これも了派のもとで如実に行なわれていた所作であり、この行持一つ

をとつても天童山の了派が修行僧に対して厳格な指導をなしていたことが窺われる。

また長円寺本『正法眼蔵隨聞記』卷三にも、同じく道元が天童山の了派のもとで体験したと見られる消息として、

一日示云、我在宋ノ時、禅院ニシテ見_レ古人語録時、或西川ノ僧ノ道者ニテ有シガ、問_レ我云、ナニノ用ゾ。答テ云、古人ノ行履ヲ知ラン。僧ノ云、何ノ用ゾ。云、郷里ニ歸テ人ヲ化セシ。僧云、ナニノ用ゾ。云、利生ノ為也。僧云、畢竟ジテ何ノ用ゾ。予、後ニ此理ヲ案ズルニ、語録・公案等ヲ見テ、古人ノ行履ヲモ知り、或八迷者ノ為ニ説キ聞カシメン、皆是自行化他ノ為ニ無用也。只管打坐シテ大事ヲ明メ、真理ヲ明メナバ、後ニハ一字ヲ不知トモ、他ニ開示センニ用ヒ不_レ可_レ尽。故ニ彼ノ僧、畢竟ジテ何ノ用ゾトハ云ヒケルト。是真實ノ道理也ト思テ、其後子語録等ヲ見ルコトヲトドメテ、一向ニ打坐シテ大事ヲ明メ得タリ。

という逸話が伝えられている。この逸話も内容からして如浄に参学する以前、道元が天童山の了派のもとに在つて禅宗語録を閲覧し、古則公案の参究に没頭していた頃の消息と見られる。西川の僧とは蜀僧すなわち四川出身の僧のことであり、すでに述べたごとく了派のもとには別山祖智のように蜀僧の参学も多かったであろう。この問答を通して道元は古人の語録や公案を読むことを棚上げし、初めて坐禅の一行すなわ

ち只管打坐に徹する覚悟が定まったことを述懐しており、如浄に会う以前から了派のもとで厳格な坐禅を行ずるようになっていたことが知られる。

後に詳しく触れるが、道元が『典座教訓』において感動の筆致をもつて伝える天童山の用典座の「他不_レ是吾_レ」や「更待_レ何時_レ」という行履なども、天童山の了派のもとにおけるできごとであつて、そうした背景にすぐれた人材を知事（東班）や頭首（西班）として適所に配する了派の、真摯な取り組みが窺われて興味深い。

さらに『正法眼蔵』「嗣書」の巻によれば、道元は天童山で了派に参じていた折、了派の所持していた嗣書を拝覽する機会に恵まれていた。そのときの嗣書拝觀の消息について、

臨濟の嗣書は、まづその名字をかきて、某甲子われに参ずともかき、わが会にきたれりともかき、入_レ吾堂奥_レともかき、嗣_レ吾ともかきて、ついでのごとく前代をつらぬるなり。かれもいささかひきたれる法訓あり。いはゆる宗趣は、嗣はおはりはじめにかかはれず、ただ真の善知識に相見する、的的の宗旨なり。臨濟にはかくのごとくかけるもあり。まのあたりみしによりてしるす。

了派蔵主者、威武人也。今吾子也。徳光參_レ待徑山泉和尚。徑山嗣_レ夾山勤、勤嗣_レ楊岐演、演嗣_レ海会白雲端、端嗣_レ楊岐会、会嗣_レ慈明円、円嗣_レ汾陽昭、昭嗣_レ首山念、念嗣_レ風穴昭、昭

嗣^二南院顯、顯嗣^一興化獎。獎是臨濟高祖之長嫡也。

これは阿育王山仏照禪師徳光、かきて派無際にあたふるを、天童住持なりしとき、小師僧智庚、ひそかにもちきたりて、了然寮にて道元にみせし。ときに大宋嘉定十七年甲申正月二十一日、はじめてこれを見る、喜感いくそばくぞ。すなはち仏祖の冥感なり、焼香礼拝して披看す。

この嗣書を請出することは、去年七月のころ、師広都寺ひそかに寂光堂にして道元にかたれり。道元ちなみに都寺にとふ、如今たれ人がこれを所持せる。都寺いはく、堂頭老漢那裡有相似のちに請出ねんころにせば、さだめて見することあらん。道元このことをききしより、もとむるころさし日夜に休せず。このゆえに今年、ねんころに小師の僧智庚を囑請し、一片心をなげて請得せりしなり。

そのかける地は、白絹の表背せるにかく、表紙はあかき錦なり、軸は玉なり、長九寸ばかり、闊七尺余なり。閑人には見せず。道元すなはち智庚を謝す。さらに即時に堂頭に参じて、焼香礼拝して無際和尚に謝す。ときに無際ははく、遮一段事、少し得見知、如今老兄知得、便是学道之実帰也。ときに道元、喜感無^二勝^一。

とかなり克明に伝えている。これは南宋代における臨済宗の嗣書に関する貴重な情報を伝えるものであつて、大慧派の禪者も師匠から正式な嗣書を相承していたことが知られると

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

もに、嗣書の形態が具体的に記述されていて興味深い。おそらく道元は在宋中に見聞した重要な消息を備忘的に記録に残していたものらしいが、それが如何なる形でまとめられていたのかは定かでない。拙庵徳光は冒頭に「了派蔵主は威武の人なり。今、吾が子なり」と書し、持ち主となる人の法諱に職位を記して郷里を付しており、自らの法を嗣いだ門人であることを証明している。さらに自らの嗣承を遡るかたちで祖師の名を順に書き連ね、臨濟高祖すなわち臨済義玄（慧照禪師？ 八六六）に及んでいる。このように了派が所持していた大慧派の嗣書は、曹洞宗の如浄が道元に与えた嗣書のよつに円相の系図のかたちにはなつておらず、しかも臨済義玄まで順次に遡つたところで終わっているのは特徴的であつて、それ以前の西天二十八祖から東土六祖を経て南嶽懷讓・馬祖道一・百丈懷海・黄檗希運とつづくはずの祖師名はなぜか略されている。

道元が大慧派の嗣書の内容を初めて知つたのは、天童山に正式に掛搭してまもない嘉定一六年七月のことであり、都寺の師広が寺内の寂光堂で了派の所持する嗣書について道元に語つたことに始まる。その後、道元は機会ある毎に禅宗諸派の嗣書を拝見することに努めたようであるが、了派の嗣書を實際に目の当たりにできたのは嘉定一七年正月二十一日のことであつたとされる。師広の勧めで嗣書閲覧の機会を待ち望ん

でいた道元は、正月に入つて了派の得度の小師（弟子）であつた智度に頼み込んで漸くはその機会を得たのである。道元のことばに「閑人には見せず」とあるから、余程でないとな書の内容は許されなかつたことが知られる。なお、ここにいう小師の智度については、了派の法嗣を考察する際に別に詳しく触れたい。

了派の嗣書は絹本で白絹の表背に書かれており、表紙は赤い錦となつており、軸は玉で作られていたという。縦の長さは九寸ほどで、横幅は七尺余であつたとされるから、横軸のかたちで巻かれていたものらしい。ただし、臨済宗でも黄龍派や楊岐派諸派でその形態はかなり相違していたものらしく、同一ではなかつたことが知られる。また道元がこのとき拝観した了派の嗣書が果たして徳光が日本の大日房能忍に付与した嗣書（血脈）と同じ形態であつたか否かは定かでない。嗣書を拝見した道元は直ちに智度に感謝の意を表すとともに、さらに方丈（堂頭）に上つてか住持の了派のもとに参じて焼香礼拝をなしている。このとき了派は初めから道元が嗣書を閲覧することを許可していたものらしく、方丈に参じた道元に対して「遮の一段の事、見知するを得ること少なし、如今、老兄知得せり、便ち是れ学道の実帰なり」と告げており、了派のことばは語つたままに漢文で記されている。道元はこの了派のことばを聞いて嗣書閲覧の意義を深く実感し、

感激に堪えなかつたことを告白している。このことばは了派が実際に道元に語つた貴重な言句であり、了派が道元の心境の高まりを十分に知つた上で嗣書を閲覧させたことが窺われて微笑ましい。

このように天童山の了派のもとにおいて道元はそれなりに得るところが大きかつたことが知られ、了派も道元に対してかなり好意的かつ期待を込めて接してゐたことが窺われる。もし、了派がいましばらく天童山の住持を勤めて存命であつたならば、あるいは道元は如浄と会うことなく、了派のもとで参学をつづけて印可を得、その嗣書を相承して帰国したのかも知れない。

了派の示寂と如浄への遺書

久しく天童山の住持を勤めていた了派はやがて現住のまま示寂したものらしく、『枯崖漫録』には、

嘉定間、在天童。示疾辞衆上堂云、十方無墜落、四面亦無門、淨裸裸、赤洒洒、没可把。喝一喝云、幾度売来還自買、為憐松竹引清風。下座。入丈室端坐、泊然而化。寿七十六、臘五十二。

と示寂する前後の事跡と最後になした上堂が伝えられている。了派は天童山の住持を勤めていたときに微疾を示したとされ、その際に「辞衆上堂」をなしたことが知られる。「辞

衆上堂」の部分を書き下してみれば、

衆を辞する上堂に云く、「十方に壁落無く、四面亦た門無し、
淨躰、赤洒酒、没可把」と。喝一喝して云く、「幾度か売り
来たり還た自ら買う。為めに憐れむ、松竹の清風を引くことを」
と。下座す。

という具合にならう。この「辞衆上堂」はまさに了派の遺偈ともいふべきものであつて、最後の力を振り絞つて天童山に集う多くの修行僧たちの前で遷化に臨む心情を十二分に吐露したものであつたといつてよい。ただし、冒頭に示される「十方に壁落無く、四面亦た門無し。淨躰、赤洒酒、没可把」の語句は了派が自ら表現したことはなく、唐末五代に活躍した雲門宗祖の雲門文偃（匡真禪師、八六四—九四九）の語録である『雲門匡真禪師広録』巻下「遊方遺録」に載ることばであり、⁽³⁾ 実際には臨濟宗祖の臨濟義玄（慧照禪師、八六六）の法を嗣いだ灌溪志閑（？—八九五）が示したものであつたらしい。最初の「十方に壁落無く、四面亦た門無し」とは、四方八方どこにも遮る窓（壁落）や門もないこと、遮るものもない自由なさまを示している。つぎの「淨躰、赤洒酒、没可把」とは、身に何も纏わず、一点の汚れもなく、とらえようもないことをいい、やはり何物にも縛られない自由な境地を表現したものである。雲門文偃ないし灌溪志閑のことばをそのままに引いた後、一喝して了派は「幾度か売り

来たり、還た自ら買う。為めに憐れむ、松竹の清風を引くことを」といふ一転語を述べている。このことばも実のところ了派自身の創作ではなく、法統の祖に当たる楊岐派の五祖法演（東山、？—一一〇四）の「投機偈」から引用したものにほかならない。⁽⁴⁾

推測するに、すでに了派は病疾のためか自らのことばで語ることができず、著名な禪語によつて自らの意図を託することしか成し得なかつたのかも知れない。ともあれ、松や竹が清らかな風を帯びる大自然の風光、現成公案のありようを自ら究め、人々にも示しつつけてきた了派が自身の生涯を振り返つて門下に語つた感慨であらう。この「辞衆上堂」をなした後、了派は丈室すなわち天童山の方丈である妙高台に入り、おそらく結跏趺坐のかたちで正身端坐し、静かに息を引き取つたとされるから、その最期はまさに坐脱（坐化）であつたことにならう。世寿は七六歳であり、法臘は五二齡であつたと伝えられるが、残念ながら『枯崖漫録』には単に嘉定年間（一一〇八—一一二四）とするのみで、示寂した年月日が具体的に何時であつたのかは記されていない。

では、了派が示寂したのは具体的に何時のことであつたのだろうか。注目すべきは了派が示寂に臨んで遺書を杭州錢塘県の南屏山淨慈報恩光孝禅寺の住持であつた曹洞宗の長翁如浄のもとに呈している事実である。すなわち、『如浄和尚語

録』「再住淨慈禪寺語録」には、

派和尚遺書至上堂。万派朝宗一派収、揚清激濁幾經秋、忽
然到底都乾却、露柱燈籠笑不休。且道、笑箇甚麼。下座同
詣靈几、羞法供養。

という上堂が収められている。上堂のことばに「幾たびか秋を経たり」の語が存することから、秋のことのごとく解されるが、この場合の秋とは春秋すなわち歳月の経過を述べたものである。『如淨和尚語録』の上堂語の配列からして、この「派和尚遺書至上堂」がなされたのは、嘉定一七年（一二二四）の四月中旬の頃であつたと推測される。したがって、實際に了派が示寂したのは四月中旬より以前のことであつたものと見られるが、杭州の淨慈寺と明州の天童山は比較的に近距離に存しているから、数日の内には訃報が淨慈寺の如淨のもとに届けられているものと見られる。ともあれ、この年の四月一五日からの天童山の夏安居は、了派の示寂によって葬儀や茶毘と重なり、きわめて混乱した中でなされたことになり、如淨が新たに入寺するまで住持を欠いた状態であつたことに変わりはない。

一方、破庵派の無準師範（仏鑑禪師、一一七七—一二四九）も『仏鑑禪師語録』巻五「小仏事」において、

為天童無際和尚起齋

大海渺無際、漫天鼓黑風、悠悠煙渚客、到此尽迷蹤。故我

無際和尚、慣諳水脉、一生敲棹揚帆、不犯波瀾、收尽錦
鱗紅尾。掃去今時途轍、全提向上爪牙、功魁佛祖而不居、
声震雷霆而難掩、化緣既畢、一笑飄身、天無四壁地無門。
畢竟真歸何処去。東家作驢、西家作馬、要騎便騎、要下便
下。負鞍騎鐵當生涯、仏手明明不可遮。

という亡き派に対する起齋法語を残している。当時、師範は明州奉化縣西北六〇里の雪竇山資聖禪寺の住持を勤めており、おそらく了派が示寂したという知らせを受けて直ちに天童山に赴き、起齋の仏事を執り行なつたものである。このとき葬儀の中心である秉炬の仏事を取り仕切つたのが誰であつたかは定かでないが、おそらく状況からしてもつとも相応しいのは近隣の阿育王山広利禪寺の住持であつた虎丘派の晦巖大光あたりではなかつたかと推測される。

師範は起齋法語において、了派を大海の波に準えており、了派が生涯にわたつて棹を手に帆を掲げて船子徳誠のごとく仏法の大海ですぐれた人材を育成した消息を称えている。さらに「天に四壁無く、地に門無し」と述べているのは、了派の「辞衆上堂」に「十方に壁落無く、四面亦た門無し」とあることばを受けているものと見てよく、今生での化縁を終えて逝去した了派がさらに異類中行して度生を新たにすることに思い遣つている。

ところで、問題なのは了派が天童山で示寂した頃、道元は

如何なる行動をなしていたのかという点である。了派が天童山で示寂する以前に、道元は二度の諸山歴遊を執行しているものらしい。道元の諸山歴遊の時期については諸説が入り乱れて正確な判断が難しいが、もっとも妥当と思われるのは、嘉定一六年の解制（七月一日）以降に道元が杭州方面に最初の歴遊をなしていると推測されることであろう。

このとき道元は杭州余杭縣西北五〇里の径山興聖万寿禪寺に赴いて大慧派の浙翁如琰のもとに参じて問答商量をなしているが、一介の日本僧が直ちに径山住持に拜謁できた背景に、了派が同門の如琰に託した推薦状のときものが存したのではないかと見られる。また同時期と見られるが、道元は明全の代わりに杭州臨安府都稅務の虞構という官僚に会い、榮西顯彰のための「日本国干光法師祠堂記」の撰述を依頼しているようであり、これも天童山住持として了派による紹介や推挙のときものが背景に存したのではなからうか。

一旦、天童山に帰山した道元は、翌年嘉定一七年の梅華が花開く春には、再び温州・台州方面への第二次の諸山歴遊を執行しているものらしい。このときは温州樂清東九〇里の北雁蕩山に赴いて諸寺を參觀した後、台州天台縣の天台山に到り、天台縣西北六〇里の平田の万年報恩光孝禪寺に掛搭して住持の元肅に参じている。また台州黄巖縣西北四五里の瑞巖浄土禪院（小翠巖か）において大慧派の盤山思卓とも問

答しているが、思卓は大慧派の無用浄全（越州翁大木、一一三七—二〇七）の高弟であり、了派とは法の従兄弟の關係に当たっている。さらに道元は帰路には明州鄞縣東南七〇里の大梅山護聖禪寺にも立ち寄り、馬祖下の大梅法常（七五二—八三九）の古道を慕っている。

こうした消息を踏まえてか、瑞長本『建漸記』によれば、

此七人ノ長老達ノ眼睛、吾ヨリモ劣リト思イ給テ、去テ八日
本・大唐ノ間ニ、吾レニ益レル大善知識ハ無ケリト、大橋慢ヲ
起シ、帰朝セント思イ給也。徧參ノ後、天童ニ歸給処ニ、派無
際和尚人滅ス。彌歸朝ヲ志シ給。

という記事が存している。ここにいう七人の長老とは、道元が在宋中に参学した天童山の無際了派と径山の浙翁如琰のほか、台州小翠岩の住持であった大慧派の盤山思卓、台州天台縣の天台山万年報恩光孝寺の住持であった元肅、それに天童山で相見した西堂の惟一と藏主の伝と長老（首座）の宗月という、併せて七人の禅者のことを指している。とくに重要なのは諸山歴遊の遍参から天童山に舞い戻った際、道元は宋朝の禅者らの眼力を自らより劣るものと解して失望していたとされ、さらに大橋慢の心が生じたと伝えられている点である。その直後に了派が示寂したため、橋慢心に陥っていた道元は、落胆していよいよ帰国を志すようになったと記されている。

この記述が史実であるならば、道元は嘉定一七年の一月に了派の嗣書を拝観した後、第二次の諸山歴遊をなして温州の北雁蕩山や台州の天台山中の万年寺などに赴き、明州の大梅山などを經由して三月末か四月初頭には天童山に帰山し、辛うじて了派の示寂に立ち会うことができたことになる。また道元は先に示した了派の「示疾辞衆上堂」も修行僧の一人として拝聞していたことになり、その葬儀や茶毘にも参列し、無準師範の起齋法語なども知っていたことになる。亡き了派のために法語を唱える師範その人の姿も遠く仰ぎ見ることでもできたはずであろう。

道元の門流に当たる瑩山紹瑾（一二六四—一三三五）は『伝光録』第五十一「祖永平元和尚」の章において「時二派無際去テ後子、淨慈淨和尚、天童二主トナリ来ル」と伝えており、簡略ながら了派が示寂した後、如浄が淨慈寺から天童山に遷住したことを伝えている。実際に『如浄和尚語録』「再住淨慈禪寺語録」によれば、如浄は了派の遺書を得てまもなく「退淨慈赴天童上堂」をなしており、嘉定一七年秋七月の頃には天童山の住持となつてゐるらしい事実が確かめられる。したがつて、了派は示寂に臨んで如浄を後住に指名し、道元が如浄に相見する機会を作つていたことになり、両者の師資関係のもとは了派の貢獻に依るところが大きいわけである。道元が如浄と相見し得た「希代不思議のこと」の背景に

は、如浄の人となりをも十分に熟知して後事を託した了派の眼力を見なければならぬ。

ところで、『天童寺志』巻三「先覺攷 宋」の「無際派禪師」の項には、

師嗣「弘照」。別山智禪師嘗參之。（中略）塔在「玲瓏巖南慈航樓禪師塔右」。其法嗣雪窗日・無鏡徹等四人。

とあり、同じく『天童寺志』巻七「塔像攷」には「慈航朴禪師塔、寺西新菴上」とあり、また「無際派禪師塔、寺之西慈航禪師塔右」と記されている。これらによれば、了派の墓塔は天童山の玲瓏巖の南、寺の西の新庵の上に建立され、黄龍派の慈航了朴（鉄面、？—一八四？）の墓塔の右に並び立つかたちで建てられたことが知られる。おそらく了派が示寂して葬儀万般が終了した後、了派の門人らはまもなく墓塔を立石したものと見られ、道元などもこれを拝することが存したはずであろう。あるいは了派の墓塔の開眼供養は、後席を継いだ如浄によつて行なわれ、道元もこれに随侍していたのかも知れない。

ちなみに慈航了朴は福州（福建省）の人であり、了派と同じく福建の出身である。黄龍派の無示介誼（一〇八〇—一四八）に参じて法を嗣いであり、明州慈溪県の蘆山開壽普光禪寺などに住持した後、天童山の第二〇世として陞住しており、二〇年以上にわたつて伽藍の充実に尽力し、天童山の歴

史では第一六世中興である曹洞宗の宏智正覚とともに大きな貢献をなした禅者として知られている。了派の門人が了朴の墓塔に沿うかたちで了派の墓塔を立石した背景は定かでないが、あるいは了派がかつて参学期に天童山の了朴のもとに投じ、その教えを受ける機会が存したのかも知れない。了朴と了派の道号や法諱がともに舟や波に関わる名称であり、了の字の一致など共通点が多いのも氣に懸かるところである。

無了派の嗣法門人

つぎに無了派のもとに参じて法を嗣いだ門人を二通り整理し、個々の人物について事跡を窺つてみることにしたい。『統伝燈録』卷三五には「天童派禪師法嗣一人」として「無鏡徹禪師 無録」と無鏡 徹の名のみが記されている。これに対して、『増集統伝燈録』卷二「目錄」には「天童無際派禪師法嗣」として「天寧無境徹禪師・繁峰定禪師・雪窓日禪師 無伝」と記されており、了派に無境 徹・繁峰定・雪窓 日という三人の法嗣が存したことを伝えている。実際に『増集統伝燈録』卷二には「天童無際派禪師法嗣」として「天寧無境徹禪師」の章と「繁峰定禪師」の章が立伝見録されているが、いずれも伝記的な記載は見られない。

その後、明末清初に編纂された禪宗燈史としても、『五燈会元統略』卷三(卷二上)では「天童派禪師法嗣」として

「無境徹禪師」の章のみが存している。『統燈正統』卷二「目錄」では「天童無了派禪師法嗣」として、

天寧無境徹禪師・繁峰定禪師・雪窓日禪師 此後無伝・足

翁麟禪師。

と記されており、了派に無境 徹・繁峰 定・雪窓 日および足翁 麟という四人の法嗣が存したことを伝えている。実際に『統燈正統』卷二には「天童派禪師法嗣」として「寧波府天寧無境徹禪師」の章と「福州府金繁峰定禪師」の章が存しているが、やはりいずれも伝記的な記載は見られない。

『五燈嚴統』卷二には「天童派禪師法嗣」として「無境徹禪師」の章のみが存している。『祖燈大統』卷七四「目錄」には「天童派嗣」として「天寧徹・繁峰定・雪窓日・足翁麟」と四人の名を挙げ、実際に巻七四には「寧波府天寧無鏡徹禪師」の章と「福州府金繁峰定禪師」の章を載せている。『統燈存裏』卷二では「天童派禪師法嗣」として「明州天寧無鏡徹禪師」の章と「龍峰定禪師」の章が存している。『統指月録』卷三には「天童派嗣」として「慶元天寧無鏡徹禪師」と「龍峰定禪師」の章が存している。『五燈全書』卷五三には「天童派禪師法嗣」として「明州天寧無鏡徹禪師」の章と「福州繁峰定禪師」の章が存している。

つぎに禪宗の系統図である宗派図においては、了派の法嗣はどのように記されているであろうか。高麗(朝鮮半島)の

無學自超が所伝した『仏祖宗派之図』と、尾張（愛知県）一宮の長島山妙興寺に所伝される南北朝期の『仏祖宗派之図』には、ともに「無際派禪師」の法嗣として「足翁麟禪師」の名のみを挙げているにすぎない。また室町中期の『仏祖宗派之図』においても「天童無際了派」の法嗣として「足翁麟」の名が記されている。

これに対し、北朝の永徳二年に刊行された『仏祖正伝宗派之図』には「天童無際了派」の法嗣として「智康禾上」「雪窓日」「繁峯定」「中際中」「仰山無境印徹」と五人の名を記しており、これとは別に「靈隠大川普濟」の法嗣として「普慈足翁麟」の名が見い出せる。江戸初期の『正誤宗派之図』もこれを受けて「天童無際了派」の法嗣として「繁峯定」「雪窓日」「中際中」「智康和尚」「仰山無境印徹」と五人の法嗣の名を伝えており、やはり「靈隠大川普濟」の法嗣のひとりに「普慈足翁麟」の名が存している。

このように了派の法を嗣いだ門人は必ずしも多いとはいえないが、それなりに南宋末期の江南禅林に活動していたことが知られる。以下、了派の法を嗣いだとされる高弟たちについて個々にその消息を探って見ることにしたい。

一、無境印徹

無境印徹については中国の禅宗燈史や日本で著わされた宗派図に等しく名が載せられており、了派の法を嗣いだ高弟と

して広く知られた存在であったものと見られる。禅宗燈史では法諱の上字が明確でないが、『仏祖正伝宗派之図』や『正誤宗派之図』によって法諱が印徹であったことが判明する。一方、道号については無境または無鏡と記されているが、古い史料では概ね無境となつているから、無境とするのが正しいであらう。

印徹が了派のもとで如何なる研鑽をなしたのかは定かでないが、わずかに同じ大慧派の偃溪広闡の語録である『偃溪和尚語録』巻下「偈頌」に、

送一徹二公再參無際和尚。

両公未見無際前、謂從本有成話墮。両公既見無際後、謂是不同成。両箇。明知見与未見時、蒼龍終不澄潭臥、雲巖晚歸玲瓏巖、老兒家有彌天禍。口皮辺禪價壳弄、動輒引人人荒草、不知両公竟何意、春風又問東南道。貧思旧價濟北驢、再欲一頓慙作廢。當時失却一隻眼、賊過関門夾山考。後三十年有話在、珍重此行休放過。

という偈頌が伝えられており、そこに印徹と見られる禅者の消息の一端が窺われる。「一徹二公」とは一徹二という名の一人の禅者を指しているのではなく、文の初めに「両公、未だ無際に見えざる前、本より有り」と謂いて話墮を成す。両公、既に無際に見えて後、是れ同じからずと謂いて両箇と成す」とあるから、一と徹という二人の禅者のことを指し

ている。「本より有り」とは悟りを概念化して実体的にとらえていたことをいい、「是れ同じからず」とは個々の修行の中にこそ悟りが顕現することを示したものである。この偶頌は両者が再び了派に参学せんとするのの際し、広闡が饒別に送った作である。また玲瓏巖の語が見られるから、両者が了派のもとに再び帰参したのは玲瓏巖が存する天童山景德寺での消息であったことも確かめられる。

おそらく両者は年齢的に了派の門下でも長老格であったことになり、一については如何なる禅者なのか定かでないが、後に触れるごとく道元が『正法眼蔵』『嗣書』の巻に伝えている天童山の西堂となつた惟一のことではないかとも見られる。一方、徹については了派の法を嗣いだ高弟である印徹その人のことを指していると見てよいであろう。したがって、印徹は同門の一とともに天童山以前から了派に随侍していたことになり、しばらくの間、了派のもとを離れて法叔の浙翁如琰あたりに参学し、広闡などとも交遊を結んだものと見られ、再び一とともに天童山に赴いて了派に参学していることにならう。

ところで、印徹に関しては『増集統伝燈錄』巻二「天寧無境徹禅師」の章に、

天寧無境徹禅師。上堂琴、巖頭和尚因僧問、浩浩塵中、如何辨主。頭云、銅沙鑊裏滿盛油。頌曰、百万雄兵入漢關、威如

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

猛虎陣如山、单刀直取顔良首、不是關公也大難。

と立伝されているが、残念ながら伝記的な記載は存しておらず、わずかに徳山下の巖頭全（竊）（全齡、清儼大師、八二八—八八七）の「巖頭辨主」の古則に対する頌古一則を載せるのみである。この点は『五燈会元統略』巻二上「無境徹禅師」の章、『祖燈大統』巻七四「寧波府天寧無鏡徹禅師」の章、『統燈正統』巻二「寧波府天寧無鏡徹禅師」の章、『統燈存彙』巻二「明州天寧無鏡徹禅師」の章も同じ内容を伝えるのみであり、何ら目新しい記載は付加されていない。

ただし、興味深いのは印徹が住持した寺院について『増集統伝燈錄』では単に「天寧」としか記されておらず、いずれの州の天寧寺なのか定かでないが、『祖燈大統』『統燈正統』『統燈存彙』では、印徹の住持した天寧寺を明確に「寧波府天寧」とか「明州天寧」と記している。これらによつて、印徹が了派の法を嗣いで住持したのが明州慶元府城西北隅の恵政橋に存した天寧報恩光孝禅寺であったことが知られる。南宋末期から元代初期にかけて久しく明州の天寧寺に住持した禅者として曹洞宗宏智派の直翁可拳（徳拳とも、静慧禅師、一一一一—？）が名高いが、年齢的に印徹は可拳より先に天寧寺に住持しているものと見られ、状況からして住持時期はおそらく南宋末期の淳祐年間（一二四一—一二五二）より以前であつたものと推測される。

一方、南北朝期の『仏祖正伝宗派図』や江戸初期の『正誤宗派図』三によれば「天童無際了派」の法嗣として「仰山無境印徹」と記されているから、印徹は明州府城の天寧寺のほかに仰山にも住持している消息が知られる。仰山といえは袁州（江西省）宜春県南八〇里の大仰山に存する太平興國禪寺のことであり、唐代に瀉山下の仰山慧寂（小釈迦、智通大師、八〇三—八八七）が庵を結び、初め樓隱禪寺と称して瀉仰宗の発祥地として知られているが、北宋代に太平興國禪寺の寺額を賜っており、南宋末期から元代にかけては禅宗甲刹の一つに列している。

この点、注目すべきは、印徹にとつて法系上の従兄弟に当たる大慧派の淮海元肇（原肇とも、一一八九—一二六五）が『淮海和尚語録』、「台州万年報恩光孝禅寺語録」において、

仰山無境和尚遺書至上堂。六十光陰、東涌西沈、一彈指頃、塵沙劫永、撲落虚空、南北西東、湛然無境、秤錘落井、拈主文。箇是集雲峰下四藤条、打下打著、且末後一下、落在什麼處。卓丈一下。蒼天蒼天。

という上堂を残していることであろう。淮海元肇は了派と同門に当たる浙翁如琰に参じて法を嗣いでいるから、印徹とは法系上の従兄弟に当たっている。この上堂は印徹が仰山において示寂し、その遺書が元肇のもとに届けられた際に、元肇が亡き印徹を偲んでなした上堂にほかならず、おそらく実

際に印徹の遺偈のことはを踏まえたかたちで行われているものと見られる。このとき元肇は台州（浙江省）天台県の天台山平田の万年報恩光孝禅寺の住持を勤めており、そのもとに仰山から印徹の遺書と訃報が觸されていることになる。

この「仰山無境和尚遺書至上堂」によれば、印徹が実際に仰山の住持を勤めていたことが知られ、しかも「六十の光陰」と記されているから、世寿六〇歳ほどで示寂したらしいことも判明する。ついで「東に涌き西に沈む」とあるのは、印徹の出生と示寂を語っているものと見てよく、おそらく印徹は東浙など海岸部に生を得、西のかた袁州の仰山で突如として生涯を終えたものであつて、集雲峰というのも仰山に存する峰の名であり、四藤条も仰山に存した四藤園のことにほかならない。

同じく淮海元肇の詩文集である『淮海外集』巻下にも、

祭仰山無境禅師文。

頃在「凌霄」、共「牀各夢」、深慨「道原」、三家「愚弄」、老者休「文知」
 兄伯仲、不「楊不」墨、如「麟如」鳳。後十二年、出為「世用」、
 々和鳴、噤「彼啁啾」。叢灌「所棲」、風行雷動、泣「于平田」、扶
 藿立「棟」、致「我後先」、得無「輕重」、唇永再緘、集雲遠送。未訊
 堪忍、忽伝「哀痛」、祖天荒寒、正流日凍。柄者雖「多」、裨哉愈衆、
 又失「斯人」、夫誰為勸。

という祭文が伝えられている。これは印徹が示寂した際に元

肇が法友として製した祭文であり、やはり印徹が仰山の住持として逝去した消息が知られる。祭文によれば、かつて元肇は凌霄すなわち杭州余杭県の径山興聖万寿寺において印徹と席を並べて修行した経験が存したものでなく、あるいは印徹も法叔の浙翁如琰に参学する機会が存したのかも知れない。その十二年後に印徹は出世開堂したとされ、また平田とあるのは天台山中に存する平田の万年報恩光孝禅寺のことを指しているであろうか。おそらく状況からすると、印徹は諸刹を歴住して明州の天寧寺に久しく化導を敷き、最後に仰山の住持を勤めて淳祐年間（一二四二—一二五二）の後半に遷化しているものであろう。

さらに印徹には法を嗣いだ門人も二人ながら存したことが知られており、『増集統伝燈録』巻三「目録」や『統燈正統』巻二「目録」には「天寧無境徹禅師法嗣」として「灌溪昌禅師。南浦遵禅師。無伝」と記され、『祖燈大統』巻七四「目録」にも「天寧徹嗣」として「灌溪昌、南浦遵」と記されている。この点は『仏祖正伝宗派図』や『正誤宗派図』三において「仰山無境印徹」の法嗣として「南浦 導」と「灌溪 昌」の名が載せられているから、印徹には法嗣として「灌溪 昌」と「南浦 遵」の二禅者が存している。実際に『増集統伝燈録』巻三には「灌溪昌禅師」の章が存しており、

灌溪昌禅師、山居偈曰、問来石上甌、長松、百衲禅衣破又縫、

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

今日不憂明日事、生涯只在鉢盂中。

とあって伝記的な記載は存しておらず、わずかに七言四句の山居偈一首を載せるのみである。偈頌の内容としては、山間の古寺に居して石上に坐して松に保たれ、一〇〇人ほどの修行僧とともに袈裟（衲衣）と鉢盂（応量器）のみで三衣一鉢の生涯を送る禅者のありようが詠じられている。『祖燈大統』巻七六「岳州府灌溪昌禅師」の章や『統燈正統』巻二「岳州府灌溪昌禅師」の章も同様である。

ところで、灌溪昌が住持した灌溪とは、岳州（湖北省）武昌府崇陽県西北一五里に存した灌溪寺（清凉世界）のことであり、古く唐代に臨済下の灌溪志閑（八九五）が化導を敷いた名刹として知られる。したがって、灌溪とは灌溪昌の道号ではなく、その住持地であることが確かめられ、法諱の上字も定かでない。いま一人の南浦遵はついても一に南浦導とも記されているが、南浦が道号なのか住持地なのかも定かでない。ただ、状況からして灌溪昌や南浦遵が本格的に活躍したのは時期的に南宋末元初の頃であったと推測される。

さらに『増集統伝燈録』巻四「目録」に「灌溪昌禅師法嗣」として「無積聚禅師 無伝」と記されており、『祖燈大統』巻七九「目録」にも「灌溪昌嗣」として「無積聚」の名が存している。『正誤宗派図』三にも「灌溪昌」の法嗣として「無積聚」と名が載せられていることから、灌溪昌には無積

聚という法嗣が存していたことが知られ、無積は道号と見られるものの、その住持した寺院については伝えられていない。無積聚の活動によって、了派の系統が辛うじて法曾孫の代までつづき、少なくとも元代中期頃までは江南禅林に継承維持されていたことが確かめられる。

二、龍峰定（繁峰定）

龍峰定については一に繁峰定とも記されており、いずれが正しい表記なのか断定しがたいが、龍峰ないし繁峰というのは道号ではなく、その居住した地に因むものらしい。この人の消息をもっとも早く伝えるのは、南宋末期にまとめられた『枯崖漫録』巻中の「龍峰定禪師」の項であり、

龍峰定禪師、福之長溪人。嘗過毗陵時思庵、依無際。值開堂、拈、釈迦彌勒是他奴、他是阿誰。定曰、不。會。又拈、似之。又曰、不。會。無際拈住曰、一不。會。二不。會。定失声答曰、泥団土塊。後於永嘉龍翔文絶象会中分坐。無際在明之太白、
 詒書趣歸。昔仏智老師亦持無際、故嘗言之。

と記され、いくぶん詳しい参学の過程がまとめられている。これに対し、後世の禅宗燈史では龍峰定の伝記的な消息は何ら記されていない。『仏祖正伝宗派図』には「天童無際了派」の法嗣として「繁峰 定」とあり、『正誤宗派図』三になると「天童無際了派」の法嗣として「龍峰 定」と記されている。繁は龍の俗字で、想像上の大亀のことである。

そこで、この人の前半生を知る上で『枯崖漫録』の記事内容から検討していくことにしたい。龍峰定は福州（福建省）長溪県の出身であり、法諱が 定であったのかは定かでない。また龍峰ないし繁峰というのは住持地に因む呼称であって道号ではないが、あるいはこれを道号のごとく使用していた可能性も存する。出家受具した地や受業師などについては記載が存していないが、その後、龍峰定は毘陵すなわち常州の時思庵において了派のもとに投じている。このとき了派は開堂に際して「釈迦・彌勒は是れ他の奴、他是是れ阿誰ぞ」と示して龍峰定に詰め寄っている。龍峰定が「会せず」と答えると、了派は再び同様の諮問をなしている。龍峰定がそれでも「会せず」と答えると、了派は龍峰定を打ち据えて「一も会せず、二も会せず」と喝するのである。このとき龍峰定は覺えず「泥団土塊」と答えたとされるが、これが機縁の問答であるうから、このとき了派から印可を得たことにならうか。この機縁は了派が具体的に如何なる学人接化をなしていたのかを知る上で貴重な問答であり、また不会に徹する龍峰定のありようが窺われて興味深い。

その後、龍峰定は了派のもとを辞して温州永嘉県の甌江の中洲に存する江心山龍翔禅寺に到り、住持の絶象 文という禅者の会下で首座として分座説法している。龍翔寺は曹洞宗の真歇清了（寂庵 悟空禅師、一〇八八—一一五二）が禅刹開山

となつてゐる名刹であり、当時は禅宗十刹の一つに列せられてゐるが、このとき龍峰定を首座に招いた絶象文については、残念ながら如何なる系統の禅者なのかは定かでない。

一方、『増集統伝燈録』巻二「繁峰定禅师」の章には、

繁峰定禅师、讚「玄沙和尚」偈曰、蓑衣不肯換「金章、千古風流」
屬謝郎、釣「得錦鱗」人不薦、夜寒沙上聽「鳴榔」。

という一偈のみが収められてゐる。この偈頌は唐末五代に福州に活躍した雪峰下の玄沙師備（謝三郎、宗一大師、八三五九〇八）を賛した仏祖賛であつて、その出家の因縁が称えられてゐる。『祖燈大統』巻七四「福州府金龍峯定禅师」の章や『統燈正統』巻二二「福州府金龍峯定禅师」の章も、同じ偈頌を載せるのみであるが、龍峰定の住持した地が福州の金龍峰（金繁峰）である点が付加されてゐる。実際に『福建通志』巻六「山川」の「福州府 連江県」には、

金龍山 新安里 在「県南」。峯勢秀拔、如「巨龍出」海。西曰「矩庚山、相伝矩庚二仙居」此。下有「春隄・秋浦・雪塲・雲潭」。
南曰「南乾山、有「巨人跡・棋盤石」。北曰「北乾山、上有「大石」不著「苔蘚」、俗呼「紗帽石」。其下為「西泉山」為「兌峯」。右転為「五馬山、五峯拱」向「泉冶」、勢如「奔馬」。有「嶺曰「東峯嶺」。

と記されており、福州連江県南の新安里に海に向かつて突き出た金龍山が存していることを伝へてゐる。また『福建通志』巻二六四「寺観」の「福州府 連江県」には、

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

南峯石門院、在「新安里」。唐中和二年、謝請建。光化三年、僧道遇繪「山圖」以進詔、翰林書「今額」賜之。以「南峯麓有「石門」故名。宋紹興間、賜「尚書李彌遜」為「功德院」。李彌遜詩。暈賢嘉会走輿臣、乍喜郎星照「七閩」、寺近「南塘」鍾秀麗、筵開「晚水」薦「甘珍」。放懷想尽百川飲、留客欣生四角輪、我独沈痾方面壁、愈風頼有「兩騷人」。国朝康熙間募建。

として新安里に存した南峯石門院の存在を伝へてゐるが、これがおそらく龍峰定の住持した寺院であらうと推測される。おそらく龍峰定は福州の出身であつたものと見られ、郷里福州で化導を敷き、郷里の高僧として名高い玄沙師備を慕つていたものであらう。

ところで、『枯崖漫録』によれば「昔し仏智老師、亦た無際に待す、故に嘗て之れを言つ」と記されてゐるから、かつて了派に随侍した経験がある大慧派の僊溪広闡（仏智禅师）が龍峰定の機縁を法嗣の枯崖円悟に語つたことが知られる。おそらく広闡は法叔の了派のもとで法の従兄弟に当たる龍峰定とも親しい交友をなしてゐたものであらう。

三、雪窓祖曰

『増集統伝燈録』巻二「目錄」に「天童無際派禅师法嗣」の一人として「雪窓曰禅师 無「伝」と載せられており、『祖燈大統』巻七四「目錄」にもやはり「天童派嗣」として「雪窓曰」と名を挙げ、『統燈正統』巻二二「目錄」も「天童

無際了派禪師法嗣の一人として、「雪窓日禪師 此後無伝」と伝えており、雪窓日というのが禪宗燈史の上で通用している。一方、日本でも南北朝期の『仏祖正伝宗派図』において「天童無際了派」の法嗣として、「雪窓 日」と記されている。しかしながら、江戸初期の『正誤宗派図』三に至ると、なぜか「天童無際了派」の法嗣として、「雪窓 月」と記されており、「日」が「月」に改められている。『正誤宗派図』が如何なる史料に基づいて雪窓日を雪窓月と改めたのかは定かでないが、道号を雪窓と称しており、法諱が 日であったと解するのが古い伝承ということになる。ちなみに後に詳しく触れるごとく、入宋した道元と関わった禪者に宗月という長老が存しており、『正誤宗派図』がこうした記事を踏まえて雪窓日を雪窓月に改めているのかも知れないが、実際は雪窓日と宗月は全くの別人であつて、宗月については後に詳しく触れておきたい。

ところで、新たに雪窓日に関する消息を伝えるものとして、元代中期にまとめられた『大徳昌国州志』巻七「叙祠 寺院」の「普慈寺」の項に「有敬実堂、里人参政应懃為記」という表題でつぎの一文が収められている。

嘉熙戊戌夏四月、龍峯普慈寺、作堂於雷音堂之西、像黑山明老師而敬之、以己・瑄、兩勳旧配、扁曰敬実。住山雪窗禪師訪邑人应懃而請曰、祖日幸備掃、漑茲山、承彫弛之餘、

畢力振飭、積蠹宿弊、一刮絕去、憤作壞者、衆慨興初之難念、不可不章、明前蹟。此堂所為作今成矣、願有以記之。懃惟、先人旧廬在鎮龍山之東麓、距龍峯百餘武、暇日素往游焉、故於山中事多所蹟記。黑山之來寺、且燬三年矣。經禪頓尽、龍象悲泣。黑山披瓦礫、薙草莽、而嘗度焉、勦形彈智、以潰於成。規模位置、一出意匠、棟宇奩舉、照映林谷。見者無不讚歎。黑山作勝事已、移錫之報恩、既乃復歸示寂、塔於山之青龍之口。若有夙昔緣、人皆曰、黑山有功茲山甚大。先是、寺不足於食、乾淳間、監寺妙已、以軫食輪為己任、限大海之浜、化為美田、播厥嘉穀、歲限取三千、以充香積。供梅塲有莊、名曰公示弗忘也。宣獻樓公記石、雖燼裂、墨本故在。黑山嘗繼後、仏菩薩天及護法主林禦侮力士之像、種種狂嚴、皆都寺德瑄、祛囊中金為之。復以餘力、斃山路千丈、造石橋十三所、深得仏氏慈悲濟人。本旨之僧者、於寺信有勞、可以配黑山矣。夫学浮屠氏之法者、凡能出力辦事、必有廉以立身、勇以立志、勤以率衆、而為之本者曰公。公私不兩立、公則万善集、私則百病生。興廢成敗、所由判也。黑山、名覺明。与之稔熟、見其天材、高有苦潔之行。所居瓶鉢外、蕭然無長物於私、則銖黍不蓄。人信其廉、故施之者不倦。始至指山而誓曰、所不能還復旧觀者、有如此山。人皆笑其孟浪、略不退転、一念勇猛、故其事竟成。御衆如御兵、取

材木負「瓦石」、身親信「役、雖犯寒触熱不憚、故其徒歎趨」此、非「公以存心者、能之乎。前已後瑄、得之聞見有足」称録「亦本諸此」而已。嗚呼、有「堂規如、有像儼如、展展如、展展如、登「斯堂瞻「斯像、使「一毫媿於心、類且有此」

矣。此雪窗意也。於是平書。五月一日記。

この一文は清の光緒二十一年（一八八五）に刊行された『光緒定海県志』巻二七「志十一下」の「寺觀」の「普慈寺」の項にも、若干ながら字句の異同が見られるが、やはり「宋応懃敬実堂記」として載せられている。そこには雪窗祖日という禅者の活動の一端が記されており、この人こそ了派の法を嗣いだ雪窓日と同一人物ではないかと注目するものである。普慈寺とは明州昌国県（後世は定海県）北五里の龍峰普慈禅寺（普慈院）のことであり、「敬実堂記」は嘉熙二年（一一三八）五月一日の日付けで昌国県出身であった參知政事の応懃（字は之道、号は真莊）によって撰せられており、内容は普慈寺の境内に建てられた敬実堂に関するものである。すなわち、この年四月に普慈寺では伽藍復興に貢献したかつての住持の黒山覚明と監寺の妙已および都寺の徳瑄という禅者を祀る敬実堂を寺内の雷音堂の西に建てている。しかもこのとき現住の雪窗という禅者が親しく応懃のもとを訪ね、敬実堂に関する記事を文章にまとめてほしい旨を告げたとされる。しかも雪窗が応懃に語ったことばとして、

祖日、幸いに備さに茲の山を掃蕪し、彫弛を承めるの餘、力を畢くし筋を振り、積蠶宿弊、一刮に絶ち去る。憤りて壞すを作す者、衆く興掖の念じ難きことを慨く。前績を章明せざるべからず。此の堂の爲す所の作、今ま成れり。願わくは以有りて之れを記したまえ。

とあり、雪窗は自らを「祖日」と称している。これによれば、道号が雪窗または雪窓であり、法諱が祖日であったことが知られ、雪窗祖日というのがこの人の名であったことが判明する。③。応懃はこの雪窗祖日の申し出を受け入れ、一ヶ月も経ずに五月一日の日付けで「敬実堂記」を書き上げているのであり、おそらくこの「敬実堂記」はまもなく普慈寺境内の敬実堂の一角に実際に立石されたものと見られる。

ちなみに「敬実堂記」に示されている黒山覚明については如何なる嗣承の禅者なのか定かでないが、慶元年間（一一九五—一二〇〇）に火災で焼失した普慈寺の伽藍を復旧した人であり、その尊像を納めるために設置されたのが敬実堂であったことが知られる。祖日は覚明の功績を後世に残すべく敬実堂を創建しているわけであり、この記事が残ったことによつて祖日自身もまた辛うじて禅宗史上にその名を留めることができたわけである。しかも「足翁徳麟」の項で詳しく触れるごとく祖日の後席を継いで普慈寺に住持したのが、祖日と同じく晩年の了派に参じて法を嗣いだ法弟の足翁徳麟である

ことから、祖日もまた了派の法を嗣いだ言窓日その人である
と見てまちがいなからう。

さらに言窓日の法諱が祖日であったことが判明したことから、新たにいくつかの事実が浮かび上がってこよう。第一に祖日は慶元五年（一一九九）に生まれた足翁徳麟よりは年長であるが、比較的に了派の晩年に近い時期にその門に投じた門人ではなかったかと推測される。

第二に了派が示寂した後、祖日はそのまま天童山に留まっていたものらしく、新たに曹洞宗の如浄が住持として入寺した際にそのもとに参学していることが知られる。『如浄和尚語録』の「明州天童景德寺語録」は「侍者祖日編」とあり、祖日という人が侍者として編纂したものであるが、ここにいふ祖日こそ状況的に了派の法嗣である祖日と同一人物であろう。とすれば、祖日は了派が逝去した後、引きつづき天童山を継承した如浄のもとに随侍したものであり、如浄としては天童山の現状を熟知する祖日を率先して侍者として抜擢し、上堂語録を編集せしめているのではなからうか。

第三に祖日は住持が了派から如浄へと遷る間に日本の道元とも関わりを持っていったものらしく、道元が宝慶年間（一二二五—一二二七）に記した『仏祖正伝菩薩戒作法』の末尾に

右大宋宝慶元年九月十八日、前住天童景德寺堂頭和尚、授道元式、如是。祖日侍者 時煬香侍者 ・ 宗端知客・ 広平侍者

等、周旋行此戒儀。大宋宝慶中、伝之。
とあって、そこに祖日の名が挙げられている。宝慶元年（一二二五）九月十八日に道元は如浄から『仏祖正伝菩薩戒作法』を授けられているが、このとき祖日は焼香侍者として知客の宗端や同じ侍者の広平らとともにその場に立ち会っていたことが知られる。

第四に祖日はおそらく如浄が示寂した宝慶三年（一二二七）七月一七日ないしその葬儀が終わるまでは少なくとも天童山内に留まっていたと見てよいであろうし、その後、『如浄和尚語録』が刊行されるに際しても、祖日は如浄門下の人々と親交を結んで出版事業に参画していたことになる。

これらを踏まえて整理してみると、祖日は言窓または言窓と号し、初め天童山の了派に参学し、そのもとで何らかの悟道の機縁が存したものと見られる。やがて了派が嘉定一七年に示寂して後も天童山に留まり、改めて如浄のもとでも侍者として随侍して語録の編集にも関与し、日本の道元とも交友を結んだものであろう。

その後、一〇年余りを経た嘉熙年間（一二三七—一二四〇）の初め頃に、祖日は明州昌国県の普慈寺に出世開堂したもののらしく、その際に亡き了派に対して嗣承香を炷いているわけである。また祖日は嘉熙二年の時点で普慈寺の住持として「敬実堂記」を応繇に依頼し、伽藍復興に貢献した先住の黒

山覚明の事跡を顕彰している。ただし、その後、祖日が普慈寺から他寺に遷住しているの可否かも定かでないが、普慈寺はまもなく再び焼失の憂き身に遭遇している。このときの火災で普慈寺の伽藍はまたも廃墟と化したわけであるが、おそらく「敬実堂記」の石碑のみは焼失を免れて後世へと伝えられたものであろう。その後、普慈寺の伽藍を復興したのが同じく了派に参じて法を嗣いだ法弟の足翁徳麟であった点は注目され、普慈寺の歴史において祖日と徳麟の法兄弟が果たした功績はきわめて大きかったことが知られる。

四、中際 中

この人に関しては『仏祖正伝宗派図』と『正誤宗派図』三に「天童無了派」の法嗣として「中際 中」と記されるのみである。その法諱は単に 中とあるのみで、上字が何であったのかは定かでない。また中際というのが道号なのか住持した寺院名のかも定かでないが、一に師の無際に肖って自ら中際と号したとも解されよう。

ただし、中際と称する寺院が福州寧徳県北七〇里の霍山郷水際里に存しており、『淳熙三山志』巻三七「寺観類五 僧寺」の「寧徳県」には、

中際香積院、水際里。乾符元年、中際山人曾筠・林峻、捨山林於邑僧如珣一建。六年賜今額。挿天棧。旧産錢五貫三百六十四文。

天童山の無了派とその門流（佐藤）

とあって寧徳県の水際里（水滌里）に中際（中滌）香積院が存したことが知られる。北宋代から南宋代にかけて福州の中際院に住持した禅者が実際に幾人か知られており、北宋末期には雲門宗の雪竇重顕（隱之、明覚大師、九八〇—一〇五二）の法孫に報本有蘭の法を嗣いだ中際可遵があり、南宋初期には臨済宗の泐潭景祥（一〇六二—一一三二）の法を嗣いだ中際継寧と、仏眼派の高庵善悟（一〇七四—一一三二）の法を嗣いだ中際善能が存している。さらに大慧派の此庵守淨の法を嗣いだ中際無禪立才の存在が知られているが、守淨は徳光の法兄であるから、立才は了派にとつて法從兄に当たっており、その活動は了派よりは一代早くなされている。したがって、了派の法を嗣いだとされる中際 中もあるいはこの福州の中際香積院に住持した禅者ではなかつたかと解される。

五、智康

『仏祖正伝宗派図』には「天童無了派」の法嗣として「智康禾上」とあり、『正誤宗派図』三には「天童無了派」の法嗣として「智康和尚」と記されており、了派の門人に智康という名の和尚（禾上）が存したことを伝えている。智康とはおそらく法諱であるが、その住持地については何も記されていない。一方、『正法眼蔵』「嗣書」の巻によれば、道元が天童山で了派に参じた折、了派の所持していた嗣書を拝覽する機会に恵まれているが、そのとき嗣書拝観に至る消息

として、

これは阿育王山仏照禪師徳光、かきて派無際にあたふるを、天童住持なりしとき、小師僧智庚、ひそかにもちきたりて、了然寮にて道元にみせし。ときに大宋嘉定十七年甲申正月二十一日、はじめてこれを見る、喜感いそばくぞ。すなはち仏祖の冥感なり、焼香礼拝して披看す。この嗣書を請出することは、去年七月のころ、師広都寺ひそかに寂光堂にして道元にかたれり。道元ちなみに都寺にとぶ、如今たれ人かこれを帯持せる。都寺いはく、堂頭老漢那裡有相似。のちに請出ねんころにせば、さだめて見することあらん。道元このことはをききしより、もとむるころさし日夜に休せず。このゆえに今年、ねんころに小師の僧智庚を囑請し、一片心をなげて請得せりしなり。そのかける地は、白絹の表背せるにかく。表紙はあかき錦なり、軸は玉なり、長九寸ばかり、闊七尺余なり。閑人には見せず。道元すなはち智庚を謝す。さらに即時に堂頭に参じて焼香礼拝して無際和尚に謝す。ときに無際ははく、遮一段事、少得見知、如今老兄知得、便是字道之美帰也。ときに道元、喜感無勝。という記事が存している。嘉定一七年（一二二四）正月二一日に天童山の寮舎であつた了然寮において、道元は了派の剃度の小師である智庚が密かに持ち来つた了派の嗣書を目の当たりに拝覽する機会に恵まれている。道元は前年の七月に都寺の師広から了派の嗣書の存在を聞き、日頃からその閲覽を

望んでいたとされる。そのため年が改まつた正月に道元は智庚に一心に頼み込み、ようやくに閲覽の機会を得たものである。ただし、状況的には智庚自身も了派に嗣書の閲覽を許される存在であつたことが知られるとともに、智庚は了派の了解を得て嗣書を道元に拝観せしめているものと見られ、了派としても道元の真摯な態度を知つた上で嗣書を智庚に託しているはずである。

この「嗣書」の巻にいう智庚と、『仏祖正伝宗派図』や『正誤宗派図』に記された智庚とは、状況的には同一人物を指していると思われるべきであろう。道元真筆本「嗣書」の巻が真に道元の直筆であるならば、実際に道元と知遇を得ている点で智庚と称するのが正しいことになろう。小師僧とは得度を受けた弟子のことであるから、了派は智庚の受業師であつたものと見られる。智庚ないし智庚が道号を何と称したのか、また道元と会つた当時に天童山で如何なる職位にあつたのか、さらに了派が示寂した後、如浄が新たに天童山に入寺して後も山内に居住していたのかなど、諸般の点についても定かでない。禾上とは和尚と同じ意であるから、その後、この人は何れかの寺院に住持しているものらしいが、具体的な住持地についても何ら伝えられていない。

六、足翁徳麟

足翁徳麟（一一九九—一二七一）については、了派の門下の

中でただ一人その生没年が判明する禪者であり、生涯の消息がかなり辿れる点でも注目される。『増集統伝燈録』には了派の門下の中に徳麟の名が載せられていないが、『統燈正統』巻一二「目錄」に「天童無際了派禪師法嗣」として「足翁麟禪師」と、『祖燈大統』巻七四「目錄」にも「天童派嗣」として「足翁麟」として名が挙げられている。一方、高麗の無學自超が所伝した『仏祖宗派之図』と愛知県一宮市の長嶋山妙興寺に所伝される南北朝期の『仏祖宗派之図』にも、ともに「無際派禪師」の法嗣として「足翁麟禪師」の名を挙げている。また室町中期の『仏祖宗派図』にも「天童無際了派」の法嗣として「足翁麟」の名が記されている。

これに対して、南北朝後期の『仏祖正伝宗派図』には「靈隠大川普濟」の法嗣として「普慈足翁麟」の名が存しており、江戸初期の『正誤宗派図』三にも「靈隠大川普濟」の法嗣のひとりに「普慈足翁麟」の名が存している。これらによれば、足翁麟は了派ではなく同じ大慧派の大川普濟（一七九—二五三）に参じて法を嗣いだことになる。普濟は了派と同門に当たる浙翁如琰の法嗣であるから、了派とは法叔と法姪の関係になる。足翁麟が普濟の法を嗣いだのであれば、了派にとっては法姪の法嗣ということになり、系統的にはきわめて近いわけであるが、果たして足翁麟は了派と普濟の何れの法嗣とするのが正しいのであるだろうか。

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

この点、注目すべきは元代初期の文人として知られる戴表元（字は帥初、剡源先生、一二四四—一三二〇）の『剡源戴先生文集』巻四「記」に、

西原菴記

西原菴、創於奉化禽孝鄉銅山西、足翁師之塔在焉。足翁師、諱徳麟、字足翁。許氏、剡源人。剡源有古刹、曰西峰円覺寺。十四歲、投其主僧一公為師。稍長縱游公參、卒得法於天童無際派公。遂主慈溪龍山三年、次蘆山六年、次昌国晉慈八年。撤晉慈一新之。次奉化岳林三年、次昌国吉祥四年。余尚書開奉化岳林、住持一年即退。歸鄞育王閣主、主育王一年退。主鎮江焦山四年。辛未十一月二十八日、察筆書偈、辭衆而逝。師生慶元己未、至是七十三載矣。遊既用天竺法、其徒介文、自焦山捧骨東歸。余尚書之夫人魏氏、捐山三畝、令介文塔藏之、是為西原。既而其徒之長清萃、及其季介文・介逸、各出私力、爭買山麓、拓塔疆崇塔亭、又宏屋室以備歲時朝夕展禮、若祝釐報本之事。是為西原菴、既而於塔之左右統二塔、以濟他比丘之不忍棄其骨。与諸人之亦用其法者、附窆於其間。既而其季介石、捐家田五十餘畝、歸菴以助饘粥香火之須。既而告諸有司、以西原菴立籍、使其子孫自清萃而下、世世以次傳之如是。庶幾可以堅久不壞。而介文・介逸・介石、不幸相繼歿。清萃然耄衰、尽力於西菴、不少懈惰、願其嗣惟如紹、欲

以「西原之事」伝「如紹」而來。請文曰、願有「以記」之、嗟夫人孰不「死」死則無「復可」念「此世」。世達人皆知之、而況於「学道者」乎。然為「人子孫」則不「得」、若是之「悲故」、為「之蓋蔽」、為「之展息」、為「之衛防」。蓋人心之「当」然、而「孝慈」之道、在「仏氏」本不「廢也」。足翁師有「語録」行「世」、焦山辞「衆傷」尤「惜潔」、僧林皆能言「之」、此不「贅」。

という明州奉化県の西原菴に関する記が存し、そこに足翁麟の消息を窺う内容がいくぶん詳しく見出せる。「西原菴記」によれば、足翁麟は法諱を徳麟といい、字ないし道号を足翁と称したことが知られる。法諱と道号の関係はいうまでもなく六祖下の青原行思（弘濟大師、？七四〇）がその門下に石頭希遷（無際大師、七〇〇七九〇）という逸材を得たときに「衆角雖」多「一麟足矣」と述べた故事に因んでおり、おそらく師の無際了派を無際大師希遷に準えて、徳麟は足翁の道号を用いているものであろう。徳麟は奉化県剡源の許氏の出身であり、慶元五年（一一九九）に出生しているから、日本の道元より一歳年長に当たっている。

徳麟は嘉定五年（一一二二）に一四歳で郷里の古刹である奉化県西南七〇里の西峯円覺禪寺に投じ、住持の「一」を受業師として得度している。したがって、徳麟の生まれ故郷である剡源の地も西峯円覺寺の存する奉化県西南七〇里の地に存したことになる。その後、長じて諸方に歴遊して参学に

努め、天童山において了派に参学し、ついにその法を嗣いでいる。了派が示寂した嘉定一七年（一一二四）の時点においても徳麟はわずか二六歳にすぎないことから、了派にとつて晩年にその門に投じて法を嗣いだ門人であつたことになり、あるいは日本の道元なども面識を持つていた可能性が高い。一方、いくつかの史料が大川普済の法嗣として伝えていることから、おそらく徳麟は了派が示寂した後に天童山を辞し、やがて普済にも参学する機会に恵まれたものと見られ、一に普済の法嗣のごとく解されたのであろう。もちろん、徳麟がいま少し天童山に留まって、雪窓祖日や日本の道元などと同じく曹洞宗の如浄に参学した可能性も存しよう。

その後、徳麟は明州慈溪県の龍山寺に開堂出世したとされるが、この寺については具体的な地が明確でない。龍山寺に住持すること三年にして同じ慈溪県西南二五里の蘆山開寿普光禪寺に遷住している。さらに六年にして明州昌国県北五里の龍峰普慈禪寺（普慈院）に住持して伽藍を一新したとされるが、『仏祖正伝宗派図』や『正誤宗派図』には大川普済の法嗣としながらも「普慈足翁 麟」とあつて、この寺での活動が特筆されていたことが知られる。すでに触れたごとく徳麟が住する以前に普慈寺の住持を勤めていたのは同門の法兄に当たる雪窓祖日であり、淳祐五年（一一四五）に祖日の代かその直後に普慈寺は再び火災に見舞われ、徳麟が重ねて伽

藍を復旧したことから、普慈寺の歴史の上で徳麟の名は大きく刻まれているわけである。

徳麟が普慈寺に住持していた期間は八年に及び、やがて徳麟は明州華化県東北五里の岳林禅寺（大中崇福寺）に住持しているが、岳林寺はいうまでもなく布袋和尚契此（定慧大師、？九一六）の霊場（岳林布袋道場）として名高い。徳麟が岳林寺に住持していたのは三年にすぎず、まもなく昌国県北六〇里の九峰山吉祥禅院（小天童）に遷住している。さらに四年にして慶元府主で尚書の余晦（字は古愚か）の請を受けて再び岳林寺に住持しているが、わずか一年にして退住している。ついで徳麟は鄞県東五〇里の阿育王山弘利禅寺が住持を欠いたため、阿育王山に入寺しているが、これもわずか一年にして住持職を退いたと伝えられる。ただし、『扶桑五山記』一「育王住持位次」や『明州阿育王山志』巻一六（『明州阿育王山統志』巻六）の「先覚攷」において、南宋末期の住持者の中に徳麟の名は載せられていない。

このように徳麟の活動地は概ね明州内に限られていたわけであるが、あるいはかつて明州内のみで化導を敷いて自ら足庵と号した曹洞宗の足庵智鑑（一一〇五—一一九二）に肖って、石頭希遷の故事とともに足翁の道号を用いているのかも知れない。智鑑はいうまでもなく如浄の本師であり、徳麟自身は直接に見知ることにはなかつたわけであるが、あるいは徳麟が

天童山で了派につづいて如浄に参じたすると、智鑑の事跡に関心を寄せる可能性も存しよう。

晩年に至つて徳麟は明州を出て鎮江府（江蘇省）丹徒県東北九里の焦山定慧禅寺の住持を勤めており、住すること四年を経て、辛未の年すなわち咸淳七年（一二七二）一月二八日に筆を求めて遺偈を書して逝去したとされる。世寿は七三歳であつたとするが、遺偈の内容は記されておらず、また法臘についても定かでない。徳麟は示寂に臨んで遺書を松源派の虚舟普度（一一九九—一二八〇）のもとに呈しており、『虚舟和尚語録』「臨安府靈隱景德禅寺語録」には、

焦山足翁和尚遺書至上堂。海門一夜波瀾惡。玉麟擲黄金角、魚龍蝦蟹尽潛蹤。大悲千手難模索。木馬悲嘶。石人淚落。諸人且道。足翁和尚、生耶死耶。長汀拖布袋、普化搖鈴鐺。

という上堂が収められている。普度は松源下の無得覚通の法を嗣いだ高弟であり、徳麟とは同年の生まれであるから、おそらく両者は若い頃から道交をなしていたものと見られる。徳麟は親しく遺書を普度に認めているが、遺書を受け取つた普度は亡き徳麟の遺徳を偲んで悲痛の涙に堪えている。ここにいう「海門一夜、波瀾惡しし、玉麟、黄金の角を擲折す」とは、徳麟が了派の仏法を嗣いだ消息を大海の大波によって麒麟が角を折られたことに準えたものである。徳麟が示寂した後、門人の介文が鎮江の焦山から遺骨を捧げて明州に帰り、

余晦の妻魏氏とともに奉化県の禽孝郷銅山の西に存した西原に納骨したとされ、さらに介文は同門の清萃や介逸とともに墓塔を建て、西原庵を創建したことが伝えられている。

また徳麟の門人には介文・介逸・介石など「介」を法諱の系字に持つ門人が存したとされるが、彼らは相繼いで逝去したもので、わずかに長嫡で「介」を系字に持たない清萃という禅者の系統のみがしばらく存続したとされ、清萃のもとには惟如紹介すなわち如紹 惟という法嗣が輩出し、この人が西原庵を継承したらしいことも記されている。また徳麟には語録が存して世に行われたとされるから、『足翁和尚語録』といった表題の語録が編集されていたものらしい。とりわけ、焦山を退く際に衆を辞した「焦山辞衆偈」という偈頌がもつとも感情豊かで優れていたため、諸方の叢林で徳麟の代表作として口ずさまれたと伝えられる。

このように徳麟は了派の法を嗣いで明州内の諸刹に住持し、かなりの活動をなしたことが「西原菴記」の内容によつて判明するわけであり、禅宗燈史や宗派図の伝承がそれなりの信憑性を有していることが確かめられる。おそらく徳麟は了派に参学して印可を得、さらに普濟に参学して信認を得ていたものであろう。両者のどちらを師として嗣承香を注いでも不都合がない状況であつたのかも知れない。

無了派の参学門人

つぎに無了派に参学したことが伝えられている参学門人について一通り考察しておきたい。はじめに特定の伝記史料などに明確に了派に参学したことが記されている禅僧や教僧について、その消息を改めて触れておきたい。

一、偃溪広闡

大慧派の偃溪広闡（仏智禅師、一一八九—一二六三）は浙翁如琰の法を嗣いだ禅者であるが、参学の過程で法叔の了派にも随侍している消息が知られる。広闡の法を嗣いだ枯崖円悟が撰した『枯崖漫録』巻中「龍峰定禅師」の項には、

龍峰定禅師、福之長溪人。嘗過毗陵時思庵、依無際。值開堂、拳、釈迦弥勒是他奴、他是阿誰。定曰、不。又拳、似之。又曰、不。無際拈住曰、一不。定失声答曰、泥团土塊。後於永嘉龍翔文絶象会中、分坐。無際在、明之太白、詒書趣帰。昔仏智老師亦侍無際、故嘗言之。

という記事が存している。これはすでに触れたごとく了派の法を嗣いだ龍峰 定の参学を記したものであつて、福州（福建省）長溪の出身であつた龍峰定が毘陵すなわち常州（江蘇省）の時思庵に赴いて了派のもとに身を寄せた因縁であり、その後、龍峰定は天童山においても了派に参学したとされる。枯崖円悟が言つるところによると、かつて仏智老師すな

わち広闡も了派のもとに随侍し、龍峰定と交流が存したもので、円悟も広闡から龍峰定の消息を直に聞いたことを伝えてゐる。

広闡が了派に参学した消息は中書舎人の林希逸（字は肅翁・淵翁、号は竹溪）の文集である『竹溪鬳齋十一藁統集』巻二「墓誌銘」に載る「径山偃溪仏智禪師塔銘」に、

十八受戒。其初調印鑲牛、印名具眼深、奇之曰、法棟也。偏参諸老、与少室睦・無際派、追隨甚久。卒嗣琰浙翁。初見於天童、針芥雖投、自知未穢。去再見於双徑、翁知梅將熟矣。

とあり、『偃溪和尚語録』巻末に所収される「塔銘」にも、十八受戒具。初調印鑲牛、印名具眼深、奇之曰、法棟也。偏参諸老、与少室睦・無際派、追隨甚久。卒嗣琰浙翁。見於天童、針芥相投、自知未穢。去再見双徑、翁知梅將熟矣。

と若干ながら字句が相違するものの、ほぼ同様に記されている。広闡は福州侯官県の林氏の出身であつて、龍峰定とは同郷ということになる。開禧二年（一二〇六）に一八歳で受具しており、初めに大慧派の鉄牛心印に調しているが、心印は拙庵徳光の法嗣であるから、了派や如琰とは同門に当たつてゐる。広闡の人となりを一見した心印は、直ちに仏法を担う器であると見抜いて「法棟なり」と称えたとされる。その

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

後、広闡は諸方に遍参しており、とくに松源派の少室光睦と大慧派の無際了派という二禪者に随侍することがもつとも久しかったとされるが、広闡が両者に参随したのがいずれの寺院であつたのかは記されていない。光睦は松源派祖の松源崇嶽に参じて法を嗣いだ高弟であり、台州（浙江省）黄巖県の瑞巖浄土禅院などに化導を敷いてゐる。やがて広闡は天童山に赴いて如琰のもとに投じて機縁が契つたとされるが、心にいまだ穢やかならざるものがあつて一旦はその門を辞し、嘉定一年（一二一八）に如琰が径山に住持した後に再び相見し、ついにその印可を受けてゐる。

したがつて、広闡がかつて了派に随侍したのも開禧二年から嘉定一年までの期間に限られることになり、了派が常州宜興県の保安山崇恩寺ないし時思庵に住していた時期に当たつてゐる。ただ、『枯崖漫録』の記事からすると、その後、広闡は龍峰定と同じく天童山でも了派に参学する機会に恵まれたものらしいから、このときには天童山の了派と径山の如琰のもとを往来していたものと推測される。広闡が了派と交わした問答商量が具体的に伝えられてゐないのは惜しまれ、『偃溪和尚語録』にも了派との関わりを直接に伝えるような偈頌は残されていない。わずかにすでに触れたことごとく『偃溪和尚語録』巻下「偈頌」に「送一徹二公再参無際和尚」という偈頌が存していることから、広闡は了派の法を

嗣いだ無境印徹らとも交遊を結んでいたことが知られる。

二、別山祖智

破庵派無準下の別山祖智（智天王、一一〇〇—一二六〇）もその参学期に天童山の了派のもとに投じていることが知られる。すでに触れたごとく『石刻史料新編』第三輯第八巻に所収される『鄞縣志』巻五九「金石上」には「天童寺別山智禪師塔銘、在天童中峯庵」として、慶元府太古名山天童景德禪寺第四代別山智禪師塔銘が載せられており、そこには別山祖智の参学的一端として、

十九歳、住成都昭覺、依徇牛全、始学出世法。後出峽抵公安、聞僧誦六巖語喜之、径往蘇之穹窿調巖。巖著之堂中。因聞華嚴法界品善財見弥勒樓閣因緣入已還閉之語、恍然如夢而覺、如醉而醒。遂頌雲見桃花機緣云、万緑叢中紅一点、幾人歡喜幾人嘆。巖頌之。隨衆二年、住見浙翁琰。無際派・高源泉・淳庵淨・妙峯善、皆有頭角之譽。最後見無準範於雪竇。

という記事が存しており、破庵派の無準師範の法を嗣ぐことになる祖智がそれ以前に了派に参学した消息が伝えられている。祖智は蜀（四川省）順慶の出身で俗姓は楊氏とされ、一四歳のときに出家得度し、嘉定二年（一一二八）に一九歳で成都府（四川省）成都東北一五里の昭覺禪寺に赴いて嗣承未詳の徇牛全に参じて始めて本格的に禪家の門を叩いて

いる。その後、三峽を下って荊南府（湖北省）の公安寺という寺院で一僧が楊岐派の六巖殺の語を誦しているのを聞いて喜悅し、直ちに蘇州（江蘇省）吳県西南六〇里の穹窿山福臻禪院（穹窿寺）に到って実際に六巖殺に調してその禅旨に心酔している。六巖殺は五祖法演・南堂元靜・石頭自回・蓬庵德会・壞衲大璉・六巖殺と嗣承する楊岐派の流れに属し、蘇州吳県西南一二〇里の洞庭西山の護国天王禪院に住持したことが知られるが、後に祖智自身も天王禪院に住持して智天王と称されるようになる。

六巖殺に参学すること二年にして祖智は再び行脚し、当代に名高い諸禅者のもとを歴参している。祖智が最初に参じたのは大慧派の浙翁如琰であつたらしいが、时期的に如琰はすでに杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺の住持に就いている。ついで了派にも参学しているわけであるが、これも时期的に天童山において参学しているものと見られる。さらに祖智は楊岐派の高原祖泉（？一一三九）や淳庵善淨（純庵）および大慧派の妙峯之善（一一五二—一一三五）などにも参学しているが、やはり彼らの住持地については何も示されていない。ただ、当時、祖泉・善淨・之善らはいずれも江浙の名刹に住持として活躍していたものと見られ、ともに祖智のすぐれた才腕を認めたことを伝えている。

やがて祖智は明州奉化県西北六〇里の雪竇山資聖禪寺に到

つて破庵派の無準師範のもとに投ずる機会に恵まれ、やがてその法を嗣いでいるが、師範が雪竇山に入寺したのは嘉定一六年（一一三三）の年末のことであるから、祖智はそれ以降に師範に参じたことになる。祖智は日本の道元と同じ年の生まれであり、天童山の了派のもとで同参であつた可能性も存するが、状況的には若干ながら祖智のほうが先に了派に参学しているものと推測される。すでに触れたごとく天童山の了派が嘉定一七年四月に示寂した際、師範は雪竇山の住持として天童山に赴き、亡き了派のために起露法語をなしたことが知られる。その後、三〇年あまりを経て、祖智は了派に学んだゆかりの天童山に住持する機会に恵まれていた。祖智は法兄の西巖了慧（一一九八—一二六二）の代に火災で焼失した伽藍を復興すべく天童山に住持し、その大役を果たしつつあつた最中に示寂しているが、天童山の歴史に大きな足跡を残した点は重要である。

三、頑空智覚

天台宗の頑空智覚（真悟大師）という教僧がやはり修行期に禅門を叩いて天童山の了派に参禅している。すでに触れたごとく、『物初賸語』卷三三の「頑空法師塔銘」には、

蚤年假道禪関、入太白無際之室、与諸老相抑揚。故見於講貫者、脱洒円活、与執紙上語者、大遠遡矣。

と記され、『続仏祖統紀』卷一「法師智覚」の章にも、

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

早年假道禪関、入太白無際之室、与諸老相抑揚。故見于講貫者、脱洒円活、与執紙上語者、大遠遡矣。

とほぼ同文で継承されており、智覚が太白の無際すなわち天童山の了派に参学していることが知られる。智覚は東嘉すなわち温州（浙江省）永嘉県の出身で俗姓は項氏とされ、一三歳で家を捨て、郡の越興寺で従定を礼して得度している。さらに東掖山で嘯巖文虎に見えて天台学を究め、広智系の機先浄悟（谿菴、一一四九—一二〇七）の法孫に連なっている。その後、栢庭善月（光遠、一一四九—一二四一）や古雲元粹のもとにも投じて天台学の研鑽に努めている。智覚の生没年については定かでないものの、この間に天童山にも掛搭して了派の方丈に入室し、禅の接化に浴して門下の諸禅者とも問答商量したものであろう。とくに「蚤年（早年）にして道を禪関に依り」と記されているから、かなり若くして了派に参じたものらしい。また「故に講貫を見れば、脱灑円活にして、紙上（帛上）の語を執る者と、大いに遠遡せり」とあるから、その後、智覚は了派のもとで修得した禅宗の接化を十二分に活用したものらしく、ただ単に紙面上の理解をなす者と大いに隔たっていたことを伝えている。

智覚は紹定二年（一二三九）春に杭州銭塘県の上天竺靈感観音教寺の栢庭善月のもとで座元（首座）を勤めている。その後、明州昌国県蓬萊郷の岱山超果教寺に出世し、さらに旨

を受けて杭州錢塘県の天申万寿円覚教院（もと無証了義法師塔院）にも住持している。智覚が示寂に臨んで示した遺偈は「六十一年、弄巧成拙、末後翻身、虚空迸裂」というものであり、世寿六一歳、法臘四七齡であったとされるが、残念ながら示寂した年月日は伝えられていない。開府の趙与權（字は悦道、存耕）の奏進で真悟大師の号を賜っている。

了派の会下を集った人々と道元

つぎに道元の記述などを通して、道元が天童山に掛搭していた当時、了派のもとに在って職位を勤めたことなどが知られる諸禅者について一通り整理しておきたい。ここで取り上げる禅者は、首座の智明と首座（長老）の宗月、都寺の師広と西堂の惟一、伝蔵主と用典座、および後に日本に渡来した寂円である。

一、智明

道元が天童山の了派のもとに投じた嘉定一六年の夏安居の頃、山内の首座（第一座）を勤めていたのは智明という禅者であったことが知られる。すなわち、道元は「明全和尚戒牒奥書」において、

已入唐、投天童山、入了然寮。于時堂頭無際了派禅師住持也。首座智明、都寺師広。

と記しており、住持の了派とともに、西班の首位である首座

を勤めていた智明と、東班の首位である都寺を勤めていた師広の名をとくに明記している。この中でとくに首座を勤めていた智明については、了派と如何なる関係あった禅者なのか残念ながら定かでない。

ただ、同時代の禅者として了派と同門に当たる浙翁如琰に参じて法を嗣いだ高弟に介石智朋（青山外人）という禅者の名が知られており、この人は先に示した偃溪広聞とは同門に当たっている。智明が智朋の誤りであれば、このとき智朋は法叔の了派に招かれて天童山の首座に就いていたことになり、入宋した明全や道元とも関わりが存したことになる。智朋には『介石和尚語録』が伝えられているが、残念ながら天童山の了派との関わりを窺わせるような記述は見られない。智朋は紹定二年（一二三九）二月三日に温州（浙江省）樂清県の北雁蕩山の羅漢禅寺に出世開堂しているから、その直前に天童山で首座を勤めていたとすればもっとも相応しいことになる。その後、首座は宗月に代わっているようであるから、夏安居を終えてまもない頃には智朋は了派のもとを辞したものであろうか。松源派の雲谷懷慶の『雲谷和尚語録』巻上「嘉興府本覚禅寺語録」には「淨慈介石和尚遺書至上堂」が収められており、智朋が景定年間（一二六〇—一二六四）の頃に世寿七十二歳で示寂しているらしいことが知られる。

二、宗月

すでに触れたごとく、『増集統伝燈録』巻二「目錄」や「祖燈大統」巻七四「目錄」さらに『統燈正統』巻二「目錄」などに了派の法嗣として載る言愆祖日は、「ここにいう宗月とは全くの別人と見るべきである。道元は『正法眼藏』「嗣書」の巻において宗月について、

雲門下の嗣書とて、宗月長老の、天童の首座職に充せしとき、道元に見せしは、いま嗣書をつる人のつぎかみの師、および西天東地の仏祖をならべつらねて、その下頭に、嗣書をつる人の名字あり。諸仏諸祖より、直にいまの新祖師の名字をつらぬるなり。しかあれば、如来より四十余代、ともに新嗣の名字へきたれり。たとへば、おのおの新祖にさづけたるがごとし。摩訶迦葉・阿難陀等は、余門のごとくにつらなれり。ときに道元、宗月長老に問ふ、和尚、いま五家宗派をつらぬるに、いささか同異あり、そのころいかん。西天より嫡嫡相嗣せられば、なぞ同異あらんや。宗月いはく、たとひ同異はるかなりといへども、ただまさに雲門山の仏はかくのごとくなる、と学すべし。釈迦老子、なによりてか尊重他なる、悟道によりて尊重なり。雲門大師、なによりてか尊重他なる、悟道によりて尊重なり。道元、この語をきくに、いささか領覽あり。

という記事を伝えている。天童山の了派のもとで修行していた道元に対し、雲門宗の嗣書を閲覽させてくれた禅者として

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

宗月長老という禅者が知られている。宗月はおそらく小禅院の住持を勤めた後、天童山に首座として招かれた人であったと見られる。このとき道元は宗月の所持する雲門宗の嗣書の特徴を具体的に伝えているが、他の五家の嗣書との異同を宗月に問い質している。宗月は道元の問いに対して「たとひ同異はるかなりといへども、ただまさに雲門山の仏はかくのごとくなる、と学すべし。釈迦老子、なによりてか尊重他なる、悟道によりて尊重なり。雲門大師、なによりてか尊重他なる、悟道によりて尊重なり」と語つたとされ、道元はこの宗月のことはを聞いて、いくぶんか領解するところが存したとされる。したがって、このとき宗月は雲門宗の禅者として了派に招かれて天童山で首座を勤めていたわけであり、了派の法を嗣いだ門人ではなかつたことになる。

『三大尊行状記』や『永平三祖行業記』には了派に参じて嗣書を拝観した記事につづいて「其外、惟一西堂・宗月長老・伝蔵主及万年寺元鼎和尚、皆是帶「嗣書」尊宿也。同雖「親近」未「契」心」とあり、明州本「建漸記」にも、

其外、惟一西堂・宗月長老・伝蔵主及万年寺元鼎和尚等、皆是帶「嗣書」尊宿也。問「道求」法、雖「親近」未「契」心。

と記されており、いずれも道元が在宋中に参じた長老として宗月の名を伝えている。この点、ほぼ同時期の禅者として注目すべきは、楊岐派の月林師観（一一四三—一二二七）の語録

を編集した門人に宗月という同名の人が存していることである。ここにいう宗月は師観の法嗣である孤峰徳秀とともに嘉定一一年（一二二八）の頃に『月林觀和尚語録』を編集しており、師観の門下でもかなり重要な役割を演じた禅者であったものらしいが、なぜかその後、師観の法は嗣がなかったのか、その消息については定かでない。

中国の江南禅林では修行僧は諸禅者のもとに歴参して幾人かの師からそれぞれに嗣書を受けることは何ら不自然なことではない。その後、出世開堂するのの際し、嗣承香を誰に注くかはあくまで本人すなわち学人の側に任されている。とすれば、宗月がその遍参の過程で了派のもとで首座を勤める以前、雲門宗の禅者に参学し、さらに月林師観の信認を得て語録の編集に関わっていたと見ることも可能であろう。ただ、状況からして宗月は道元の言うごとく雲門宗の嗣書を所持していたものであるから、当時としては希少な雲門宗の禅者として活動していたのであろう。当然、在宋中の道元の関心も宗月の所持していた雲門宗の嗣書に向けられたわけであり、道元が宗月を介して雲門宗の嗣書を閲覧したことは、当時の雲門宗の勢力が大幅に衰微していた点を考慮すれば、きわめて貴重な体験であったといつてよい。この点、宗月が具体的に雲門宗の誰の法を嗣いでいたのか、道元がその点を何ら記録していないのは惜しまれてならない。道元は「いま

嗣書をうる人」とか「新嗣の名字」と記しているが、これが宗月自身のことであると断定していない。

宗月はこのとき長老の肩書きで称されているから、すでに何れかの寺院に住持した経験が存したものと見られるが、天童山の首座を勤める前やその後如何なる寺院に住持したのか、その消息については残念ながらも伝えられていない。

三、師広

道元が天童山の了派のもとで親しく交友した禅者として都寺の師広が存している。都寺はいうまでもなく東班（東序）の最高位であり、禅寺の経営面を掌る総事務長といった要職である。すなわち、道元の「明全和尚戒牒奥書」には、

已入唐、投天童山、入了然寮。于時堂頭無際了派禅師住持也。首座智明、都寺師広。

と記されており、天童山の了派のもとで首座の智明とともに都寺の要職に就いていた禅者として師広の名が知られる。『正法眼蔵』「嗣書」の巻には、天童山で了派の嗣書を拝観する消息として、

この嗣書を請出することは、去年七月のころ、師広都寺ひそかに寂光堂にして道元にかたれり。道元ちなみに都寺にとふ、如今たれ人かこれを帯持せる。都寺いはく、堂頭老漢那裡有相似。のちに請出ねんころにせば、さだめて見することあらん。道元このことばをききしより、もとむるに二三さし日夜に休せず。

このゆえに今年、ねんごろに小師の僧智庚を囑請し、一片心をなげて請得せりしなり。

という記載が存している。これによれば、師広は道元が天童山に掛搭してまもない嘉定一六年の七月に寂光堂で道元と歎談していた折り、禅宗の嗣書のことを語つたとされる。道元が嗣書を携帯している禅者はいま誰がいるかを問うと、師広は堂頭(住持)の了派の所持している嗣書について触れ、懇ろに頼めば必ずや閲覧の機会が与えられるであろうと道元に告げたとされる。師広は天童山という大刹の都寺という要職にありながらも、日本僧の道元に対してきわめて親切に接してくれた人であり、やがて道元は了派の嗣書を実際に拝観する機会にも恵まれている。

四、惟一

道元が天童山に掛搭していた当時、西堂の要職にあつた禅者に惟一という人が知られるが、了派の代から西堂であつたのか、如浄の代に初めて西堂に就いたのか明確でない。西堂とは他寺の住持を勤めた者がその寺に到つて寺内に居所を定めて隠居したときの称号である。『正法眼蔵』「嗣書」の巻によれば、

道元在宋のとき、嗣書を礼拝することをえしに、多般の嗣書ありき。そのなかに、惟一西堂とて、天童に掛錫せしは、越上の人事なり、前住広福寺の堂頭なり。先師と同郷人なり。先師つ

天童山の無際了派とその門流(佐藤)

ねにいはいく、境風は一西堂に問取すべし。あるとき西堂いはいく、古蹟の可観は人間の珍玩なり、いくばくか見來せる。道元いはいく、見來すくなし。時に西堂いはいく、吾那裏に一軸の古蹟あり、甚麽次第なり、与「老兄」看、といひて、携來をみれば、嗣書なり。すなはち法眼下のにてありけるを、老宿の衣鉢のなかり得たりけり。惟一長老のにはあらざりけり。かれにかきたりし様は、初祖摩訶迦葉、悟「於釈迦牟尼仏」、釈迦牟尼仏、悟「於迦葉仏」、かくのごとくかきたり。予道元、これらを見しに、正嫡の正嫡に嗣法あることを決定信受す。未「曾見」の法なり。仏祖の冥感して児孫を護持する時節なり、感激不「勝」なり。

という記事が存しており、道元は西堂の惟一と親しく関わっている。この惟一は如浄と同じく越州(浙江省)の出身であつたとされることから、漠然と如浄が住持となつてから天童山に到つて西堂に就いたかの印象を受けるが、道元は初めて惟一が見せた嗣書を閲覧したときの真新しい感激を伝えているから、了派の代におけるできごとではなかつたかと推測される。

この点、興味深いのはすでに触れたごとく大應派の偃溪広聞の『偃溪和尚語録』巻下「偶頌」に、

送「一徹」公再參「無際和尙」。

両公未「見」無際「前」謂「從」本有「成」話墮。両公既「見」無際「後」謂「是」不「同」成「両箇」。明知「見」与「未」見時、蒼龍終不「澄潭臥」、

雲巖晚歸、玲瓏巖、老兒家有「彌天禍」。口皮辺禪憤「弄弄」、動輒引「人人」荒草、不知「兩公竟」何意、春風又問「東南道」。貧思「旧債」濟北驢、再欲「一頓」愁作麼。當時失却「一隻眼」、賊過「關門」夾山老、後三十年有「話在」、珍重此行休放過。

という偏頗が伝えられていることである。ここにいう、「一徹二公」とは、文の初めに「兩公、未だ無際に見えざる前、本より有り」と謂いて話墮を成す。兩公、既に無際に見えて後、是れ同じからずと謂いて両箇と成る」とあるから、一と徹という二人の禅者のことを指している。両者が了派のもとに帰参したのは玲瓏巖が存する天童山景德寺での消息であったことも確かめられる。この中で、徹とはすでに触れたことく了派の法を嗣いだ無境印徹のことであるが、いま一人の一というのがあるいは惟一のことを指しているのではなからうか。両者は早くに了派に参じていたわけであり、すでに天童山においてもかなりの長老格であったものと見られる。しかも、一は印徹より先に名が記されているから、年齢的にも印徹より法兄格であったと解せられる。

あるいは惟一は印徹と斑を組んで了派に参じて印可を得、その後、一旦は広福寺に住持として出世したものの、やがて天童山に掛搭して広福寺前住の肩書きで西堂に就き、再び晩年の了派を補佐していたのではなからうか。ここにいう広福寺については諸州に同名の寺が存することから、いずれとも

断定できないが、おそらく状況的には天童山にほど近い明州象山県西南三〇里に存した蓬萊山広福禅寺あたりがもつとも妥当ではなからうか。

天童山で惟一は西堂として道元とも親しく道交を結び、ある老宿が衣鉢の中に所持していた古人の墨蹟を道元とともに閲覽しており、道元はそれが法眼宗の嗣書であったことを伝えていた。これによつて道元は禅門の正嫡には嗣書の相承があることを知り、未曾見のできごとであったと感銘をもつて記している。

その後、惟一は了派が亡くなつて後も天童山に留まつて西堂の要職を勤めていたのであり、とりわけ越州の出身であったことから、同郷の如浄からも「境風は一西堂に問取すべし」と深い信認を得ていたことが知られる。したがつて、惟一はおそらく印徹らと同じく了派の法を嗣いだ門人であつたと解するべきである。この惟一を破庵派の無準師範の高弟の一人である環溪惟一（二二〇一—二二八二）に当てるのは、年代的にも出身地からも全くの誤りである。⁽⁹⁾

五、伝蔵主

道元が天童山に掛搭してまもなく関わりを持った禅者に伝蔵主という人が知られている。すなわち、『正法眼蔵』「嗣書」の巻によれば、

また龍門の仏眼禅師清遠和尚の遠孫にて、伝といふものありき。

かの伝蔵主、また嗣書を帯せり。嘉定のはじめに、隆禪上座、日本人なりといへども、かの伝蔵主やまひしけるに、隆禪よく伝蔵を看病しけるに、勤勞しきりなるによりて、看病の勞を謝せんがために、嗣書をとりいだして禮拜せしめけり。みがたきものなり、与^レ你^レ禮拜といひけり。それよりこのかた、八年ののち、嘉定十六年癸未あきのころ、道元はじめて天童山に寓直するに、隆禪上座ねんころに伝蔵主に請して、嗣書を道元にみせし。その嗣書の様は、七仏よりのち臨済にいたるまで、四十五祖をつらねかきて、臨済よりのちの師は、一円相をつくりて、そのなかにくぐらして、法諱と花字とをつつしかけり。新嗣はおはりに、年月の下頭にかけり。臨済の尊宿に、かくのとくの不同ありとしるべし。

という記事が存しており、天童山の了派のもとで蔵主を勤めていた 伝 という禅者の消息を伝えている。これによれば、伝蔵主は北宋末期に舒州（安徽省）桐城東北四〇里の麻山龍門寺で活躍した楊岐派（仏眼派祖）の龍門清遠（仏眼禪師、一〇六七—一一二〇）の系統に属する遠孫であったと伝えられる。当時、仏眼派はすでに衰微しており、その最後を飾るのは入宋した日本僧の俊苒（我禪房、不可棄法師、一一六六—一二二七）が参禅した蒙庵元聡（蒙叟、一一一七—一二〇九）などにすぎないから、あるいは伝蔵主も元聡あたりに印可を得ているのかも知れない。

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

伝蔵主はかなり長期にわたって天童山に寓居していたものらしく、嘉定九年（一二二六）の頃に日本僧の隆禪が伝蔵主の病いを看病した際に、伝蔵主はその功勞に報いるため仏眼派の嗣書を隆禪に拝観せしめたとされる。状況からして伝蔵主は大慧派の浙翁如琰が住持であった頃から天童山で蔵主の職を勤め、住持が如琰から楊岐派の癡鈍智額さらに大慧派の海門師齊と変遷し、了派が入院しても蔵主を勤めていたのであろう。八年を経た嘉定一六年の秋に道元は隆禪の仲介で伝蔵主の所持していた仏眼派の嗣書を閲覧する機会に恵まれており、その嗣書には過去七仏から臨済義玄までを書き連ねた後、一円相の中に臨済宗の一系が法諱と花字で書き写されていたものであったと伝えられている。

この伝蔵主を如琰・師齊・了派と同門に当たる大慧派の秀巖師瑞（？一二三三）に参じて法を嗣いだ枯山良伝のことではないかとする説もあるが、大慧派の禅者ということになると、道元が仏眼派の人と明記しているのと矛盾を来たすことになる。このほか大慧派の淮海元肇（原肇とも、一一八九—一二六五）の『淮海外集』巻下には「大明慧紹請^レ伝蔵主^レ山門疏^レが収められているが、ここにいう伝蔵主が了派のもとにいた伝蔵主と同一人物なのか否かは定かでない。

六、用典座

道元が天童山の了派のもとに在った折、一人のすぐれた典

座と問答した消息が『典座教訓』に載せられている。すなわち、『典座教訓』によれば、

山僧在天童時、本府用典座充職。予因齋罷、過東廊赴超然齋之路次、典座在仏殿前晒苜蓿、手携竹杖、頭無片笠。天日熱、地輒熱、熱汗流徘徊、勸力晒苜蓿、稍見苦辛。背骨如弓、虬眉似鶴。山僧近前、便問典座法寿。座云、六十八歲。山僧云、如何不使行者人工。座云、他不是吾。山僧云、老人家如法、天日且恁熱、如何恁地。座云、更待何時。山僧便休。歩廊脚下、潛覺此職之為機要矣。

という天童山の用典座との問答が伝えられている。この問答が明確に了派が天童山の住持であった時期のものとは断定できないが、内容からすると道元がいまだ天童山に掛搭してまもない時期すなわち嘉定一六年（一一三三）の夏から秋の初め頃における消息と見てよいであろう。この典座は了派のもので典座の要職を勤めていたことが知られ、名は用というのみで法諱の上字が定かでない。また本府とあるから用典座は地元の明州慶元府の出身で、このとき六八歳であったことが知られ、逆算すると紹興二六年（一一五六）の出生であったものと推測される。

道元が齋（中食）を終えて東の回廊を通つて超然齋に赴く際、用典座は老齡の身をおして仏殿の前で炎天下に苜蓿（海苔か）を晒している。道元が近づいて年齡を尋ねると、六八歳

であると告げる。さらに道元が「どうして行者や人工（人夫）を頼まないのか」と質問すると、用典座は「他は是れ吾れにあらす」と答えている。他人が行なつたことは自らの修行にならないというのであり、用典座は六八歳にして黙々と自らの勤めを行っている。道元はなおも「このように日差しが暑いのに、どうしてそんなに努めるのか」と質すと、用典座は「更に何れの時をか待たん」と答えている。苜蓿は炎天下に干してこそ味わいが出るのであり、「このときなさに何時なせというのか」といつた意であろう。この用典座のことを聞いて道元は口を閉ざして感服し、回廊を歩く足取りの中で典座という職の眞の意義を深く実感したと伝えている。

用典座が了派のもつて典座の職位に拔擢されているのであれば、了派は用典座の人となりを十分に熟知した上で典座を任せているものと見られ、すぐれた典座が天童山にいた事実を通して、了派の人材登用の的確であつた消息を窺うことができよう。ただし、用典座が了派の示寂した後も天童山に留まつて、自らより年齡の若い曹洞宗の如浄のもとでも典座を勤めていたのか否かは定かでない。

七、寂円

後に日本に渡來して道元に参じ、やがて永平寺第二世の孤雲懷奘（一一九八—一二八〇）の法を嗣いだ寂円（一二〇七—一二九九）は初め天童山の如浄のもとに在つて修行し、道元

とも交遊を結んでいたことが知られている。ただ、実際には如浄が天童山に住持する以前から寂円は天童山に在つて参禅学道に努めていたものらしく、当然、それは了派が天童山の住持であつた時期に相当している。状況的には寂円も天童山の了派のもとで参学し、そこで入宋した道元らとも知り合つたことにならう。『越前宝慶寺開山寂円禅師』の項には、

蕭福山宝慶寺開山寂円禅師者、大宋国洛陽之人也。幼年登^二大白山^一、剃髮受戒。依^二如浄禅師^一得^レ悟。普参^二大宋国諸山之名師^一、究^二東西之玄奥^一、云云。貞応二年、道元禅師入宋之時、在天童山始相見、心心相投、遂有^二師弟之契約也^一。

という記事が存している。寂円が洛陽（河南省）の出身であつたとするのは問題であるが、幼年にして太白山すなわち天童山に上つて剃髮得度したことが記されている。寂円は南宋の開禧三年（一一〇七）の出生となるから、仮に幼年といふのが一〇歳代の半ばとすれば、嘉定年間（一一〇八—一一二四）の後半の頃に出家していることにならう。また日本の貞応二年（一一三三）すなわち南宋の嘉定一六年に道元が入宋して天童山に掛搭した際に、初めて相見して心に契うところがあつて師弟の契約があつたとされる。したがつて、寂円はすでに了派の代には天童山に修行していたことになり、了派のもとで参学に努めていたわけであつて、その後、道元と同

天童山の無了派とその門流（佐藤）

じように新たに如浄に随侍したことが知られる。

無了派に参学した日本僧

すでに触れたごとく、入宋した当初、道元が天童山において了派に参学した消息は夙に知られているが、了派に学んだ日本僧としては、道元のほかに数名の禅者が存している。ここでは隆禅・明全・廓然・高照という四禅者について天童山の了派との関わりに絞るかたちで一通り整理しておきたい。

一、隆禅

道元が入宋して天童山に掛搭した際、すでに天童山には隆禅（中納言法印）という日本僧が久しく寺内に留まっていたことが伝えられている。すでに触れたごとく、『正法眼蔵』「嗣書」の巻には、

また龍門の仏眼禅師清遠和尚の遠孫にて、伝といふものありき。かの師伝蔵主、また嗣書を帯せり。嘉定のはじめに、隆禅上座、日本人なりといへども、かの伝蔵主やまひしけるに、隆禅よく伝蔵を看病しけるに、勤勞しきりなるによりて、看病の勞を謝せんがために、嗣書をとりいだして礼拝せしめけり。みがたきものなり、与^レ你礼拝といひけり。それよりこのかた、八年のち、嘉定十六年癸未あきのころ、道元はじめて天童山に寓直するに、隆禅上座ねんころに伝蔵主に請して、嗣書を道元にみせし。

という記事が存している。隆禅は日本国の人であり、かつて伝蔵主が病のときに看病に努めて以来、伝蔵主と深い道交を持つていたものらしく、伝蔵主は自らが所持していた嗣書を隆禅に閲覧せしめたとされる。それより八年の後、嘉定一六年に道元が天童山に居住していた際、秋の頃に隆禅は伝蔵主に請うてその嗣書を道元に見せてくれたとされる。

したがって、隆禅はもともと久しく天童山の了派に参学した日本僧ということになり、おそらく了派が天童山に住持する以前から、久しく天童山に留まっていたことになる。しかも『道元和尚伝』巻一〇「偈頌」には、

与_二郷閭_一禅上座。

錫駐_二玲瓏_一不動著、功夫辦道自然円、迴光転_レ眼幾経_レ日、退歩_レ躡_レ身已_レ積_レ年。穿_二御牯_一牛開鼻_レ、打_レ開_レ仏祖鉄関_レ禅、一生跳_二出_レ聖凡路_一、待_レ後何生_二木耳_一縁。

という偈頌が収められているから、隆禅は天童山（玲瓏）に掛錫すること久しく、功夫辦道して悟道するところが存したものらしく、あるいは了派のもとで印可証明を受けていた可能性も存しよう。

隆禅は了派が示寂して後もしばらく天童山に留まっていたものらしく、道元が師の如浄と交わした『宝慶記』には、

問云、菩薩戒何耶。和尚示曰、今隆禅所_レ誦戒序也。

というやり取りが交わされている。道元が禅宗の菩薩戒とは

何かと質問したのに対し、如浄は実際に隆禅が誦誦していた菩薩戒序をもって答えており、そのとき隆禅が天童山にいまだ居していたことが知られる。この点は長円寺本『正法眼蔵隨聞記』第二にも、

是れに依つて一門の同学五根房_①、故用祥僧正の弟子なり。唐土の禅院にて持齋を固く守りて、戒経を終日誦せしをば、教へて捨テしめたりしなり。

という記事が存しており、ここにいう五根房（五眼房）というのが隆禅のことを指しているものと見られ、やはり中国の禅院で菩薩戒経を終日誦誦していた隆禅の消息が記されている。おそらくその後まもなく隆禅は天童山の如浄のもとを辞して日本に帰国したものと見られ、やがて高野山の金剛三昧院の第二世に就任している。

二、明全

明全（仏樹房、一一八四—一二三五）は黄龍派（千光派）の明庵宋西の高弟であり、道元らを伴って入宋したことで名高い。明全については本稿の随所で論じておいたが、ここでは明全が天童山において了派と如何なる交流をなしたのかについて、その内容を絞るかたちで一通り触れておきたい。すでに述べたごとく道元は「明全和尚戒牒奥書」において、

已入唐、投_二天童山_一、入_二了_レ然寮_一。于_レ時堂頭無際了派禅師住持也。首座智明、都寺師広。

と記しているから、おそらく明全も天童山において了派に参学する機会が多かつたものと推測される。また宝慶元年（一二二五）八月九日に修職郎監臨安府都税務の虞樽が書いた「日本国干光法師祠堂記」には、

後十年、其徒明全、復来山中、捐「楮券千緡」、寄「諸庫」、転息為「七月五日忌」、設「冥飯」。衆本孝也。

という記事が存しており、明全が天童山において先師の栄西のためにその忌日（七月五日）に齋会の供養を営んでいる。栄西が逝去して一〇年後とすると、嘉定一七年のことに解されるが、おそらく天童山に掛搭してまもない嘉定一六年の七月五日のできごととすべきであろう。了派が健在であったのは嘉定一六年の七月五日しかなく、翌年の七月五日ではすでに了派が示寂して三ヶ月を経過しており、如浄もいまだ天童山に到着していなかったと見られるから、このときと解するのは不自然なのである。

その後、道元が杭州の径山方面や台州の天台山方面へと諸山歴遊に赴いている時期も、明全は天童山に留まっていたものと見られるから、その間、住持の了派と相見する機会はかなり存したはずであろうが、史料的には何も伝えられていない。了派が逝去して住持が如浄に交代した後も、明全は天童山に止まっていたが、宝慶元年五月に病状が悪化し、同月二七日に道元に看取られて世寿四二歳の生涯を終えている。

天童山の無了派とその門流（佐藤）

三、廓然

明全や道元が入宋する際に京都の六波羅探題から下された下知状の写しに、

建仁寺住侶、明全・道元・廓然・高照等、為「渡海」下「向西海道」。路地闊闊泊泊、無「煩可」動過之状、如「件」。

貞応二年二月廿一日、武蔵守「花押」、相模守「花押」と記されており、そこに廓然という禅者の名が見られる。おそらく廓然は道元や高照と同じく明全子嗣いの門弟であったものと見られ、明全と行動を共にしたのであれば、当然のことながら天童山において住持の了派に参学する機会も存したことになる。

しかしながら、廓然は在宋中に天童山で逝去したものでなく、『道元和尚伝録』巻一〇「偈頌」には、

看「然子終焉語」二首。

廓然無聖硬如「鉄」、試点「紅爐」銷似「雪」、更問今歸「何処」去、碧波深処看「何月」。

爍「破從來」一版鉄、「莫」知「落処」六華雪、天辺玉兔落「潭底」、指折如何未「見」月。

という二首の偈頌が残されている。これによれば、道元は然子すなわち廓然の最期に立ち会えなかったものらしく、廓然が残した遺偈を見て韻を和して二偈を詠じたことが知られ、おそらく廓然の遺偈にも、「鉄」「雪」「月」の語が存したので

あろう。廓然は雪の舞う時期に亡くなったものらしく、道元が長期にわたって天童山を離れていたのは諸山歴遊の時期であるうから、廓然は明全より早く了派の住持期に天童山で逝去したものであろうか。

四、高照

やはり六波羅探題の下知状に廓然とともに高照の名が存しており、一に亮照と記されている。これは史料の筆写段階で、「高」と「亮」を誤写したことに由来するものであろうが、ここでは高照を正しい法諱と解しておきたい。この人もやはり明全の門弟と見られ、道元や廓然とともに明全に随侍したのであれば、当然のことながら天童山の了派にも参学する機会が存したことになるう。しかしながら、その後、高照が果たして道元とともに帰国したのか否か、この人についてはその消息が何も掴めないのが惜しまれる。

禅宗燈史・僧伝に載る無了派のことは

つぎに記事内容は重複するものの、了派が残した上堂や問答商量、さらに偈頌や頌古などについて一通り考察しておきたい。はじめに上堂語について整理してみると、『枯崖漫録』巻上の了派の項には、つぎのように記されている。

慶元四年、開「法常之保安」。上堂云、「説即無功有過、不説又是罪過。自今各省己過、無以責人之過。」拄杖不「応」放過、

也要「從」頭按「過」。卓「拄杖」云、「内卦已成、再求「外象」。又卓三下。占「得風山小蓄」、變「成沢風大過」。卓一下、下座。」この上堂は了派が慶元四年（一一九八）に常州宜興県の保安山崇恩禪寺に開堂出世して以降、その住持期間になされた上堂であることが知られ、おそらく開堂出世したときの入上堂と見てよいであろう。いま、上堂の部分を書き下してみようなら、およそつぎのごとくなるう。

上堂に云く、「説けば即ち功無く過ち有り、説かざるも又た是れ罪過。今より各おの己れの過ちを省して、以て人の過ちを責むること無かれ。拄杖もて、応に過ちを放つべからず、也た頭より過ちを按べんことを要す」と。拄杖を卓して云く、「内卦は已に成り、再び外象を求む」と。又た卓すること三下す。「風山小蓄を占得し、沢風大過を變成す」と。卓すること一下して下座す。

冒頭の六句はみな「過」の字を連続して用いており、自己の罪過を課題として上堂がなされている。おそらく崇恩寺に開堂して門下に垂示をなすときのことばであり、説けば功がなく過ちが起ころ、説かないでいるのもまた罪過である、今よりはそれぞれ己の過ちを省み、人の過ちを責めてはならないと説示し、拄杖で過ちを追いやるのではなく、一つ一つ過ちを調べ正してみよと門下の学人に迫っている。「内卦は已に成り、再び外象を求む」とか「風山小蓄を占得し、沢風

大過を变成す」とあるのは、易の内卦が熟して外象が現するさまに譬えて、修行が熟して修行者の姿にその功が現われ出ることを示したものであらう。

また、すでに触れたごとく『増集統伝燈録』巻一「四明天童無際了派禪師」の章には五つの上堂が載せられている。これら五つの上堂については「保安山崇恩彰孝禅寺への開堂出世」の箇所ですでに原文を載せておいたので、いま書き下してみるならば、およそつぎのようにならう。

上堂。「三五は十五、月田かにして戸に当たる。匝地普天なりと然雖も、要且つ、秋毫も露われず。对景、誰に憑りて此の心を話たり、人をして飄りて寒山子を憶わしめん」と。

上堂。「諸人、十二時中、上り来たり下り去りて、折旋俯仰し、起居問訊するも、崇恩を護すること一点も得ず。只今、坐立儼然として、賓主交参し、面面相い観るに、崇恩、亦た諸人を護すること一点も得ず。既に然して彼此、相い護せず、什麼と為てか自ら障礙を作す」と。喝一喝す。「風に因りて火を吹けば、力を用つること多からず」と。

上堂。「昨夜、一段の禅を安排し、天明に起き来たりて都て忘却す。而今、鼓を打つに衆は雲のごとく臻まり、対面して時に臨んで旋ち捏合す」と。遂に頭を回らして侍者を喚んで云く、「者の一著を記取せよ」と。

上堂。「釈迦老子、昔、今辰に向かつて、大寂定に入る。笑う

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

に堪えたり、天下衲僧、舟に刻みて劍を求むることを、二千余年、区区として已まず。崇恩、今日、神機を動かさず、墨曇の鼻孔を抜転し、囚らずも草を打ちて蛇驚く、只だ要す大家の相見せんことを。汝等諸人、各おの宜らく子細に觀瞻すべし、蹉過せしむること莫かれ」と。遂に合掌して云く、「不審、不審」と。

上堂。「仏法はあなたが日用の処に在り、あなたが著衣喫飯の処に在り、あなたが語言醉酢の処に在り、あなたが行住坐臥の処に在り、あなたが屎送尿の処に在り。心を擬して思量すれば便ち是ならず。咄。啼き得て血流れて用処無し。如かず、口を縛さして残春を過す」と。

これらはいずれも保安山崇恩寺においてなされた上堂であるが、すでに考察したごとく、了派の仏法を知る上ではそれぞれ貴重な示衆といつてよい。

また『枯崖漫録』には、了派が天童山を退院する際の上堂として、

嘉定問、在天童。示疾辞、衆上堂云、十方無壁落、四面亦無門、淨裸裸、赤洒洒、没可把。喝一喝云、幾度売来還自買、為機松竹引清風。下座。入丈室、端坐、泊然而化。

といつ「示疾辞、衆上堂」が載せられている。この上堂の部分も書き下してみるなら、およそつぎのようにならう。

疾を示して衆を辞する上堂に云く、「十方に壁落無く、四面に

亦た門無し。淨裸躰、赤洒酒、没可把」と。喝一喝して云く、「幾度か売り来り、還た自ら買う。為めに憐れむ、松竹の清風を引くことを」と。下座す。

すでに触れたごとく、この「示疾辞」衆上堂「は了派の遺偈ともいふべきものであり、天童山でなした唯一の上堂として貴重な最期の消息を伝えている。天童山に戻っていた道元もおそらく大衆（修行僧）の一員として了派の「示疾辞」衆上堂「を目の当たりに拝聴し、やがて了派の示寂を知ったものと推測される。

つぎに禅宗燈史や僧伝に載せられている了派がなした偈頌であるが、『枯崖漫録』には了派の詠じた作として、

初預「密庵法席、有剪紙塔、戲俾頌、頌云、当陽拈起剪刀、裁、七級浮函心、手回、堪笑耽源多口老、湘南潭北露尸骸、一衆服膺。

という偈頌を伝えている。これはすでに触れたごとく了派が参学の師である密庵咸傑に呈した作であり、若い頃のものとして貴重であろう。

同じく『枯崖漫録』には偈頌ないし仏祖贊として、

讀「船子云、三寸離鉤、一機、百千毛髮冷颼颼、雖然兩手親分付、要在渠儂、自點頭。

讀「靈照女云、老爺喪、尽生涯、後、累汝、街売、芥筍、不是家貧兒子苦、此心能有幾人知、叢林稱之。

という二首の作が載せられている。最初の作はすでに触れたごとく了派が崇敬する船子徳誠と夾山善会の消息を詠じたものであり、松江の華亭に在るときの作と見られる。つぎの作は唐代に活躍した龐蘊（字は道玄、龐居士、？—一〇八）の娘の靈照を頌賛したものである。この二首は了派の代表的な偈頌として広く叢林に知られていた祖贊といえよう。

一方、『統伝燈録』卷三五「明州天童派禪師」の章には、明州天童派禪師、字無際、題「郁山主像」偈云、築臺溪橋蹉跎時、悞將「豌豆」作「真珠」、兒童不解「藏家醜」、笑「倒楊岐老古錘」。

という偈頌一首のみが収められている。「郁山主の像に題する偈」とあるが、郁山主とは衡州（湖南省）茶陵の出身で、臨濟宗（楊岐派祖）の楊岐方会（九九—一〇四九）の法を嗣いだ茶陵郁山主のことであり、この人は白雲守端（一〇二五—一〇七二）を落髮得度した受業師として知られ、やがて方会のもとに参学せしめたことで名高い。了派は郁山主が方会のもとで契悟した際の「悟道偈」を踏まえてその頂相に贊を寄せたのである。

『禅宗頌古聯珠通集』に載る無了派の頌古

ところで、南宋代から元代初期の江南禅林の著名な禅者たちの頌古を集めた『禅宗頌古聯珠通集』の「増収」の部分に、了派の頌古がかなり収められている。以下、順次に列記して

簡略な考察を加えておきたい。

はじめに『禅宗頌古聯珠通集』巻二「世尊機縁」の「釈迦牟尼世尊」の章には、

世尊、因黒齒梵志運_二神力、以_二左右手_一拏_二合歡梧桐樹兩株、至_二靈山_一獻_二仏_一。仏云、梵志。志応諾。仏云、放下著。志放下左手一株。仏又云、放下著。志放下右手一株。仏又云、放下著。志云、我両手尽空、未嘗更放下個甚麼。仏云、吾非教汝放下捨其華、汝当放下内六根・外六塵・中六識。無_二可捨_一。是你免_二生死_一。処。志忽然大悟。

截_二断千崖路_一、風前活計新、誰知蓆帽下、元是昔愁人。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは世尊（釈尊）と外道の黒齒梵志との間で交わされた「放下著」に因む問答であり、すべてを捨て去ることで生死の迷いを離れて大悟した消息が示されている。

同じく『禅宗頌古聯珠通集』巻二「世尊機縁」の「釈迦牟尼世尊」の章には、

世尊臨_二入涅槃_一、文殊請_二仏再転法輪_一。世尊咄云、吾四十九年住_二世_一、未嘗説_二一字_一、汝請_二吾再転法輪_一、是吾曾転法輪_二罪_一。四十九年打_二之邊_一、下梢大作_二師子吼_一、雖_二然未_一始_二転法輪_一、畢竟分疎成_二応口_一。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは釈尊が入般涅槃に

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

臨んで四十九年間に一字も説かなかつたと説示した故事に因んでおり、「四十九年一字不説」の公案に対する拈提である。

同じく『禅宗頌古聯珠通集』巻三「菩薩機縁」の「舍利弗」の章には、

舍利弗入_二城_一、遙見_二月上女出_一城。弗_二心口思惟_一、此姉見_二仏_一、不知_二得忍_一不、我試問_二之_一。纔近便問、甚麼処去。女曰、如_二舍利弗_一与_二麼去_一。弗云、我方入_二城_一、汝当_二出_一城、云何言_二如_一舍利弗与_二麼去_一。女云、諸仏弟子、当依_二何住_一。弗云、諸仏弟子、当依_二大涅槃_一而住。女云、諸仏弟子、既依_二大涅槃_一而住、而我如_二舍利弗_一与_二麼去_一。

有_二礼有_一楽、能放能収、人平不_二語_一、水平不_二流_一。漢地不_二収_一。秦不_二管_一、又騎驢子下_二楊州_一。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは智慧第一の舍利弗と月上女との間で交わされた入城・出城に因む問答を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻七「祖師機縁 東土諸祖」の「二祖慧可大師」の章には、

二祖慧可大師、初至_二少林_一、參_二承遠磨_一、立_二雪断臂_一、悲淚求_二法_一。磨知_二是法器_一、乃曰、諸仏最初求_二道_一、為_二法忘_一形、汝今断_二臂_一求_二亦可_一在。祖曰、諸仏法印、可得_二闡乎_一。磨曰、諸仏法印、不_二從_一人得。祖曰、我心未_二寧_一、乞師安心。磨曰、將_二心来_一与_二汝安_一。祖曰、覓_二心了_一不可_二得_一。曰、与_二汝安_一。心竟。祖於_二此悟_一

入。

拈刀截臂露全真、忘却安心底人、若是當時知痛痒、老胡何処著渾身。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは高山少林寺で禅宗初祖の菩提達磨に参じた二祖慧可（太祖大師）の「雪中断臂」と「二祖安心」の公案を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻九「祖師機縁 六祖下第一世」の「南嶽懷讓禪師」の章には、

南嶽懷讓禪師 嗣六祖、初住曹溪、参六祖。祖問、什麼来。

師曰、嵩山来。曰、什麼物恁麼来。師曰、説似一物、即不中。

曰、還可修証否。師曰、修証即不無、汚染即不得。曰、只

此不汚染、諸仏之所護念、汝既如是、吾亦如是。

直言発、足自嵩山、蕩蕩乾坤任、往還、一物尚無寧有似、倚

天長翹遁、人奪、無際派

という機縁と頌古が示されている。これは韶州（広東省）曲

江県の曹溪山宝林寺に到って六祖慧能（大鑑禪師、六三八—七

一三）に参じた南嶽懷讓（大慧禪師、六七七—七四四）に因む

「南嶽説似一物」の公案を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻一〇「祖師機縁 六祖下第三世之

一」の「洪州百丈山懷海大智禪師」の章には、

百丈因僧問、如何是奇特事。師曰、独坐大雄峯。僧礼拜。師

便打。

雄峯独坐不裏藏、捉敗分明已見、設或更求奇特事、野狐涎唾諸方。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは洪州（江西省）奉新県の百丈山（大雄峰）寿聖寺に化導を敷いた馬祖下の百丈懷海（大智禪師、七四九—八一四）に因む「百丈奇特事」の公案を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻一一「祖師機縁 六祖下第三世之三」の「洪州百丈山惟政禪師」の章には、

百丈政示衆曰、汝等為我開田、我為汝説大義。普請開田

了、衆請和尚説大義。師展両手示之。

百丈説大義、全然没巴鼻、通身是水泥、溺死在平地。

無際派

という機縁と頌古が示されている。これは百丈懷海の法弟である百丈惟政（涅槃和尚）の「百丈開田」の公案を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻一四「祖師機縁 六祖下第三世之五」の「襄州龐蘊居士」の章には、

居士以家業、尽投湘水。女子靈照、日將箒籠、鬻於市中。

爺將活計、沈江水、累汝沿街売、箒籠、不是家貧連子苦、

此心能有幾人知。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは龐居士と娘の靈照に関する機縁を拈提したものであり、この偈頌はすでに述

へたごとく『枯崖漫録』に載せられており、次項で触れる『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』にも収められている。

『禅宗頌古聯珠通集』巻一五「祖師機縁 六祖下第四世之」の「潭州瀉山靈祐禪師」の章には、

瀉山冬月問「仰山、天寒人寒。曰、大家在這裏。師曰、何不直説。曰、適来也不曲、和尚如何。師曰、直須随流。」

大家在「這裏」、両手扶不起、放下近前看、是什麼面罵。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは瀉山靈祐（大円禅師 七七—八五三）が法嗣の仰山慧寂（小釈迦、智通禅師、八〇三—八八七）と交わした「瀉山天寒人寒」の公案を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻一七「祖師機縁 六祖下第四世之」の「秀州華亭船子德誠禅師」の章には、

秀州華亭船子德誠禅師 嗣「菜山」。師印「心於菜山、与道吾・雲巖為交。泊離菜山、謂同志曰、予率性疎野、唯好山水。他後知我所止、遇冷例座主、指一人来。遂分携至華亭、泛一小舟随縁度。曰、吾後到京口、遇夾山上堂。僧問、如何是法身。曰、法身無相。曰、如何是法眼。曰、法眼無現。吾失笑。山下座請問、某甲抵对道僧話、必有不是。致令失笑、望不吝慈悲。吾曰、和尚一等は出世、未有師在。山曰、甚处不是。曰、某甲終不説、請往華亭船子处。

天童山の無際派とその門流（佐藤）

去。山曰、此人如何。曰、此人、上無片瓦、下無卓錫。若去須易服而往。山乃散衆、直造華亭。船子纔見、便問、大德住甚麼寺。山曰、寺即不住、住即不似。師曰、不似、似箇甚麼。山曰、不是目前法。師曰、甚处学得来。山曰、非耳目之所到。師曰、一句合頭語、万劫繫驢橛。師又問、垂絲千尺、意在深潭、離鈎三寸、子何不道。山擬開口、被師一槓打落水中。山纔上船、師又曰、道道。山擬開口、師便打山豁然大悟、乃點頭三下。師曰、竿頭絲線從君弄、不犯清波意自殊。山遂問、抛綸擲釣、師意如何。師曰、絲懸淥水、浮定有無之意。山曰、語帶玄而無路、舌頭談而不談。師曰、釣尽江波、錦鱗始遇。山乃掩耳。師曰、如是如是。

三寸離鈎、一槓、百千毛敷冷颼颼、雖然兩手親分付、要在渠儂自點頭。無際派

という機縁と頌古が示されている。これはすでに触れたことく菜山下の船子德誠が一嗣の夾山善会を得た「船子得鱗」の公案を拈提したものである。この頌古は『枯崖漫録』では「讚船子」として載り、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』では「夾山」として載せられている。また華東師範大学出版社刊『船子和尚撥棹歌』に付録される漪雲深照達運輯『統機縁集』

巻上には「無際派」の作として、

一副漁竿三寸鈎、百千毛敷冷颼颼、雖然当下親分付、要在渠儂自點頭。

渠儂自點頭。

という偈頌を載せているが、『禅宗頌古聯珠通集』のものは字句にかなりの相違が見られる。

『禅宗頌古聯珠通集』巻一八「祖師機縁 六祖下第四世之五」の「趙州觀音院從諗禪師」の章には、

趙州一日到「茱萸」執拄杖於法堂上、從「東過」西。莫曰、作「甚麼」。師曰、探水。莫曰、我這裏一滴也無、探「箇甚麼」。師以拄杖「壁」便下。

平地鼓「波瀾」、青天轟「霹靂」、脚下爛如泥、身上元不濕。古往今來幾百年、拄杖依然空「靠」壁。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは南泉下の趙州從諗（實際大師、七七八—八九七）が同門の茱萸と交わした「趙州探水」の公案を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻二「祖師機縁 六祖下第五世之二」の「陸州陳尊宿」の章には、

陸州見僧乃曰、見成公案、放汝三十棒。曰、某甲如是。師曰、三門頭金剛、為「甚麼」拳。拳。曰、金剛尚乃如是。師便打曰、這掠虛薄。

見成底事没「商量」、不動「絲毫」便「厮」当、三十烏藤聊放過、可「機」雪上更加霜。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは黄檗下の陸州道蹤（道明、陳蒲鞋・陳尊宿）が一僧と交わした「陸州見成公案」の公案を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻三〇「祖師機縁 六祖下第六世之餘」の「撫州疎山匡仁禪師」の章には、

疎山冬至夜有僧、上堂問、如何是冬來意。師曰、京中出「大黃」。今訛作「京師」。

京師出「大黃」、直截為「君」拳、冬至到寒食、恰是一百五。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは洞山下の疎山匡仁（光仁、矮師叔）が一僧と交わした「疎山冬來意」の公案を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻三一「祖師機縁 六祖下第七世之三」の「福州玄沙師備禪師」の章には、

玄沙南游「莆田」縣、排「百」戲「迎接」。來日師問「小塘長老」、昨日許多喧鬧、向「什麼」處「去」也。塘提「起衲衣角」。師曰、料掉没交涉。法眼別云、昨日有「多少」喧鬧。法燈別云、今日更好笑。

人前提「起袈裟角」、堪「笑」無「端」露「醜」惡、「二老」風流出「出家」、未「明」向「上」那一著。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは雪峰下の玄沙師備（謝三郎、宗一大師、八三五—九〇八）が泉州（福建省）莆田縣に遊び、小塘長老と交わした「玄沙到県」の公案を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』巻三八「祖師機縁 六祖下第十一世之一」の「潭州石霜楚円慈明禪師」の章には、

慈明室中、挿劍一口、以草鞋一緇水一盆置劍辺、每見入室、即曰、看看有至、劍辺擬議者、師曰、噲、喪身失命了也、便喝出。

單鎗足馬出汾陽、端的還他主將強、盆水草鞋橫室內、殺人更不犯鋒銳。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは臨済宗の石霜楚円（慈明禪師、九八六—一〇三九）が学人を接待するのに劍を用いた故事を拈提したものである。

『禅宗頌古聯珠通集』卷四〇「祖師機縁 未詳承嗣」の「錢塘鎮使」の章には、

錢塘鎮使、在界上為鎮將、凡見僧便問、若相契即留止宿、一日因二僧至、遂問、近離甚處。曰、江西馬大師処。使曰、馬大師有「什麼方便」。曰、道即心是仏。便被擲出。又有二僧到、亦如前問。僧曰、非心非仏。又被擲出。

是是非非俱請出、巍巍万仞如壁立、平生心胆向人傾、相識還如不相識。無際派

という機縁と頌古が示されている。これは杭州錢塘の鎮使が馬祖道一（大寂禪師、七〇九—七八八）のもとから到つた二僧らと二度にわたつて問答し、「即心是仏」と「非心非仏」のいずれの答えにも止宿せしめなかつた故事について拈提したものである。

このように『禅宗頌古聯珠通集』には「增收」の部分に、

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

了派のなした頌古一六則が収められており、了派が頌古を得意とした禪者であつたことが窺われる。これらの頌古が了派の作としてまとめられていたものと見られ、あるいは『無際和尚語録』といつた表題の語録に「頌古」として収められていたのかも知れない。

『新撰貞和集』と『重刊貞和集』に載る無際了派の偈頌

また日本の南北朝後期に夢窓派の義堂周信（空華道人、一三二五—一三八八）によつてまとめられた『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』および『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』にも無際了派が詠じた偈頌がいくつか収録されている。

すなわち、『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』卷上「讚仏祖名賢附」には、

夾山。無際派 宋人、嗣拙庵。

散席迢々到海涯、痛機連打兩俱非、父南子北知何処、莫認漁家落釣磯。

という仏祖贊が収められており、これは『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』卷二「讚」では「夾山 一本有「天目宋人嗣「松源」七字」として収められており、なぜか松源下の天目文礼（滅翁、一一六七—一二五〇）の作として扱われている。しかも『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』卷二「讚」にはこの仏祖贊とは別につづけて、

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

夾山。 無際 際下一本有派宋人嗣拙庵。

三寸離鉤撼一橋、百千毛髮冷颼々、雖然兩手親分付、要在渠儂目點頭。

という仏祖贊も載せられており、了派にいま一首の「夾山」の祖贊が存したことを伝えている。これらは唐末に活躍した青原下の夾山善会（伝明大師、八〇五—八八一）を詠じた作であり、善会が船子徳誠（華亭和尚）の厳しい接化によって大成した因縁を讃えたものである。すでに触れたことく了派は華亭の円覚庵に住庵していた時期があり、おそらく徳誠や善会に対する思い入れにはかなり深いものが存したのである。『枯崖漫録』では「贊船子」と題して同様の偈を載せている。

同じく『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上「讚仏祖名賢附」には、

豐照女。 無際。

爺將活計沈湘水、累汝街頭売箆籬、不是家貧兒女苦、此心能有幾人知。

という仏祖贊も載せられている。これは馬祖下の龐蘊の娘である豐照女に因む「豐照菜籃」の古則を通してそのすぐれた禅機を称えた内容である。この仏祖贊は『枯崖漫録』や『禅宗頌古聯珠通集』にも収められている。

また『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上「祖塔」には、

真覺塔。 無際。

謂言心地絶疑猜、到底那知眼未開、不得岩頭重指註、有何面目可帰来。

という礼祖塔の偈頌が載せられており、これは『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一「礼塔」にも収められている。真覺塔とは唐末五代に福州（福建省）候官県の雪峰山崇聖禅寺で多大な接化をなした青原下の雪峰義存（真覺大師、八三二—九〇八）の墓塔のことであり、建州出身の了派にとつて同じ福建の地で活躍した義存の存在には特別のものが存したものと見られ、おそらくその参学期に了派は実際に雪峰山に掛搭し、その墓塔を拝登する機会に恵まれているのであろう。

さらに『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻上「亭宇 作造附」には、

幹藏殿。 無際派 宋人 嗣拙庵。

大光明蔵勢崔嵬、八面無門任往来、宝網交羅彈指現、掀翻大地軸風雷。

又。

根椽片瓦無虚弃、玉軸琅函有变通、但得衆中人著力、自然八面起清風。

という二首の偈頌が載せられており、この中で二首目が『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻三「居処」にも収められている。これはおそらく了派がその修行期に五山などの大刹で経蔵を

掌る蔵主の要職に就任したときに詠じた作と見られ、八面とは八角形の輪蔵のことを指し、大光明蔵というのもここでは仏の智慧のことを収蔵する経蔵の意であろう。

また『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻下「柴炭」には、

石灰。無際。

樓「破銀山千万重、曾經劫火不銷鎔、分身南北東西了、合水和泥樹大功。」

という偈頌が存し、これは『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻八「燈燭 柴炭附」にも収められている。ここに石灰とあるのは、あるいは石灰のことではなからうか。

『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻下「器用」には、

木鳥。無際派。

慣遊滄海混凡鱗、奪得驪珠解轉身、号令叢林無限意、和声送出示時人。

という偈頌が存し、これは『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻八「法器」にも「無際」の作として収められており、しかも同じく巻八「法器」にはつづいて、

木鳥。無際。

白浪衝開与麼来、転身元不假雲雷、而今高掛空王殿、臭氣從教徧九垓。

といま一つ同題の偈頌が載せられている。ここにいう木魚とは僧堂や庫院に吊るされた梆のことであり、空王殿という

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

のは天童山の僧堂のことであろうか。

また『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』巻下「器用」には、

兩屏風。無際。

楠木形骸兩作衣、虛堂獨自峭巖々、長年对面何曾隔、自是時人不薦機。

という偈頌が載せられており、これは『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻八「器用」では「無際」の作として「虎屏風」となっている。兩（紙）なのか帛（虎）なのかが定かでないが、内容的には人物を描いた紙の屏風に寄せたものであり、いわゆる画賛といつてよいであろう。

『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻一「造塔 舍利附」に、

戲題「剪紙塔」。無際。

當陽拈起剪刀裁、七宝浮函心手回、堪笑耽源多口老、湘潭北露屍骸。

として載る作はすでに触れたことく了派が虎丘派の密庵咸傑のもとで詠じた偈頌であって、その間の事情は『枯崖漫録』に詳しい。

『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻五「師弟」には、

小師之「天童」。無際。

老来緘默過余生、破戒滯膏肓、子行、長夜漫々幾時旦、橫空耿々有「長庚」。

という偈頌が収められている。これは得度の小師（弟子の智

庚か）が修行のために天童山に赴くのに贈った餞別の作である。当然のことながら、了派自身がまだ天童山の住持となる以前に詠じたものであり、おそらく天童山の住持を勤めていたのは同門の浙翁如琰か海門師齊あたりではなからうか。

また、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻六「送行」には、

賦「白雲、送僧歸故山。」 無際

閑情高韻孰能齊、一片幽禪万象低、豈必從龍千里去、只心如鶴九天樓。山中固是難贈、物外何妨到品題、出本無心歸亦好、傍花隈石瀑泉西。

という作が伝えられている。これは一僧がゆかりの寺院に帰るのに際し、白雲を詠じて餞別に与えたものである。

これらの作は概ね了派の作と断定してよいであろうが、単に「無際」とあった場合、松源派の虎巖淨伏の法を嗣いだ無際如本の作である可能性も存している。いずれにせよ、了派はかなり偈頌に秀でた禪者であったものらしく、あるいは了派には『無際和尚語録』か詩文集の類いが編集されていたものかも知れない。

おわりに

以上、拙庵徳光の法嗣として南宋中期に天童山に化導を敷いた無際了派という人の事跡を丹念に追ってみたわけであるが、総じて了派がきわめて真摯な学仏道者であったことが改

めて実感された感がある。入宋した当初の道元は天童山で了派と巡り会ったのであり、その門下の人々とも温かな対応によって多くの貴重な体験を経ている。

一方、日本僧の道元と希有にも関わるることによって、奇しくも了派の存在も禅宗史上に大きな足跡を残すことができたといつて過言でない。道元は天童山の了派のもとでそれなりに満足のいく修行を始めることができたわけであり、本師の如浄を除けば、道元が在宋中にもっとも信頼していた禪者こそ了派であったといえる。

了派自身の事跡については史料の不足から不明の部分が多く、いままじ未見の史料によって補える箇所も存しようが、概ね以上の考察が限界と見てよいだろう。了派にもおそらく『無際和尚語録』といった表題の語録が編纂されたものと見られるが、残念ながら道元もそうしたものをも何も将来した形跡が窺われぬ。ただ、義堂周信が『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』や『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』を編纂した時点で了派の偈頌を集めた何らかの資料が手もとにあった可能性が存するから、あるいは『無際和尚語録』などが実際に日本禅林に将来されていたとも解されよう。

了派には法嗣として無境印徹・鼈峰 定・雪窓祖日・中際 中・智庚・足翁徳麟といった禪者が存したことが知られ、とりわけ無境印徹や足翁徳麟の門流は辛うじて元代までは存

続していたものらしいが、その後の消息は定かでない。同門の浙翁如琰・葳叟善珍・北磻居簡らの門流が大慧派の主流として華々しく展開したのに対し、了派の門流は細々とその系統を維持していたにすぎない。

すでに述べたごとく道元は『正法眼蔵』『嗣書』において了派の嗣書のほか、了派のもとに在った諸禅者の嗣書などを克明に記している。おそらく道元の手元には如浄との間で交わした『宝慶記』などは別に、それ以前における了派らとの問答や、諸禅者の嗣書を見聞したときに記された手控えの記録なども存したものと推測されるが、それらはすでに歴史の彼方に失われている。そうしたものが残されていれば、了派ないしその門下と明全・道元ら日本僧との交流の経緯も詳しく辿れたはずであろう。

了派が揮毫した墨蹟や画賛の類いあるいは自賛頂相などは、残念ながら何も現今に伝えられていない。また道元が了派ゆかりの文物を何かしら日本に将来していた可能性も存しよすが、すでにそれらも歴史の彼方に消息を絶つている。

註

- (一) すでに吉田道興『天童寺世代考』(二)『愛知学院大学』『禅研究所紀要』第一四号)に「無際了派」として、天童山に住持した了派の事跡が禅宗燈史や『枯崖漫録』を通して大まかに考察されている。

天童山の無際了派とその門流(佐藤)

- (2) 李国玲編『宋僧録』(綾装書局刊)上冊の「了派」の項では、

『明州阿育王山志』卷一一(『明州阿育王山統志』卷一)に載る無文燦『育王祭無極和尚』の記事をなぜか了派のことと解しているが、了派は明州の阿育王山弘利禅寺には住持しておらず、了派とするのは全くの誤りである。『明州阿育王山統志』が依つた資料は大慧派の無文道璨(柳塘、一一二—四一—二七一)の詩文集『柳塘外集』卷四「祭文」に載る「祭育王無極和尚」という祭文を受けたものであり、これは同じ道璨の詩文集『無文印』卷二「祭文」にも「育王祭無極和尚」として載せられている。ここにいう無極和尚とは、了派と同門に当たる大慧派の空叟宗印の法を嗣いだ無極浄観のことを指していると解するべきであろう。浄観については『物初勝語』卷一八に「浄慈請無極諸山疏」が収められており、『偃溪和尚語録』卷上「慶元府応夢名山雪竇資聖禅寺語録」に「浄慈無極和尚遺書至上堂」が存し、『仏鑑禅師語録』卷二「住臨安府徑山興聖万寿禅寺語録」にも「浄慈無極和尚遺書至上堂」が存している。また『北磻和尚語録』「仏事」に「無極和尚掛真」が収められ、『大川和尚語録』「小仏事」にも「為浄慈無極和尚入祖堂」が収められている。これらによれば、浄観は淳祐四年(一一四四)の未か翌年春に世寿六四歳で示寂しているものらしい。『扶桑五山記』一「浄慈住持位次」には、卅八、大川濟禅師。卅九、無直観禅師。四十、偃溪闍禅師」とあり、ここにいう第三九世の無直観が無極浄観と同一人物を指していると思われるから、この人は大慧派の法從兄弟に当たる大川普濟と偃溪広闍の間に杭州銭塘県の南屏山浄慈報恩光孝禅寺に住持し、浄慈寺の現

住として示寂しているのである。ただし、浄観自身は阿育王山には住持していないようであるから、先の「育王祭無極和尚」の記事はおそらく師の空叟宗印の墓塔が存した阿育王山の塔頭に浄観の遺骨が納められた際になされたものであるうか。

(3) 『読史方輿紀要』巻六「歴代州域形勢六」の「唐下・五代」には、

威武、治福州。元和中、置福建觀察使、領福泉汀建漳五州。乾寧三年、升為威武軍節度使。景福初、為王潮所拠。

と記されており、福建觀察使が乾寧三年（八九六）に威武軍節度使と改められていることが知られる。北宋代においても当初は威武軍節度が置かれていたから、福建の地は広く威武軍と呼称されていたことになる。

(4) 『建州弘積録』巻下「輔教第四」の「宋建陽晦庵朱先生」の章には、朱熹が若くして杭州の径山にて大慧宗杲に参禅し、さらに崇安県の開善寺にて密庵道謙に教えを受けた消息を伝えており、道謙が示寂した際に朱熹が撰じた祭文を載せている。なお、朱熹の仏教に対する見解は『朱子語類』巻二二六「釈氏」に詳しい。

(5) 『増集統伝燈録』巻六に付される「五燈会元補遺」には、径山大慧宗杲禪師法嗣として「杭州径山雲庵祖慶禪師」の章が存し、また『径山志』巻二「列祖」によれば、

第二十九代、雲庵慶禪師、建寧人。（中略）十月二十三日示寂。

と記されている。建寧出身の雲庵祖慶が大慧宗杲の法を嗣い

ており、詳しい消息は定かでないが、後に同門の拙庵徳光の後席を継いで径山の第二九世となったことが知られる。

(6) 『枯崖漫録』巻上「臨安府径山少林行松禪師」の項に、

臨安府径山少林行松禪師、生於建之浦城徐氏。受業於夢筆峰等覺。瑞世於安吉報本、嗣東庵。道声四馳、未幾起住杭之淨慈。（中略）寧廟尤重佛法、嘉定間、再得旨置南山、即詔延和殿登對、賜号弘行禪師・金襴袈裟、寵榮至矣。

と記されており、また『径山志』巻二「列祖」によれば、第三十三代、弘行少林松禪師、建寧人。有語録十卷、板厄于火。二月二十一日示寂。

と記されている。少林妙松は建州（建寧府）浦城県の徐氏の出身であり、浦城県西北五里の孤山夢筆峰の等覺寺で出家得度した後、拙庵徳光（東庵）に参じて法を嗣いでいる。安吉州（湖州）府治の報本禪院に出世開堂した後、妙松は杭州錢塘県の南屏山淨慈報恩光孝禪寺に二度にわたって住持し、寧宗より弘行禪師の勅号を賜っている。さらに同門の浙翁如瑛が宝慶元年（一二二五）七月に示寂した際、その後席を継いで杭州余杭県の径山の第三三世に勅住していることが知られる。また『仏鑑禪師語録』巻一「住慶元府阿育王山広利禪寺語録」に「径山少林和尚遺書至上堂」が存し、径山の妙松の遺書が紹定五年（一二三三）の四月下旬か五月冒頭に阿育王山の住持であった破庵派の無準師範のもとに届けられていることが知られ、師範は八月には径山の住持に迎えられている。了派と妙松は同郷で同門に当たることから、かなり親しい交友をなしていたのではないかと見られる。

『仏鑑禪師語録』巻五「序跋」に「跋 少林語録」が存しているから、妙崧には『少林和尚語録』(あるいは『弘行禪師語録』か)といった表題の語録一〇巻も編集されたものらしいが、残念ながら妙崧の語録も伝存しておらず、了派との関わりを伝えるような具体的史料は何も残されていない。

(7) このほか『枯崖漫録』巻中「肯庵円悟禪師」の項や『建州弘釈録』巻下「崇徳」の「宋崇安開善寺肯庵円悟禪師」の章によれば、嗣承未詳の肯庵円悟も建寧府(建安)の人であり、郷里にて儒学を朱熹から受け、福州古田県元和郷邵南里の大目寺(大目院)や福州福清県西南の黄檗山万福寺および郷里建寧崇安県の開善寺に化導を敷いたことが知られる。ちなみに当然のことながら、肯庵円悟と『枯崖漫録』を編した枯崖円悟とは全くの別人である。『淮海和尚語録』「平江府双塔寿寧万歳禪寺語録」によれば「建寧府開元東山和尚赴虎丘至上堂」が存しているから、浙翁如琰の法嗣で了派の法姪に当たる東山道源(一一九一—一二四九)が建寧府建安県の開元寺から蘇州呉県の虎丘山雲巖禪寺に遷住していることが知られる。『増集統伝燈録』巻二「蘇州虎丘東山道源禪師」の章によれば、道源は虎丘山から福州侯官県の雪峰山崇聖禪寺に遷住する際に建安県の光孝寺で遺偈を書して示寂したとされる。また『雲谷和尚語録』巻上「建寧府開元禪寺語録」によれば、松源派の石溪心月(仏海禪師、?—一二五六)の法嗣である雲谷懷慶も建安県の開元寺に住持している。

(8) 秀巖師瑞については『宝慶四明志』巻九「叙人中 僧釈」に「僧師瑞」の項が存している。退谷義雲については陸游の『渭南文集』巻四〇「塔銘」に「退谷雲禪師塔銘」が存して

いる。浙翁如琰については『平齋文集』巻三「墓誌」に「仏心禪師塔銘」が存している。北磻居簡については『物初勝語』巻二四に「北磻禪師行状」が存している。

(9) 明末曹洞宗の大家として名高い永覚元賢(一五七八—一六五七)は建寧府(建州)の建陽県の出身であったため、郷里の僧伝である『建州弘釈録』二巻を編集している。『建州弘釈録』には巻上に「達本第一」として三一人、巻下に「顕化第二」として一七人、同じく「崇徳第三」として一四人、「輔教第四」として一四人の伝記を載せており、建州出身者ないし建州で化導を敷いた僧侶と檀信を併せて実に七七人の消息をまとめている。ただし、そこには建州建安県の出身であった無際了派の記事は残念ながら収められていない。

(10) 『枯崖漫録』巻上「慈愍祖派禪師」の項には「慈愍祖派禪師、温州張氏子。祝髮於開元羅漢寺、參文閣西之嗣宗岱餘」として、慈愍祖派の機縁を記している。祖派は温州(温州が)の張氏の出身で、開元の羅漢寺で出家得度し、黄龍派の雲庵克文(文閣西、真浄大師、一〇二五—一一〇二)の法嗣である岱餘。宗に参じてその法を嗣いでいることが知られる。ちなみに後の日本禅林においては黄龍派(千光派)の江西龍派のこく法諱の下字に派を使う禪者も若干ながら見られる。

(11) 無際慧照尼については、『雲臥紀譚』巻下に「無際道人」の項が存し、『増集統伝燈録』巻六に付される「五燈会元補遺」に「径山大慧宗杲禪師法嗣」として「無際道人」の章が存している。この人は侍郎の張淵道の娘で、蘇州平江府長洲県治東北の資寿尼寺の無著妙総尼のもとに投じて比丘尼となり、宗杲に参じて法を嗣いだ後、妙総尼の師席を継いで資寿寺に

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

1100

住持している。

- (12) 『増集統伝燈録』巻六に「径山虎巖伏禪師法嗣」として「温州江心無際本禪師」の章が存しており、「正誤宗派圖」四にも「径山虎岩淨伏」の法嗣の一人に「江心無際 本」の名が存している。また『禪林墨蹟拾遺』九四には「東澗道洵・無際如本兩筆墨蹟、大慧墨蹟跋語」が収められていることから、法諱が如本であったことが判明する。無際如本は松源派の虎巖淨伏の法を嗣いで温州（浙江省）永嘉県の甌江の中洲に存する江心山龍翔寺に住持したことが知られる。ちなみに東澗道洵は破庵派無準下の断橋妙倫の高弟である古田徳屋に參じて法を嗣いでおり、やはり江心山龍翔寺に住持したことが知られる。

- (13) 際の子を道号の下字に用いた禪者として、ほかに南宋末期に曹源派の癡絶道冲（一一六九—一二五〇）の法を嗣いだ寿昌中際 心があり、元代に破庵派の中峰明本（幻住老人、一二六三—一三三三）の法を嗣いだ絶際永中などが知られる。
- (14) 六祖下の南陽慧忠（大証国師、？七七五）に因む「忠国師無縫塔」の話頭については、『景德伝燈録』巻五「西京光宅寺慧忠国師」の章に、

耽源問、百年後有人問、極則事作麼生。師曰、幸自可憐生、須要箇護身符子作麼。師以化緣將畢涅槃時至、乃辞代宗。代宗曰、師滅度後、弟子將何所記。師曰、告檀越、造取一所無縫塔。曰、就師請取塔樣。師良久曰、会麼。曰、不会。師曰、貧道去後、有侍者応真、却知此事。大歴十年十一月九日、右脇長住、弟子奉靈儀、於党子谷建塔、勅謚大証禪師。代宗後詔、応真入内、拳

問前語。真良久曰、聖上会麼。曰、不会。真述偈曰、湘之南潭之北、中有黄金充一國、無影樹下同合船、瑠璃殿上無知識。応真後住耽源山。と記されており、慧忠の示寂にまつわる無縫塔建立の消息が語られている。門人であった耽源応真が示した偈頌は「湘の南・潭の北、中に黄金有りて一國に充つ。無影樹下の合同船、瑠璃殿上に知識無し」というものである。

- (15) 『禪宗頌古聯珠通集』巻八「祖師機緣 東土旁出諸祖」の「西京光宅寺慧忠国師」の章によれば、この「国師無縫塔」の古則に対して、雪竇重顯・白雲守端・羅漢系南・五祖法演・本覚師一・円悟克勤・仏鑑慧勳・潜菴慧光・戴無為・無門慧開・高峯原妙の頌古を収めているが、了派の作は載せられていない。

- (16) 『密菴和尚語録』巻下「偈頌」に「送拙菴住洪福」が収められているから、密庵咸傑は徳光と交友が存し、洪福とは鴻福と音通であることから、徳光が浮山鴻福寺に住する際に饒別の偈頌を送っていることが知られる。
- (17) 『周文忠集』巻八〇「道釈 贊・題跋」には「龍安主僧仁遠出徳光頂相 求贊 嘉泰四年二月」と跋「徳光与梁世昌頌 嘉泰壬戌八月」も収められている。また「仏法金湯編」巻一四「南宋」の「周必大」の箇所には「圓鑑塔銘」が「仏照光公塔銘」として引用されている。

- (18) 石井修道「仏照徳光と日本達磨宗（下）」金沢文庫保管『成等正覚論』をてがかりとして、『金沢文庫研究』第二〇巻第一二号に「仏照徳光伝」として、徳光に関する伝記の考察がなされている。

(19) 阿育王山の徳光が能忍に付与した達磨の画像贊とは、

直指人心、見性成佛、太華擊鬚、滄溟頓颺。雖然接得神光、争奈三門齒缺。

日本国忍法師、遠遣小師鍊中・勝弁来、求達磨祖師遺像。

大宋国住阿育王山法孫徳光稽首敬請。

己酉淳熙十六年六月初三日書。

というものであり、これは東京青山の根津美術館所蔵のもの
と個人蔵(もと大藏家所蔵)のものが伝えられているが、い
ずれが原本なのか複製なのかが定かでない。一方、徳光が能
忍に付与した自贊頂相は大正五年(一九一六)までは現存し
たことが知られているが、その後の所在は確認されていない。
ただし、『墨蹟之写』「元和三丁巳 四冊之内 中之下」に
「一、徳光半正 忍法師求之御影贊」(竹内尚次注解本、四
二四頁、四二五頁)として、

這村僧、無面目、撥軀天闕、掀驪地軸。忍師脱体見得
親、外道天魔俱覓伏。

日本国忍法師、遠遣小師鍊中・勝弁、到山問道、繪
予幻質、求讚。

大宋国淳熙十六年六月初三日、住明州阿育王山拙菴徳
光題。「印」

という文面が伝えられている。この自贊頂相がいまも何れか
に残されているれば、徳光往年の姿を如実に仰ぎ見ることがで
きたはずであり、また達磨画像贊の字句と比較鑑定もできた
わけであって、その散逸はまことに惜しまれてならない。達
磨画像贊と頂相自贊はいずれも同じ淳熙十六年六月三日の日

天童山の無了派とその門流(佐藤)

付けて揮毫されており、徳光がこの日に一括して鍊中・勝弁
の両者に託していることが判明する。このときあるいは了派
や如琰らもその場に同席していたのかも知れない。少なく
とも日本僧能忍という人に徳光がそうした相承物を付与した
ことは了派ら門下の人々にとっても最大の関心事であったこ
とは疑いなく。

(20) 田山方南編『禅林墨蹟拾遺』「中国編」には、幸いに4「拙
庵徳光墨蹟」が掲載されており、加賀田家蔵「偈語(絹本)」
として、

見麼諸仏現成身、曾不覆藏面目真、倒退三千無魔外、
比丘得脱体須親。

育王山比丘 拙菴徳光。「印」「印」

と記されている。これは徳光がやはり阿育王山の住持として
示した七言四句の偈頌であって、あるいは同じく日本の能忍
のもとに贖された墨蹟かも知れない。

(21) 『開山和尚秘記』(『御遺言記録』とも)において、徹通義介
(義鑑、一一一九—一三〇九)が道元と交わした問答として、

又御尋云、林際下仏照禪師嗣書、故鑿師傳授之否、又
你見之乎。義介白、此相伝不名嗣書、祖師相伝血脈、
云云。義介拜見之。仰云、其云嗣書也。付使者事髣
髴。又職非可見聞。然汝見之、旁好運也。末世澆運中、
僅雖值遇仏法、保任此等、尤為器量、云云。作法書
様、聊青原与南岳各別也。其後又雲門・法眼等、世雖
異、同是嗣書也。

という記事が存している。義介の得度の師である覺禪懷鑑が
所持していた達磨宗相伝の「仏照禪師嗣書」をめぐって問答

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

11011

が展開されており、道元は達磨宗相伝の血脈が嗣書のことであると述べている。道元自身は徳光が大日房能忍に付与した嗣書を閲覧する機会はなかったものらしいが、状況からすると、徳光が了派に授けたものと同一の形態であったと見られている。青原と南岳さらに雲門・法眼などによって形態が相違している点など、「嗣書」の巻にも通じた記載が存している。

- (22) 率庵梵琮については、『増集統伝燈録』巻一に、「江州雲居率庵梵琮禪師」の章が存するが、伝記的な記載は見られない。幸いに梵琮には、『率庵和尚語録』（『卒庵和尚語録』とも）一卷が存しており、上堂として、「慶元府仗錫山延勝禪院率庵和尚語録」と、「南康軍雲居山真如禪院率庵和尚語録」と、「卒庵和尚東湖菴居語」が存し、さらに、「頌古」と、「仏祖贊」と「詞偈」が収められている。梵琮の道号が率庵なのか卒庵なのか判然としないが、嘉定二年（一一二九）四月に明州鄞県の仗錫山延勝禪院に住持し、紹定元年（一一二八）五月に南康軍の雲居山真如禪院に住持していることが知られる。また梵琮が最後に庵居した東湖庵とは、蘇州（江蘇省）呉興の洞庭西山に存した東湖庵（後に東小湖禪寺）のことである。

- (23) 『率庵外集』については京都大学図書館所蔵『率庵和尚語録并外集』（青写真版）を複写申請して入手し、その後半に載る『率庵外集』を参照することができた。この語録と外集には、「建仁大中蔵本」の印が押されているから、もと東山建仁寺の大中院の蔵本であったものらしい。大中院は法燈派の東海竺源（法光安威禪師、一一七〇—一二三四）の塔頭である。

- (24) 船子徳誠については、『祖堂集』巻五「華亭和尚」の章に詳し

く、『景德伝燈録』巻一四「華亭船子和尚」の章はかなり簡略である。

- (25) 『続刊古尊宿語要』第五集「仏照光和尚語」の「贊」に、
船子和尚。

藕口一橈全「殺活」、點頭三下鼻邊「天、至」今千古風流在、誰道華亭覆「却船」。

という仏祖贊が存しており、これは「禪宗頌古聯珠通集」巻一七「秀州華亭船子徳誠禪師」の章の「船子囑「夾山」」の項にも、「仏照光」の作として載せられている。

- (26) 上海の華東師範大学出版社より一九八七年一〇月に「船子和尚撥棹歌」（上海文獻叢書）二巻一冊が影印されている。これは船子徳誠の詩偈三九首を収録して元代に重刊したものであるが、宋元において徳誠に対する評価がきわめて高まっていたことを伝える禅籍である。巻下「諸祖讚頌」には七人の禅僧・教僧・在俗その他の贊頌が載せられているが、残念ながら了派の作は収められていない。ただし、その中には「拙菴光禪師」のほか、「鉄牛印禪師」、「潮翁琰禪師」、「孤雲權禪師」、「少林松禪師」、「北磻簡禪師」ら徳光の法嗣らの作や「天童淨禪師」の作も収められており、末尾には嘉熙元年（一一三七）中夏に破庵派の無準師範が書した跋文が付されている。ちなみに「船子和尚撥棹歌」の「拙菴光禪師」の作は先の『続刊古尊宿語要』第五集「仏照光和尚語」に載るものと同じである。さらに華東師範大学出版社「船子和尚撥棹歌」に付録される漪雲深照達遼輯『続機縁集』巻上には「無際派」の作として、
一副漁竿三寸鈎、百千毛鬣冷颼颼、雖然三下親分付、要

在渠儂「自點頭」。

という了派の偈頌一首が載せられている。この了派の偈頌がなぜ本来の『船子和尚撥棹歌』に収められなかったのかは定かでない。なお、『船子和尚撥棹歌』については、永井政之「新出『船子和尚撥棹歌』について」(『宗学研究』第三四号)を参照。

(27) 『増集統伝燈録』卷一「福州東禪智観禪師」の章には「福州東禪智観禪師、号「性空」とあり、性空智観は拙庵德光の法を嗣いで後、福州(福建省)閩東五里の易俗里の東禅等覚院(報恩光孝禅寺)に住持したことが知られるのみで、伝記的な記述は見られない。智観の住した東禅等覚院は東禅寺版の大蔵經の印造で有名な禅刹である。

(28) 『嘉泰普燈録』卷一〇「嘉興府華亭性空妙普庵主」の章には、嘉興府華亭性空妙普庵主、漢州人、遺其氏。久依死心獲証。乃抵秀水、追船子遺風、結茆青龍之野、吹鉄笛以自娛多賦詠。士夫俊紳、得其言必珍藏。(中略)紹興庚申冬、造大盆、亢而塞之。修書寄「雪竇持禅師」曰、吾將水葬矣。王茂成、持至見其尚存、作偈嘲之曰、咄哉老性空、剛要餒魚鱗、去不索性去、只管向人說。師聞偈笑曰、待兄來証明耳。令徧告四衆。衆集、師為說法要、仍說偈曰、坐脱立亡、不若水葬、一省柴燒、二免開墳。撒手便行、不妨快暢、誰是知音、船子和尚。高風難繼百千年、一曲漁歌少人唱。遂盤坐盆中、順潮而下。衆皆隨至海浜、望欲斷目。師取塞厚水而回。衆擁觀水無所入。復乘流而往、唱曰、船子当年返故郷、没蹤跡処妙難量、真風徧寄知音者、鉄笛橫吹

天童山の無際了派とその門流(佐藤)

作散場。其笛声嗚咽頃、於蒼茫間、見以笛擲空而没。衆号慕凶、像事之。後三日、於沙上、跏坐如生。道俗爭往迎帰、留五日闍維、設利大如、寂者莫計。二鶴徘徊空中、火尽始去。衆奉設利靈骨、建塔于青龍。寿七十一、臘五十三。

と記されており、船子徳誠を慕う妙普の没蹤跡に徹した生き方を伝えている。了派が華亭においてこの妙普のありようを範としていたのであれば、徳誠・妙普・了派という華亭江をめぐる三禅者の消息が一つのものとして連なることになる。妙普については『南宋元明禅林僧宝伝』卷一にも「性空普庵主」として同様の伝記が存している。また李彌遜(字は似之、号は筠溪、一〇八九—一一五三)の『筠溪集』卷二二にも「慈隆性空禅師真贊」が収められている。

(29) 『嘉泰普燈録』卷九「嘉興府華亭観音禅師」遺其名の章には、

嘉興府華亭観音禅師 遺其名。僧問、如何是仏。曰、半夜烏龜火裏行。云、意作麼生。曰、虚空無背面。僧礼拜。師便打。

という問答を伝えるのみであり、その消息は定かでない。

(30) 保安超と復庵可封の二禅者は、了派が入寺する直前に保安寺に化導を敷いていることになり、その面では貴重なものがある。宏智派の保安超については拙稿「宏智正覚の嗣法門人について」(駒澤大学仏教学部研究紀要 第六三号)を参照された。楊枝派の可封については「叢林盛事」卷下、保安封の項によって事跡が知られる。可封は七閩すなわち福州(三山)玉融の出身で俗姓は林氏とされ、幼年にして出家

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

二〇四

し、月庵善果に参じて法を嗣いでいる。建康府（南京）の蒋山（紫金山）の太平興國禪寺において首座となつて後、揚州（江蘇省）の建隆寺に出世し、さらに大参の周必大（字は子充、洪道、省斎居士、一一二六—一二〇四）の命を受けて常州の保安寺に遷住している。可封が保安寺に住持していた期間は実に一五年の久しきに及び、淳熙年間（一一七四—一一八九）の末に世寿五七歳で示寂している。

(31) 『枯崖漫録』卷下、「龍溪閣禪師」の項によれば、

龍溪閣禪師、初遊方、到南康、詣雲居、至半嶺。笠頭為風掀、沿嶺而下、尋至笠所、有省、住常之保安、孤硬清約（中略）無準謂、徑而直、簡而峭者也。頃龍溪道重一方、袖子嚮臻、堂中被位麟次。夏丁旱、未解制、多起單。溪曰、莫道諸人拄杖子、踣跳。後五日、山僧拄杖子亦踣跳。越五日、沐浴陞堂、歸方丈、坐亡。茶毘迸、設利五色者、莫計。保安耆宿云。

と記されている。この人は了派の住持して以降に常州の保安山崇恩禪寺に住した禪者と見られるが、別に『増集統伝燈錄』卷二「龍溪文禪師」の章が存し、浙翁如琰の法嗣として龍溪文の名が知られる。ここにいう龍溪文が龍溪閣のことであるならば、龍溪閣は如琰の法を嗣いで後、破庵派の無準師範から器量を称えられ、法叔の了派ゆかりの保安山崇恩寺に住持していることにならう。如琰の法孫で『枯崖漫録』の撰者である枯崖円悟は、師の僊溪広闡と同門に当たる龍溪閣のことを直に崇恩寺の耆宿から伝え聞いたものらしい。

(32) ところで、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』卷一〇「哀悼」に、

時思庵主。希叟。

詔書廳在破床頭、高枕松根睡覺休、啼尽山禽驚不醒、蘿窓空鎖暮雲愁。

とあり、これは『新撰貞和分類古今尊信偈頌集』卷中「哀悼」にも収められている。希叟とは破庵派の無準師範の高弟である希叟紹曇（牧間）のことであり、この偈頌は時思庵の庵主が逝去した際に詠じた哀悼の作である。ただし、希叟和尚伝録』卷六「頌」には「悼時思庵主」として同内容の偈頌が収められているが、おそらく「時思」よりも「時思」の方が正しいものと見られる。ここにいう時思庵の庵主が具体的に誰であったのか、了派と如何なる関係にあったのかなど、諸般の状況については定かでない。

(33)

この点は『補統高僧伝』卷一一「僊溪闡伝」にも、十八得度受具、初見鉄牛印・少室陸・無際派、追隨甚久。聞浙翁唱道天童、袖香調之、初見機道齟齬。翁移徑山、師踵至。翁笑迎曰、汝來耶。

とあり、「徑山僊溪仏智禪師塔銘」を簡略にしたかたちで参学との消息がまとめられているが、やはり広闡が了派に参学した寺院については記されていない。

(34)

『仏祖正伝宗派図』によれば、「育王仏照拙菴徳光」の法嗣として「靈隠鉄牛心印」とあり、「正誤宗派図」三にも、「育王拙菴徳光 仏照」の法嗣として「靈隠鉄牛心印」とある。また「扶桑五山記」一「靈隠住持位次」には「廿六、鉄牛印禪師」と記されているから、心印は靈隠寺の第二六世であったことが知られる。「北磻文集」卷八に「請印鉄牛住靈隠茶湯榜」が収められている。

(35)

少室光陸は、『松源和尚語録』卷上の「平江府陽山激照禪院語

録」と「江陰軍君山報恩光孝禪寺語録」を掩室善開とともに編集しており、『松源和尚語録』巻下「贊仏祖」には「能仁光睦長老画師頂相請贊」が「雲居善開長老請贊」とともに収められている。しかも「松源和尚語録」巻末に所収される陸游（字は務観、号は放翁、一一二五—一一〇九）が撰した「塔銘」や同じく「渭南文集」巻四〇「塔銘」の「松源禪師塔銘」によれば、崇嶽が示寂するとき際して、又胎書嗣法香山光睦・雲居善開、囑以「大法」とあるから、当時としては善開とともに崇嶽の門下を代表する存在であったものらしい。『増集続伝燈録』巻三には、「台州瑞巖少室光睦禪師」の章が存しているから、状況からして光睦は初めに越州府城の大能仁禪寺に開堂出世し、明州慈溪県の香山智度禪寺（甲刹）を経て台州黃巖県の瑞巖浄土禪院に住持しているのである。

(36) 洪咨夔（字は舜俞、号は平齋、一一七六—一二三六）の『平齋文集』巻三「墓誌」に所収される「仏心禪師塔銘」には、如琰が天童山や径山に住持した消息について、

出主南劔之含清、歴越之能仁、明之光孝・建康之蒋山、皆迫而後心。最後天童与是山、宸命也。

と簡略に記すのみであって、具体的にいつ天童山に住持したのかは記されていない。ただ、如琰は径山に住持すること八年にして、宝慶元年（一二二五）七月に示寂していることから、天童山から径山に遷住したのは嘉定二年（一二二八）であったことが知られる。

(37) 『増集続伝燈録』巻一「四明天童癡鈍智穎禪師」の章には、四明天童癡鈍智穎禪師、出世茶陵軍嚴福、遷金陵保寧・

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

蒋山・紹興報恩・蘇州靈巖、再住蒋山、遷四明雪竇、至天童。とあり、癡鈍智穎は楊岐派の或庵師体（一一〇八—一一七九）の法を嗣いで諸刹を歴住した後、明州奉化県の雪竇山資聖禪寺の住持を経て天童山に陞住していることが知られる。

(38) 『増集続伝燈録』巻一「四明天童海門師齊禪師」の章には、四明天童海門師齊禪師、由台州瑞巖、奉旨陞天童。有童行、日捧香合、隨師各殿堂行香、及畢回方丈仏前。師白仏云、晨朝誦大方広華嚴經一部、回向真如、云々。盖師出方丈門時、誦世主妙嚴品起、及回方丈、已誦畢。其童行对衆僧説如上事。衆皆不信。師云、汝等八十一人、各執經一卷、老僧於法座上誦衆僧依命。師誦一卷畢、其八十一人、各聞自手執經誦畢。衆疑方釈、知師是華嚴大菩薩再世者也。

という記事のみを載せている。海門師齊は台州黄巖県の瑞巖浄土禪院の住持を勤めて後、勅旨を奉じて天童山に陞住していることが知られ、修行僧とともに綿密な看經を行じ、華嚴大菩薩の再世と称えられた消息を伝えている。『率菴外集』の後半部分には、

悼海門禪師。

纒達春至、便還郷、百草頭辺帰興長、落月独存當日意、遊蜂難覓旧時香、泥牛入海無消息、露柱槌胸哭、彼蒼、試向石梁橋上望、巖然面目露堂堂。

という師齊の示寂を悼む法語が収められている。これによれば、師齊が示寂したのは春の頃であったものらしく、率庵梵琮は海門の道号に因んだ法語を残しているが、石梁橋とは

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

一〇六

台州天台山の石橋（石梁瀑布）のことであるから、師斉は台州天台の出身であつたのかも知れない。

(39) 吉田道興「天童寺世代考」(二)（愛知学院大学『禅研究所紀要』第一四号）に「海門師斉」の考察が存する。なお、『天童寺志』巻七「塔像攷」によれば、海門師斉の墓塔について

「海門齊禪師塔、西崖弁山禪師塔南」とあり、大憲派の弁山了阡の墓塔については「弁山了阡禪師塔、在玲瓏崑南」とあるから、師斉の墓塔は法煙の了阡の墓塔と近接し、天童山の玲瓏崑南の西崖の地に建立されていたことが知られる。

(40) 長円寺本「正法眼蔵隨聞記」巻四「宋土海門禪師」の項に、

一日示言、宋土海門禪師、天童ノ長老タリシ時、会下元首座ト云僧有キ。此人得道悟道人也、長老ニモコエタリ。有時夜參、方丈、焼香礼拝シテ云、請ラクハ師許後堂首座。門流涙云、我小僧タリシ時ヨリ、未聞如是事。汝為禪僧、所望首座長老、大ナル錯ナリ。汝已ニ悟道セルコトハ、見先規超於我。然ニ首座ヲ望コト、昇進ノ為力。許コトハ前堂ヲモ乃至長老ヲモ可許。餘ノ未悟僧寮之、仏法ノ衰微、是ヲ以可知、ト云テ、流涕悲泣ス。爰ニ僧恥テ雖辭、猶補首座。其後首座、此事ヲ記録シテ、恥自彰師美言。

今案之、昇進ヲ望ミ、物ノ首トナリ、長老ニナラント思フコトヲバ、古人是ヲ恥シム。只悟道トノミ思テ、不可有餘事。

という興味深い逸話が載せられている。これは海門師斉が天童山の住持で在ったとき、会下の元首座という僧が後堂首座の職を望んだ顛末を記した内容であるが、了派の前住に当た

る師斉のときの消息であるから、道元は実際に天童山で修行中にこの逸話を聞き知つたものであろう。あるいは道元は直接に元首座と関わりを持つたものか、彼が書き記した記録を讀む機会に恵まれたのかも知れない。

(41) 『天童寺志』巻七「塔像攷」の「別山智禪師塔」の箇所にも祖智の塔銘が収められているが、単に「別山智禪師塔」の銘となつてゐるのみである。了派に参じた部分を挙げれば、

十九歳、往成都昭覺、依拗牛全、始学出世法。後出映抵公安、聞僧諺六巖語喜之、徑往蘇之穹窿、謁巖。巖著之堂中。因聞華嚴法界品善財見弥勒樓閣、因緣人已遷閉之語、恍然如夢而覺、如醉而醒。遂頌雲雲見桃花機緣云、万緑叢中紅一点、幾人歡喜幾人嘆。願之。隨衆二年、往見浙翁琰・無際派・高原泉・淳庵淨・妙峯善、皆有頭角之譽。最後見無準範于雪竇。と記されており、この塔銘が天童山の中峰の麓に祖智の墓塔に付随して存したことが知られ、『石刻史料新編』に載る表記の方が正式な塔銘の呼称であらう。また「南宋元明禪林僧宝伝」巻七「別山智禪師」の章も塔銘を受けてまとめられているが、了派らに参学した記事は省略されている。

(42) 『仏祖統紀』巻一八「法師淨悟」の章によれば、

晚歸飛泉故居、課仏為業。及属疾、大書以示衆曰、求医問藥、吾化、也吾將默觀其变。明日危坐而説。時開檀丁卯九月二十六日也。闍維之日、耳与齒巖然。門人文虎、塔于寺之西麓。北潤居簡、為之銘曰、是為豁菴、聽說維持兩種不壞之藏、道德所重、雖隱而彰。吾知夫異代而同心者、墜淚於厲山之陽。

と記されており、温州（浙江省）樂清県の北廬蕩山の飛泉円覺寺の西麓に門人の嘯巖文虎が墓塔を建て、また了派と同門に当たる大慧派の北磻居簡が銘文を撰していることが知られる。実際に『北磻文集』巻一〇には「雁蕩飛泉寺豁菴講師塔銘」が収められている。

(43) 鎌倉・南北朝期に入宋・入元した日本僧が携帯必需品として中国禅林に通用する度牒と戒牒を所持して渡航している消息については、榎本渉「中国史料に見える中世日本の度牒」『禅学研究』第八二号に詳しい。

(44) 『如浄和尚語録』「再住浄慈禅寺語録」の「退浄慈赴天童上堂」によれば、如浄が浄慈寺に再住していた期間は九ヶ月であったことが知られ、嘉定一七年六月以降に天童山に赴いていることが窺われる。したがって、如浄が浄慈寺に再住したのは嘉定一六年の一月以降と見られ、道元の新到列位問題の訴えがなされた頃には少林妙崧が住持であったものと推測される。なお、この点に関しては、石井修道「中国の五山十刹制度の基礎的研究」(一)、『駒澤大学仏教学部論集』第一三二号)の「浄慈山重建報恩光孝禅寺記」の解説に詳しい。

(45) 中世の史伝としては、聖一派の虎閑師鍊（海蔵和尚、一一七八—一三四六）が鎌倉末期に編纂した『元亨釈書』巻六「釈道元」の章では、記事内容がきわめて簡略なため新到列位問題については何も触れられていない。一方、聖一派の大極聖淋（曇泉、一四二一—？）が室町中期に記した『碧山日録』巻二（長辰四月）九日乙卯の箇所に、長祿四年（寛正元年、一四六〇）四月九日に筆写された「道元禅師之行実」が載せられているが、その「道元禅師之行実」には、

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

師初掛錫於天童時、以外国僧斥位於新戒。師曰、娑婆世界、釈尊遺訓、戒法流布、不論尊卑老幼、先後悉有_レ序。何至_レ曰宋兩國、不言_レ班次乎。一衆合議曰、汝國釈氏之入朝者、不可_レ枚舉也、雖_レ宿師元老、以_レ中州外蕃之異、故皆排_レ下位。惟吾國例、以_レ非_レ新義也。師知_レ衆不可_レ沮、而詣_レ闕抗表曰、仏法偏_レ沙界、戒光照_レ十方。經中曰、今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是其子。然則國已_レ仏國、人皆_レ仏子、豈以_レ國之_レ中外_レ兄弟_レ之行_レ乎。仏者_レ臘次_レ不_レ整、則王道之_レ爵位_レ、莫_レ以_レ序_レ矣。古謂_レ之_レ亂世。君子不_レ居_レ亂世、直人不_レ交_レ詭者。天下_レ其何所_レ賴乎哉。謹仰_レ中和之_レ聖德、聊宣_レ倭僧之_レ鄙懷。天裁無_レ私、伏乞_レ聖察。帝感_レ激制_レ可_レ曰、倭僧之_レ奏、寔有_レ正理、按_レ之、戒位_レ莫_レ紊_レ仏制。天童乃_レ応_レ論旨。後來海蕃之_レ僧、位_レ於本座、師之力也。

と新到列位の問題の経緯と上書が記されており、『三大尊行状記』や古写本『建徳記』とは若干ながら相違し、独自の表現が取られている。ここでは道元個人の問題などではなく、明確に外国僧全体に対する処遇改善であった点が示されており、一回目の訴えは表書のかたちではなく、単なる道元の訴えのことばとして簡略に載せられている。また天童山側の合議のことばとして、汝が国の釈氏の入朝せる者、枚挙すべからず。宿師・元老と雖も、中州・外蕃の異なりを以て、故に皆な下位に排す。惟だ吾が国の例なり、以て新義に非ざるなり」とあり、ここでは最澄・空海・荣西など具体的な名は見られず、また中国と他の国々との違いが正当化され、外国（外蕃）の僧がみな下位に置かれてきたことが語られている。

また二度目の訴えの部分が残せず、すぐに三度目の表書に当たる文が記されており、これを直に読んだ皇帝の寧宗が感激して道元の訴えを正当なものとし、自ら「倭僧の奏すこと、寔に正理有り、之れを按ずるに、戒位は仏制を紊すこと莫かれ」と述べ、天童山に対して戒位については仏制に遵守して平等に扱うべき旨を告げたことになっている。このため天童山ではさつそく寧宗の諭旨に対応した処置がなされ、これより後、日本など外国から到った僧が僧堂で正当な座位に坐することができるようになったとし、道元の屈指のはたらきに依ることが特筆されている。

(46) ちなみに道元門流の壁山紹瑾（一一二六—一三三五）が記した流布本『洞谷記』の「洞谷伝燈院五老悟則並行状略記」の「曾祖越州吉祥山永平寺開山和尚」の章にも、

「拳超、邁古今、奇辨、輕、易諸師。
遂渡海入宋。始掛錫天童、表書及奏聞僧臘戒次、名

と記されており、天童山に掛錫した際に、表書して僧臘戒次のことを奏聞したことから、道元の名が広く知れわたった様子を簡略に伝えている。

(47) 『三大尊行状記』の成立については、東隆眞「行業記」と「行状記」、「行状記」の作者・成立年代の推定（『宗学研究』第六号）では、そのすべてが壁山紹瑾の撰述であろうとされ、伊藤秀憲「三大尊行状記」の成立について（『印度学仏教学研究』第三四卷第一号）では、道元の章は徹通義介の作ではないかと推定している。いずれにせよ、義介が紹瑾の編集と見られるから、道元が示叙して数一〇年を経た鎌倉後期の撰述ということになり、その時点ですでに新到列位

に関する表書が記録されていることは重要であろう。

(48) 壁山紹瑾の『伝光録』第五十一「祖永平元和尚」の章では、

二十四歳ノ春、貞応二年二月二十二日、建仁寺ノ祖塔ヲ礼辞シテ、宋朝ニオモムキ、天童ニ掛錫ス。大宋嘉定十六年癸未ノ曆ナリ。（中略）又嘉定十七年申正月二十一日、天童無際了派和尚ノ嗣書ヲ拝ス。無際曰、コノ一段ノ事、少得見知、如今老兄知得、便是学道ノ実帰也。時二師、歡喜無勝。

と記されており、了派の嗣書を閲覧した消息が簡略にまとめられている。

(49) 『正法眼蔵』「諸法実相」の巻に、天童山の寂光堂について、この道取は、大宋宝慶二年丙戌春三月のころ、夜間やや四更になりなんとするに、上方に鼓声三下きこゆ。坐具をととり、搭袈裟して、雲堂の前門よりいづれば、入室牌かかれり。まづ衆にしたがふて法堂上へいたる。法堂の西壁をへて、寂光堂の西階をのぼる。寂光堂の西壁のまへをすぎて、大光明蔵の西階をのぼる。大光明蔵は方丈なり。西屏風のみなみより、香台のほとりへいたりて、焼香礼拝す。入室のところに雁列すべしとおもふに、一僧もみえず、妙高台は下簾せり、ほのかに堂頭大和尚の法音きこゆ。

という記事が存している。これは宝慶二年（一一二六）三月に如浄が住持のときの消息を記したものであるが、寂光堂が僧堂（雲堂）から法堂の西壁を経たところに位置し、寂光堂の西壁の前を過ぎて、大光明蔵の西階を上ると妙高台に到ることが知られる。この点は金沢市大乗寺所蔵『大宋名藍圖』の天童山景德寺の伽藍配置圖においても、寂光堂は前方丈、

大光明藏は中方丈、そして妙高台が奥方丈という位置関係に
なっている。

(50) 『訂補建漸記』によれば、了派の嗣書を閲覧した記事として、

又嘉定十七年 甲申、日本元仁元年 ノ正月二十一日ニ、

仏照ノ無際ニ授ル嗣書ヲ拝看セリ。

と記しており、この面では『正法眼蔵』「嗣書」の巻の記載
をそのままに受けて嘉定一十七年正月二一日のこととしてい
る。

(51) 明庵宋西が黄蘗派の虚庵懷敞から相承した嗣書が具体的に如
何なるものであったのかは明確ではないが、道元が明全より
受けて理観に授けた「授「理観」戒脈」の臨済宗の部分は、釈
迦文仏から西天二十八祖を経て、

菩提達磨・可大師・璨大師・信大師・忍大師・能大師・
讓大師・一大師・海大師・運禪師・玄禪師・獎禪師・顯
禪師・沼禪師・念禪師・昭禪師・円禪師・南禪師・心禪
師・清禪師・卓禪師・誡禪師・實禪師・瑾禪師・敞禪
師・栄西・明全・道元・理観。

という系図が示されており、法諱の下字に大師・禪師を付け
たかたちで示されている。同じく道元が法燈派祖の無本覺心
(心地房、法燈円明国師、一一〇七—一一九八)に授けた
「授「覺心」戒脈」の臨済宗の部分は、釈迦牟尼仏から西天二
十八祖を経て、

菩提達磨・慧可・僧璨・道信・弘忍・慧能・懷讓・道一・
懷海・希運・義玄・存獎・慧顛・延沼・省念・善昭・楚
円・慧南・祖心・惟清・守卓・介誡・曇實・從瑾・懷
敞・栄西・明全・道元・覺心。

天童山の無際了派とその門流(佐藤)

となっており、慧可以下はすべて法諱の二字で表され、系図
のかたちで示されている。これに対し、虎丘派(破庵派)の
無準師範(径山範禪師)が淳祐元年(一一四一)三月に円爾
(久能尔禪師)に授与した「宗派図」は、まさに虎丘派の嗣
書であろうが、そこでは上部中央に拈華の釈尊像が描かれ、
西天四七・東土二三を経て、

南嶽讓禪師・馬祖一禪師・百丈海禪師・黃蘗運禪師・臨濟
玄禪師・興化契禪師・南院顯禪師・風穴昭禪師・首山念
禪師・汾陽昭禪師・慈明円禪師・楊岐会禪師・白雲端禪
師・五祖演禪師・円悟勤禪師・虎丘隆禪師・応庵華禪師・
密庵傑禪師・破庵先禪師・径山範禪師・久能尔禪師

と住持地または道号に法諱の下字と禪師を付した系図が線で
繋がれて記され、「径山範禪師」の箇所には朱文の「無準」
「師範」の印が押されている。

(52) 『永平室中間書』(『御遺言記録』とも)によれば、大日房能
忍が阿育王山の徳光から託された品物の中に嗣書も存したも
のらしく、

又御尋云、林際下仏照禪師嗣書、故慧禪師伝授之否、又
備見之乎。義介白、此相伝不_レ名_レ嗣書、祖師相伝血脈、
云云。

とあり、道元の質問に対し、義介は徳光より能忍に相伝され
た血脈について答えている。また同じく『永平室中間書』に
は、義介が語る覺禪懷鑑のことばとして、

我当初有_レ東山辺、伝_レ此血脈、未_レ拜_レ見堂頭嗣書、尤為_レ
恨。我今所_レ伝血脈者、唐阿育王山住持、自_レ仏照禪師、
津国三宝寺能忍和尚相伝之末也、云云。

と述べているから、徳光は日本の能忍に対しても血脈（嗣書のこと）を付与されていることが知られる。能忍が相伝したものと了派が相伝したものとが同じく徳光から伝授されているわけであるから、当然のことながら同形態であったはずであるが、その点については定かでない。

(53) 『雲門匡真禪師広録』卷下「遊方遺録」には、

師到灌溪。時有僧拳灌溪語云、十方無壁落、四面亦無門、淨裸裸、赤漚漚、没可把。問師、作麼生。師云、与麼道即易、也大難出。僧云、上座不肯、和尚与麼道那。師云、爾驢年夢見灌溪麼。僧云、某甲話在。師云、我问爾、十方無壁落、四面亦無門、淨裸裸、赤漚漚、没可把。爾道、大梵天王与帝釈商、量箇什麼事。僧云、豈干他事。師喝云、逐隊喫飯漢。

とあり、この「十方無壁落、四面亦無門、淨裸裸、赤漚漚、没可把」の句はもと臨濟下の灌溪志閑のことではあったことが知られる。

(54) 『法演禪師語録』卷下「偈頌」に「投機」の題で、

山前一片閑田地、叉手叮嚀問祖翁、幾度売来還自買、為憐松竹引清風。

として示されているものであり、この語句は五祖法演の作として楊岐派の禪者たちの間に広く知られていたたのである。

『嘉泰普燈錄』卷八「蕪州五祖法演禪師」の章には、

辞至白雲。遂拳僧問、南泉摩尼珠、話請問。雲叱之。師頷悟、獻投機偈曰、山前一片閑田地、叉手叮嚀問祖翁、幾度売来還自買、為憐松竹引清風。雲特印可、令掌磨事。

とあり、『五家正宗寶』「臨濟宗」の「五祖演禪師」の章などにも引用されている。そこには「幾度売来還自買、為憐松竹引清風」の語句が見られ、このことばが楊岐派の五祖法演が師の白雲守端（一〇二五—一〇七二）に参じて印可を受けた際の「投機偈」のことではあったことが知られる。

(55) 『派和尚遺書至上堂』をつぎのように解釈している。

無際派和尚の遺書が到着した折の上堂。万波が大海に帰して二派に収まるように、仏法の枝派は無際の宗に帰する。和尚は生前、清風を拳揚し、濁流を激発すること幾星霜であつたことが、いまや忽然として源底に帰って識情を乾し尽してしまつた。これを見て、露柱灯籠は呵呵として笑いがとまらない。さて、まあ一体、何を笑っているのだらうか（和尚は生死を超えた世界から、清濁の世に浮き沈みしているわれらを憫笑していることである）。下座して言うには、一緒に靈机にお詣りして、如法に供養いたそう。さらに「派和尚」についての注記の中で、この上堂は、仏生日（四月八日）と徽宗皇帝忌（四月二十一日）の間におかれているから、その遺書到来は嘉定十七年四月中のことであろう。従つて、その示寂はおそらく四月以前にさかのぼるものと思われる」と推測している。

(56) この点は伊藤秀憲『仏鑑禪師語録』の上堂年時考、宝慶三年如浄示寂説を確かめる、「駒沢大学中国仏教史蹟參觀団

中国仏蹟見聞記」第七集に所収）によつて考証されており、『仏鑑禪師語録』卷上「住慶元府雪竇山資聖禪寺語録」の配列から、無準師範が雪竇山資聖禪寺に入寺したのは嘉定一六

(57) 年(一二三三)二月の頃であったことが判明している。了派と同門に当たる率庵梵琮は『率庵外集』において「悼海門禪師」という哀悼の偈頌につづいて、

悼太白禪師。

千里歸來自日辺、四方蠟慕道声喧、長庚伴月同三夏、巨棟連雲架二軒。喝下倒流三峽水、棒頭結尽五湖冤、而今兩脚捨空去、不問無言与有言。

という偈頌を残している。海門禪師とは了派の前の天童山住持であった同門の海門師齊のことであるが、ここにいう太白禪師については具体的に誰を指しているのか定かでない。これによれば、梵琮は天童山(長庚)の太白禪師のもとで夏安居の三ヶ月(あるいは三度の夏安居)を共に過ごしたもののらしく、太白禪師が喝や棒を振るって厳格な学人指導を特徴としていたことを称え、いま両脚で空を払って逝去したことを悼んでいる。別に『率庵和尚語録』『慶元府仗錫山延勝禪院率庵和尚語録』には、

上堂。太白禪師、全無伎倆、一錫飛來、占斷千嶂。以中心樹、建立聖像、合水和泥、根生土長。不用換骨脱胎、不須起模打樣、一段真実身心、腦後円光万丈。という上堂が収められており、ここにいう太白禪師の記事が先の「悼太白禪師」の偈頌に符合するものである。いづれも道号などを用いず、太白禪師とのみ表記しているのが注目され、その禪者は単に「太白禪師」と表記するだけで、当時の人は誰かが判明したものであろう。梵琮が明州鄞県西南二〇里の仗錫山延勝禪院に住持したのが嘉定二年(一二二九)四月であり、洪州(江西省)南康軍の雲居山真如禪

天童山の無際了派とその門流(佐藤)

院に住持したのが紹定元年(一二三二)五月のことであるから、時期的に太白禪師とはこの間に天童山に住持していた了派が如浄のいずれかに相当するものと見られる。とりわけ、すでに触れたことく、『率庵外集』の「送派無際住花亭菴」において梵琮は同門の了派に対して「派無際」と称しているから、了派であれば「悼無際禪師」と記したはずであり、ここにいう太白禪師は道号を用いなかった如浄を指していると思われるのが妥当かも知れない。

(58) 『仏鑑禪師語録』巻五「偈頌」に「少室」「止翁」「石田」「別浦」「高原」「死翁」「復古」「雲谷」「枯木」「訥堂」などと並んで「無際」と題する作が収められている。死翁と復古については定かでないが、これらがそれぞれ師範と同世代の少室光睦・止翁 祥・石田法薫・別浦法舟・高原祖泉・雲谷懷慶・枯木良伝・訥堂浄辨などのことと解すると、ここにいう無際というのも了派のことを指している可能性が高い。「無際」と題する偈頌の内容は「儻侗復儻侗、平夷更平夷、伸手不見掌、趙州東院西」という簡略なものである。

(59) 『宝補建漸記』には了派の嗣書を閲覧した記事につづいて、
宝慶元年 乙酉、日本嘉祿元年、師天童二萬シテ、マサ二二歳二近シ。無際ノ許可ヲ蒙ルコト数回ナリトイヘドモ、自ラコレヲ肯ヒ玉ハズ。(中略)師、諸方ヲ遊歴シテ、知識二相見シ玉ヘトモ、過量ノ人ノ師範トスベキ無キニ因テ、又再ビ派無際ヲ訪テ、天童ニ帰ラントシ玉フ。途中ニシテ無際ノ示寂セシコトヲ聞テ、大イニ嗟歎シテ、ソレヨリ帰郷ノ念萌セリ。

と記されており、ここでは宝慶元年(一二二五)に了派がな

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

一一一

お健在で、道元が了派から数度にわたって許可（印可）を蒙ったが、自ら納得せずにいたとする。しかもその後道元は諸山歴遊に出たことになっており、真に師とすべきすぐれた人物に逢うことができず、再び了派に参学せんと天童山に帰ろうとした矢先、途中で了派が示寂したという訃報を知って大いに落胆し、帰国の念が起こつたと伝えられている。しかし、この面山瑞方による一連の説は古伝とは相違してきわめて問題点が多く、到底、史実としては肯えなないものである。

(60) 『叢林公論』の「四明天童朴禅师」の項によれば、

及戸天童、未幾、躬跡寺之南隅菜園之右、架屋百餘楹、中闕寿塔、護以欄楯、飾以藻碧。軒沼映帶、曰「葦雲」、曰「白月」。

とあり、了朴が生前に天童山の伽藍の南隅の菜園の右に新たに建物を建立し、中に寿塔を立石した消息を伝えている。これがおそらく寺西の新庵の慈航禅师塔に当たるものと見られるが、『天童寺志』に記されるところと位置関係がいま一つ定かでない。

(61) 黄龍派の慈航了朴については、桐野好寛「慈航了朴の逸文

『永平広録』と『先徳語録』の記載を端緒として」（曹洞宗総合研究センター・宗学研究部門『宗学研究紀要』第一七号）に詳細な論考が存している。

(62) このほか、明末に臨済正宗の山翁道忞（木陳、一五九六一六七四）によって編集された『禅燈世譜』卷三「南嶽下臨済宗楊岐法派世系図」には、「天童無際派」の法嗣として、「雪窓日」「無鏡徹」「足翁麟」「繁峯定」という四人の名が記されている。

(63) 『天童寺志』卷五「雲蹤攷 宋」の「無鏡徹禅师」の項に、師嗣「天童無際派」。旧志列「先寛攷」。続燈録中載「天寧」。或誤刊「寧字」、俟「攷正」。

と記されており、『天童寺志』以前に編集された天童山の旧志では、天寧を天童と見誤って印徹を天童山の住持として「先寛攷」に載せていたものらしい。

(64) 明州天寧寺の詳細と直翁可挙の事跡については、拙稿「直翁可挙と南宋末元初の曹洞宗 宏智派の日本への伝来を踏まえて」（『宗学研究』第四六号）および拙稿「明州天寧寺の直翁可挙について 南宋末元初における曹洞宗宏智派の動向

」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第六二号）を参照し、『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」には、
仰山。袁州宜春興太平興国禅寺。開山通智禅师。集雲峯・龍会橋・挿鉄井・獺径橋・梵錫泉・龍淵・一音演説・歌馬廬・流雪亭・雪谷・卍字堂・推枕軒・四藤閣・雷音堂。

とあり、仰山太平興国禅寺の勝景が列記されているが、その中に集雲峯や四藤閣といった景勝や伽藍の名が見られる。

(65) 『淮海和尚語録』には、「台州万年報恩光孝禅寺語録」が収められており、入寺してしばらくして、「淳祐八年天使入山、

恭奉「聖旨」修「供羅漢、披度僧員、升座拈香祝聖」という祝聖拈香がなされているから、淳祐八年（一二四八）かその前年の頃に元肇は天台山の万年寺に住持しているものらしい。『物初隣語』卷二四の「淮海禅师行状」によれば、
浙漕荆溪吳大監子良、以天台万年「招」居之六年、退歸

吳門。覽院高公容、以庵延之。
とあり、元肇が浙漕の吳子良（字は明輔、号は荆溪、一一九

七?)の招請を受け、六年間にわたって天台山の万年報恩光孝禅寺に住持していることが知られ、このときに印徹の遺書が仰山から届けられているから、印徹が寂寂したのは淳祐年間の後半であつたものと見られる。とすれば、印徹は十二世紀の後半に生まれ、十三世紀の中葉に世寿六〇歳ほどで示寂していることとなる。

(67) 『仏正正伝宗派図』や『正誤宗派図』四によれば、「径山無準師範」の法嗣のひとりに「報恩繁峯如海」の名が記され、繁峯如海という禅者が破庵派の無準師範の法を嗣いでいることが知られる。この人の場合は繁峯を道号としている。

(68) 宋・元代に道号を雪窓と稱した禅者としては、元代中期に大慧派の晦機元照(仏智、一一三八—一一三九)の法を嗣いだ雪窓普明が存しており、蘇州呉県西北の虎丘山雲巖禅寺に住持している。また同じく元代後期に松源派の東嶼德海(明宗慧忍禅師、一二五六—一二二七)の法を嗣いだ雪窓悟光(公寔、仏日円明普濟禅師、一二九二—一三五七)が存しており、後に明州郵県東の阿育王山広利禅寺や天童山景德禅寺に住持している。

(69) 黒山覚明については清の光緒十一年(一八八五)に刊行された『光緒定海県志』巻二三「伝五」の「仙釈 釈」に、
黒山明公禅師、宋慶元間、重建普慈寺。後寺復厄劫燼、有足翁麟師、繇廬山飛錫至此、鼎勸焉。大徳志。
と記されているが、やはり覚明が如何なる系統の禅者なのかは明らかになされていない。ただし、黒山というのはおそらく「黒山下鬼窟裡」とか、「黒山下打坐」といった禅語に由来する道号と見られ、黒山下を明らかにするという黙照邪禅を逆

に是とした発想ではなからうか。とすれば、覚明は埋もれた曹洞宗系統の禅者であつた可能性が高い。これは全くの推測ではないが、あるいは覚明は時期的に曹洞宗の足翁智鑑あたりの法嗣で、天童山の如浄と同門に当たる禅者ではなかつたかと推測される。覚明ゆかりの普慈寺に了派の法嗣で如浄に参じた雪窓祖日が入寺し、さらに祖日の法弟の足翁徳麟が後席を継いでいるのも偶然ではないのかも知れない。「敬実堂記」によれば、「之報恩、または、他之報恩」とあり、覚明が何れかの州の報恩光孝禅寺に遷住したことが伝えられている。まもなく覚明はその寺で示寂したものであろうが、遺骨はやがて有縁の普慈寺に帰蔵され、龍峯の青龍の口に墓塔が建てられたとされる。

(70) 『正法眼蔵』「行持」の巻によれば、如浄に隨身していた侍者の広平は、久しく日録(日記)を書いていとされる。この広平の日録にはおそらく如浄に参じた日本僧道元のこととはもちろんのこと、如浄のもとで侍者を勤めていた祖日の消息も記されていたことであろう。

(71) 『続伝燈録』巻三四「目錄」では、「西禅淨禅師法嗣」として「中際立才禅師」とあるが、『増集続伝燈録』巻一「福州中濟無禅立才禅師」の章では住持地が「中際」ではなく、「中濟」となっている。

(72) ただし、大久保道舟『道元禅師全集』上巻によれば、『正法眼蔵』「嗣書」の巻七、玉雲寺所蔵本や徳雲寺所蔵本では「智庚」ではなく、「智康」と記されている。また道元の在宋中の動向を扱った書籍や論文などに、智庚のことを智庚または知庚と表記している場合がままに見られるが、これは

明らかかな筆写段階での誤りとすべきである。

- (73) 『景德伝燈録』巻五「吉州青原山行思禪師」の章に、
六祖將示滅、有沙彌希遷、即南嶽石頭和尚也。問曰、和尚百年後、希遷未審當依附何人。祖曰、尋思去。及祖順世、遷每於靜處端坐、寂若忘生。第一坐問曰、汝師已逝、空坐奚為。遷曰、我冀遭戒、故尋思爾。第一坐曰、汝有師兄行思和尚、今住吉州、汝因緣在彼。師言甚直、汝自迷耳。遷聞語、便禮辭祖、直詣靜居。師問曰、子何方而來。遷曰、曹谿。師曰、將得什麼來。曰、未到曹谿亦不失。師曰、恁麼用去曹谿作什麼。曰、若不、到曹谿、爭知不失。遷又問曰、曹谿大師遺識和尚否。師曰、汝今識吾否。曰、識又爭能識得。師曰、衆角雖多一麟足矣。

とあり、青原行思が嫡嗣に石頭希遷を得たときの感慨に「衆角多しと雖も一麟足れり」の一句が存し、足翁徳麟の道号と法諱の關係もこのことばに由来していることが知られる。

- (74) 龍山については定かでないが、あるいは慈溪県西北八〇里の向頭山（西龍尾）の近辺に存した禪寺ではないかと見られ、具体的には慈溪県西北六〇里の西峰度門禪院あたりを意味するのであるうか。

- (75) 『大徳昌国州図志』巻七「叙祠 寺院」の「普慈寺」の項や『光緒定海県志』巻二七「志十二下」の「寺觀」の「普慈寺」の項には、

寺熾於慶元間、寸椽無遺。黒山明公禪師、極力營建。淳祐五年、復厄於劫燼、山門独存。足翁麟師、繇廬山飛錫至此、又從而鼎勸焉。視昔增壯。自慶元迄淳祐、

垂五十年。而寺之熾者再、前明後麟有功於寺。という記載が存しており、昌国州（宋代は昌国県）の普慈寺が慶元年間（一一九五—一二〇〇）と淳祐五年（一二四五）の二度の火災に遭遇したが、最初のときには嗣承未詳の黒山覚明がこれを復興し、つぎには足翁徳麟が慈溪県の蘆山から到つてこれを復旧したことを特筆している。もちろん、ここに「蘆山」とあるのは「蘆山」の誤りであつて、徳麟は江西の蘆山とは直接に関わっていない。なお、普慈寺に住持したことが知られる禪者としては南宋代の黒山覚明・雪窓祖日・足翁徳麟らのほかに、元代に入ると大憲派に用着覚明（？—一三二四）や愚庵智及（以中、西麓、明辯正宗広憲禪師、一三二一—一三七八）があり、松源派に明極楚俊（仏日煥憲禪師、一二六一—一三三六）と竺芳慕聯（朽庵、？—一三八四）が存している。

- (76) 『扶桑五山記』一「育王住持位次」や「明州阿育王山統志」巻六（巻一六）「先覚攷」によれば、阿育王山広利禪師の世代に足翁徳麟の名は存していない。『剡源戴先生文集』の「西原菴記」の記事が正しいとすれば、徳麟は咸淳四年（一二六八）に焦山に住持しているものと見られるから、状況的に徳麟が阿育王山に住持できたのは、第四六代（第四四代）の住持である大憲派の物初大観（一一二〇—一二六八）が咸淳四年六月一七日に示寂した前後の頃ということになり、おそらく何らかの理由で暫定的に住持を勤めることになったのではないかと推測される。徳麟が焦山に赴いて後、正式に第四七代（第四五代）として阿育王山に入寺したが、同じ大憲派の蔵叟善珍（一一九四—一二七七）にほかならない。

(77) 『攻媿集』卷一〇「塔銘」の「雪竇足庵禪師塔銘」に、

師生于淮南、而化緣独在四明。屢易法席、名震江湖、而終不越境。自号足庵。

と記されており、智鑑はほとんど四明すなわち明州の地に化導を敷き、他所に赴かなかつたことから、自ら足庵と号したことを伝えている。徳麟の場合も最後の焦山を除いてすべて明州内の寺院に止住していたことから、自ら足翁と称したのではないかと見られ、あるいは受業師である西峯円覚寺の一が智鑑の門人であつた可能性も存しよう。

(78) 『虚舟和尚語録』「臨安府靈隱景德禪寺語録」には、「焦山足翁和尚遺書至上堂」の後に、「径山虚堂和尚遺書至上堂」が収められているが、松源派の虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六九）が示寂したのは咸淳五年一〇月のことであるから、徳麟が示寂する二年前といふことになる。『虚舟和尚語録』がなぜ「焦山足翁和尚遺書至上堂」を、「径山虚堂和尚遺書至上堂」より先に載せているのか、その間の事情は定かでない。

(79) このほかに「増集続伝燈録」巻六「未詳承嗣附」に、

丁安人。諱覺真、号竺心。黃巖濂頭人。初參田絶耕于委羽山。有省。遂棄家屬、結庵自居。見古愚於湧泉。愚云、良家女子、東走西走作麼。对云、特來見和尚。愚云、我這裏容你不得。拍手一下云、三十年用底、今朝捉敗。愚休去。見無際于鷹山春雨庵、入門云、春雨如膏、行人惡其泥濘。際云、不是不是。擬進語、被喝出。晚年就明因寺前、開接待。有僧提包、直入臥内。問曰、你是什麼僧。云、行脚僧。問云、你脚下草鞋綻斷、為甚不知。僧無語。即擲出其包云、者裏無你措足

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

処。又有僧纒入門。丁云、達磨大師來也。僧云、我不。是。丁云、是固是、只是鼻孔不同。一日与明因尼室長老相見、問云、闍長老夜來生得兒子、是否。答曰、且道是男是女。丁云、雞喻燈臺一、走、鰲咬釣魚竿。

という丁安人の章が存しており、そこに鷹山春雨庵に居していた無際という禪者との関わりを記した記事が見られる。丁安人は正式には竺心覺真と称した尼僧であり、台州黃巖県濂頭の良家の女子の出身であつたとされる。最初に参じた委羽山の絶耕田についてはその嗣承も定かでないが、つぎに参じた古愚とは「仏祖正伝宗派図」に「淨慈断桥妙倫」の法嗣として名が載せられる「涌泉古愚存」のことであり、古愚存は南宋末期から元代初期にかけて活躍し、台州黃巖県の浮山湧泉禪寺に住持している。したがって、丁安人が参じた無際というのも、時期的に無際了派のことではなく、松源派の虎巖淨伏の法を嗣いだ無際如本のことを指していよう。ちなみに古愚存については「増集続伝燈録」巻六「目錄」では「淨慈古田屋禪師法嗣」として「古愚存禪師 此後無伝」と記され、「正誤宗派図」四でも「淨慈古田徳屋」の法嗣に「古愚存」と記されている。ここでは古愚存は妙倫の法嗣ではなく、淨慈寺第五三世の古田徳屋（？一二九二）の法嗣とされており、妙倫の法孫として扱われている。

(80) 『仏鑑禪師語録』巻上の「住慶元府雪竇山寶聖禪師語録」と「住慶元府阿育王山弘利禪師語録」の配列によれば、無準師範が雪竇山に住持したのは嘉定一六年（一二三三）一二月の頃と見られ、宝慶三年（一二三三）春には阿育王山に遷住していることが知られる。詳しくは伊藤秀憲『仏鑑禪師語録』

の上堂年時考 宝慶三年如浄示寂説を確かめる（駒沢大
学中国仏教史蹟參観団『中国仏蹟見聞記』第七集に所収）を
参照されたい。

(81) 『物初牒語』卷二三「塔銘」の「頑空法師塔銘」には、智覺
が日頃になした具體的な接化として、

一日講至迦葉闍琴起舞、須彌湧没低昂、海水騰波処、
縱学流之説、随攻破之、俟其語窮意尽、忽指露柱曰、
請為諸人説、或謂師云、盍著述乎。師云、吾不欲
屋下架屋。因眺之曰、夫言所以達意、得意而忘言、
言忘則意亦忘、名相何有哉。龍猛建宗、達磨別伝、同工
而異曲。安晚鄭丞相問曰、一人発真帰源、十方世界悉
皆消殞、頑空消殞也無。師云、向甚処見頑空。又問、
好箇仏堂、未有仏在。師曰、何処不稱尊。

という問答商量を伝えており、これもやはり『統仏祖統紀』
卷一「法師智覺」の章に、

一日講至迦葉闍琴起舞、須彌湧没低昂、海水騰波処、
縱学流之説、随攻破之、俟其語窮意尽、忽指露柱曰、
請為諸人説、或謂師曰、盍著述乎。師曰、吾不欲
屋下架屋。因眺之曰、夫言所以達意、得意而忘言、
言忘則意亦忘、名相何有哉。龍猛建宗、達磨別伝、同工
而異曲。安晚鄭丞相問曰、一人発真帰源、十方世界悉
皆消殞、頑空消殞也無。師曰、向甚処見頑空。又曰、
好箇仏堂、未有仏在。師曰、何処不稱尊。

と繼承されているが、そのやり取りはきわめて禅僧の接化に
類していたことが窺われる。この点は同じ大慧派の大川普濟
も『大川和尚語録』「贊仏祖」において、「円覚頑空覚講主真

(82) 『物初牒語』卷二三の「頑空法師塔銘」には、物初大観が智
覺のために塔銘を撰する経緯として、

予蚤識師、又与其適初同源。厚初狀其行、請銘予辞
焉。初云、北磻老人嘗銘吾師之祖豁庵矣、公磻之子、
豈無他人視猶磻焉、予不得辞、乃序而銘

と記されている。これによれば、大観は早くから智覺とは面
識が存し、また智覺の嫡嗣である同源省初（一二二六六）
とも交遊を結んでいたものらしい。省初が智覺の行実（頑
空法師行狀）か）を狀して大観のもとを訪れて塔銘を請うた
際、大観は一旦はこれを辞退している。しかし、省初はかつ
つ大観の師である北磻居簡が智覺の法祖に当たる機先浄悟
（豁庵、一一四九—一二〇七）のために塔銘を撰した因縁を
踏まえて重ねて懇願したため、大観も依頼を辞することがで
きず、やむなく「頑空法師塔銘」を撰したことを書き記して
いる。ちなみに、『北磻文集』卷一〇「塔銘」には「雁蕩飛
泉寺豁庵講師塔銘」が収められており、居簡が浄悟のために
なした塔銘が知られる。また、『物初牒語』卷二一「祭」に
は、「頑空」の祭文が収められているが、示寂年時や了派との
関わりは何も記されていない。同じく卷二二「祭」には、「同
源」という長文の祭文が収められており、杭州銭塘県の下天
竺靈山教寺の住持であった同源省初が咸淳元年（一二二五）

に事を謝して東嘉(温州)に帰り、咸淳二年一〇月に示寂したことを伝えている。

(83) 『枯崖和尚漫録』巻下「介石朋禪師」の項によれば、

介石朋禪師、秦溪人。(中略)晩年寓杭之冷泉、扁其室曰「青山外人」。景定間、丞相秋堅賈公、尤崇敬佛法、与秦得旨住淨慈。後淮海亦繼其席、皆起於潤東。

と若干ながら伝記的な記述が存している。智朋は秦溪の人であり、了派と同門に当たる浙翁如琰に参じて法を嗣いでいる。『介石和尚語録』の「介石和尚初住温州鴈山羅漢禪寺語録」によれば、智朋は紹定二年(一二二九)二月三日に温州(浙江省)樂清県の北雁蕩山の羅漢禪寺に開堂出世している。それ以前に智朋が天童山の了派に招かれて首座を勤め、日本僧の道元と関わったとしても不自然ではなからう。華東師範大学出版社が影印した上海文献叢書『船子和尚撥棹歌』に付録される「続機縁集」巻上には「浙翁」「無際派」の作につづいて「介石朋」の作が収められている。

(84) 雲谷懷慶は松源派の石溪心月(仏海禪師)?(一二五六)の法を嗣いでおり、智朋よりはほぼ一代遅れて活動している。『雲谷和尚語録』巻上「嘉興府本覺禪寺語録」には、

淨慈介石和尚遺書至上堂。無常生死法、突兀南山倚天末、於我不相干、激灑西湖漫月寒。更說珍重偈、八九分明七十二、虚空成兩辺、少处咸令多処添。个是介石老人、錯供死歎。寿山今日、尽底活翻。会麼。若教頻下淚、滄海也須乾。

という上堂が収められており、嘉興府秀水県西二十七里の寿山本覺禪寺の住持であった懷慶のもとに淨慈寺の智朋の遺書が

天童山の無際了派とその門流(佐藤)

届けられている。これによれば、智朋は世寿七二歳で示寂しているらしいことが知られ、生前から親交の深かった懷慶は智朋の示寂を知り、涙を流して哀悼の意を示している。

(85) 『訂補建漸記』の補注によれば、「嗣書」の巻を引用し、宗月長老の記事を載せた後に「宗月首座、雪窓宗月、嗣法無際、増集統伝燈二見」と伝えており、「増集統伝燈録」の「雪窓日禪師」の記事によつて、了派の法を嗣いだ雪窓日を雪窓宗月であると解しているが、先の考察からして雪窓祖日と宗月は全くの別人と見てよいであらう。

(86) 瑩山紹瑾の「伝光録」第五十一「祖永平和尚」の章にも、又宗月長老八、天童ノ首座タリシニツイテ、雲門下ノ嗣書ヲ拜ス。即チ宗月二問テ曰、今五家ノ宗派ヲツラヌルニ、イササカ同異アリ、ソノココロイカン。西天東土、嫡々相承セバ、ナンソ同異アラランヤ。月曰、タトヒ同異ハルカナリトモ、タダマサニ雲門山ノ仏法ハ如是クナリト学スベシ。釈迦老子ナニヨリテカ尊重他ナル、悟道ニヨリテ尊重ナリ。雲門大師ナニヨリテ尊重他ナル、悟道ニヨリテ尊重ナリ。師コノ語ヲキクニ、イササカ領覽アリ。

と記されており、ほぼ「正法眼蔵」「嗣書」の巻を引用して宗月のことを伝えている。また「碧山日録」巻二に載る「永平道元禪師行状」では、先参天童之惟一・宗月等、粗咨詢玄要」とあり、無際了派のことは何も記さず、天童山で惟一と宗月に参じて玄要を究めたことを伝えている。

(87) 『月林觀和尚語録』の冒頭に三山の陳貫謙(字は益文)が嘉定一年(一二二八)上元日に書した序文で、

月林禪師、既没於武康烏回山。其徒德秀・宗月、哀語

録一編、屬余為序。余曰、此老於無分別中強生分別、又欲追而記之、何耶。二子曰、夫道不屬有言、不屬無言、有言無言、皆落邊見。學者誠知所謂終日言而未嘗言者、則此錄之作、於解黏去縛、不曰亡補。不然、醍醐上味翻成毒藥。爭怪得老師。余杜門僻處、思方外莫逆。如月林者、不可多得。一子又能知師之意、如此。聊為書之、以慰其勤、以紓余之思。禪師名師觀、道号月林。統楊岐正伝、為七世。

嘉定戊寅上元日、三山陳實謙益文書。

と記しており、楊岐派の月林師観（一一四三—一二一七）の語録を編集した門人として徳秀と宗月という二禪者の名を伝えている。ここにいう徳秀とは師観の法を嗣いだ孤峰徳秀のことであるが、いま一人の宗月については定かでない。『月林觀和尚語録』の本文中にはその名が一切伝えられていない。もしこの宗月が了派のもので首座を勤めた宗月と同一人物であるならば、宗月は初めに師観に随侍して徳秀とともに『月林觀和尚語録』の編纂に尽力し、師観が示寂した当初は徳秀とともに序文を陳實謙に依頼するなど活躍していたが、その後、天童山の了派のもとに招かれて首座の要職に就任していることになろう。ちなみに師観は随州（湖北省）西南の大洪山保寿禅院などで本師の老衲祖証に参じて大悟した後、明州奉化県の雪竇山資聖禅寺において曹洞宗の足庵智鑑（一一〇五—一一九二）に参じて首座を勤め、さらに明州鄞県の阿育王山において拙庵徳光のもとに投じた経験があり、了派や如浄とは同参として旧知の仲であったものと見られる。当時の雲門宗の状況について、道元は『正法眼蔵』『嗣書』

の巻において、
いま江浙に大刹の主とあるは、おほく臨濟・雲門・洞山等の嗣法なり。

と述べているから、道元が入宋した十三世紀の前半には、いまだ雲門宗の禪者で江浙の大刹の住持を勤めていた人もいくぶん存したものであろう。また道元は如浄のほかにも曹洞宗の禪者で大刹の住持を勤めていた人が存した消息も若干は認識していたものと見られる。ちなみに東福寺所蔵の円爾将来『宗派図』によれば、雲門宗の最後を飾るのは、『癡禪妙師』の法嗣の「可菴表禪師」となっている。癡禪元妙の法を嗣いだ可菴蘊表（照覚禪師）は十二世紀後半から十三世紀初頭の頃の禪者として杭州余杭県の北山景徳靈隱禅寺の第二世となつている。

(89)

望山紹瑾の『伝光録』第五十一「祖永平元和尚」の章にも、シカノミナラス、大宋ニテ五家ノ嗣書ヲ拝ス。イハユル最初、広福寺前住惟一西堂トイフニマミユ。西堂曰、古蹟ノ可觀ハ、人間ノ珍玩ナリ、汝チイクバクカ見來セル。師曰、未嘗見。トキニ西堂曰、吾那裏ニ一軸ノ古蹟アリ、老兄ガ為ニミセシメン、トイヒテ、携來ルヲミレバ、法眼下ノ嗣書ナリ。西堂曰、アル老宿ノ衣鉢ノ中ヨリ得來レリ。惟一西堂ノニハアラス。ソノカキウアリトイヘドモ、クワシク拳スルニイトマアラス。

と記されており、『正法眼蔵』『嗣書』の巻をかなり省略したかたちで西堂の惟一のことを引用している。ただし、『伝光録』では嗣書拝看の最初に惟一を通して法眼下の嗣書を閲覧する機会に恵まれたことになつている。

(90) 『環溪和尚語録』卷末「行状」によれば、環溪惟一は資州(四川省)墨池の賈氏の出身であり、その出生は嘉泰二年(一一〇二)のことである。出家受具して後、嘉定一六年(一一三三)に三歳でようやく成都(四川省)の大慈寺に遊学し、その後、諸山歴遊して諸師に参じ、無準師範が宝慶三年(一一二七)に明州の阿育王山弘利禅寺に住持したのを聞いてその門に投じている。

(91) 『伝光録』第五十一「祖永平元和尚」の章にも、

又龍門ノ仏眼禅師清遠和尚ノ遠孫ニテ、伝蔵主トイフ人アリキ。彼ノ伝蔵主、マタ嗣書ヲ帯セリ。嘉定ノハジメニ、日本ノ僧隆禅上座、カノ伝蔵主、ヤマヒシケルニ、隆禅ネンゴロニ看病シケル勤勞ヲ謝センガ為ニ、嗣書ヲトリイダシテ礼拜セシメケリ。ミガタキモノナリ、汝子ガ為ニ礼拜セシム、トイヒケリ。ソレヨリ半年ヲヘテ、嘉定十六年癸未ノ秋ノゴロ、師、天童山ニ寓止スルニ、隆禅上座ネンゴロニ伝蔵主ニ請シテ、師ニミセシム。コレハ楊岐下ノ嗣書ナリ。

として日本僧の隆禅を介して伝蔵主の所持する楊岐派の嗣書を拝観した消息を簡略に伝えている。ただし、「ソレヨリ半年ヲヘテ」の表現は年代的に明らかな誤りで、「八年ヲヘテ」とすべきである。

(92) 『淮海外集』卷下の「大明慧昭請伝蔵主山門疏」とは、

大明慧昭請伝蔵主山門疏

蟠桃三千年始熟、此話大不通方。黄梅七百衆嚴存、其間豈無作者。囊中穎脱、戸外風聞、属上国之平章、自大明而興起。某人、真滅胡種草、生別峰故粉。早出峨眉、

天童山の無際了派とその門流(佐藤)

笑大像不曾行脚。再参径埭、将毒龍攪轍深困。既勸破入海筭、砂之流、便肯話束筏住山之語。莫問雲深火冷、須知水到渠成。担板漢喚得回頭、過橋底定应撈倒。祖庭未夜、頼慧炬以增輝、舜日長明、对高峰而仰祝。

というものであり、ここにいる伝蔵主は蜀(四川省)の出身であったものらしく、峨眉山より行脚して浙江に到り、径山で二度にわたり楊岐派の別峰宝印(慈辯禅師、一一〇九—一一〇〇)に参学したものらしく、その後、蔵主を勤めてから大明慧昭寺(所在地未詳)に住持していることが知られる。宝印は仏眼清遠の法兄である圓悟克勤(仏果禅師、一〇六三—一一三五)の法孫に当たる人であるから、道元と関わった仏眼派の伝蔵主とは別人と解した方がよいだろう。

(93) 『永福面山和尚伝』卷三五「宝慶寺寂円禅師伝」では、

越前福山宝慶禅寺開山寂円禅師、大宋国人。依天童淨和尚削染、時名智珠。永平祖在天童、時友好。

と記されており、江戸期の面山瑞方は「越前宝慶由緒記」とは全く別の新たな寂円の伝記を構築している。これによれば、寂円は如浄が天童山に住持して以降に天童山で出家し、法諱を智珠と命名されたことになっている。しかも示寂の箇所で世寿一〇〇余歳と記しているから、道元よりいくぶん年長で、二〇歳代半ば以降に天童山に上って如浄に投じて出家したことになり、「越前宝慶由緒記」の記事とは全く相容れない内容に改編されている。

(94) 寂円の伝記の詳細については、拙稿「宝慶寺寂円禅師について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第一八号)および「中

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

一一〇

国僧・寂円、孤高と望郷の生涯（曹洞宗事務庁「禅の風
特集・遙かなる中国 道元禪師と中国僧寂円」第三
号）などを参照。

(95) 隆禅に関する最新の研究成果として、中尾良信「中納言法印
隆禅について」（『宗学研究』第二九号）および同氏「中世禪
宗の歴史と伝説」（吉川弘文館刊）の「退耕行勇とその門下」
の項が存している。

(96) 明全の伝記の詳細については、拙稿「仏樹房明全伝の考察」
（駒澤大学仏教学部研究紀要、第四九号）と「仏樹房明全に
ついて」（『宗学研究』第三三号）および「明全 入宋求法の
志半ばに倒る」（至文堂「国文学・解釈と鑑賞」特集道元
の世界・生誕八百年のいま、平成一一年一月号）を参
照。

(97) 『道元和尚伝』巻一〇「偶頌」には、道元が在宋中に詠じ
た作を「師嘗於大宋宝慶二年丙戌、寓慶元府太白名山天
童景德禪寺」として列記しており、全ての作が宝慶二年
（一一二六）に詠まれたかの印象を受けるが、おそらく實際
には在宋中の五年間に詠じた偶頌が広く収められていると見
てよいであろう。

(98) 『延宝伝燈録』巻六「宋国天童山了然齋明全禪師」の章では
「貞応二年、率道元・廓然・亮照三同友、截海入宋」と
あり、高照ではなく亮照と記されている。

(99) 『禅林僧宝伝』巻二八「白雲端禪師」の章によれば、郁山主
の悟道偈とはつぎのようなものである。

依茶陵郁公剃髮。年二十余、参顯禪師。或鵬禪
師。顯歿、会公嗣居焉。一見端奇之、每与語終夕。

一日忽問上人受業師。端曰、茶陵郁和尚。曰、吾聞其
過谿有省作偈甚奇、能記之否。端即誦曰、我有神珠
一顆、日夜被塵羈鎖。或云常被塵勞羈鎖、今朝塵
尽光生。照破青山万朵。

この点は『嘉泰普燈録』巻四「舒州白雲守端禪師」の章にも
載せられている。

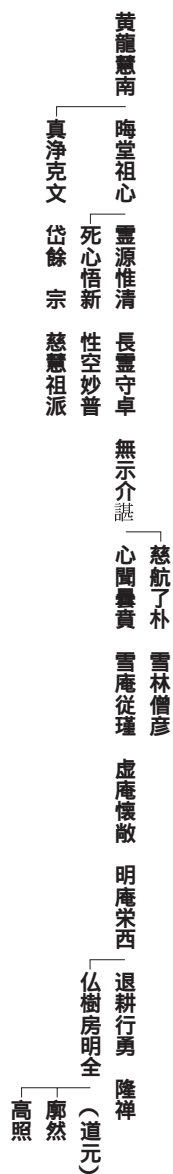
(100) 『禪宗頌古聯珠通集』は南宋の淳熙年間（一一七四—一一八
九）に池州（安徽省）の報恩光孝禪寺の住持であった法応
（宝鑑大師）が編集したものであるが、元の延祐年間（一三
一四—一三三〇）に越州（浙江省）山陰県の天衣山万寿禪寺
の住持であった魯庵普会が大幅に増収し、その後の諸禪者の
頌古を収録している。了派の頌古はいうまでもなくすべて
「増収」の部分に当たっており、普会によって増補されたも
のである。

(101) このほか『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻六「送行」に「無際」
の作として「送西蕃大師之京」と題する偶頌を収めている
が、これは内容的に元代の無際如本の作と見られる。また
『新撰貞和分類古今尊宿偶頌集』巻中「送行」と「重刊貞和
類聚祖苑聯芳集」巻六「送行」には「僧之天台并江西。平
石砥元人」について「和無際本」の作が収められてい
るが、これも明確に了派ではなく無際如本の作である。

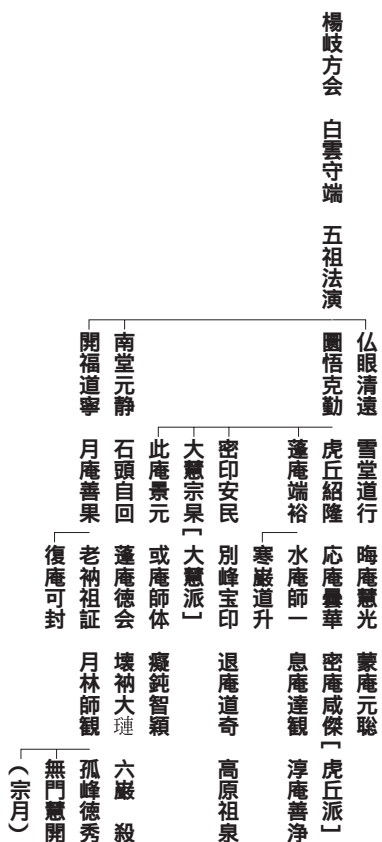
【無際了派関連系譜】

ただし、必ずしも嗣法関係のみではない。

【臨済宗黄龍派】



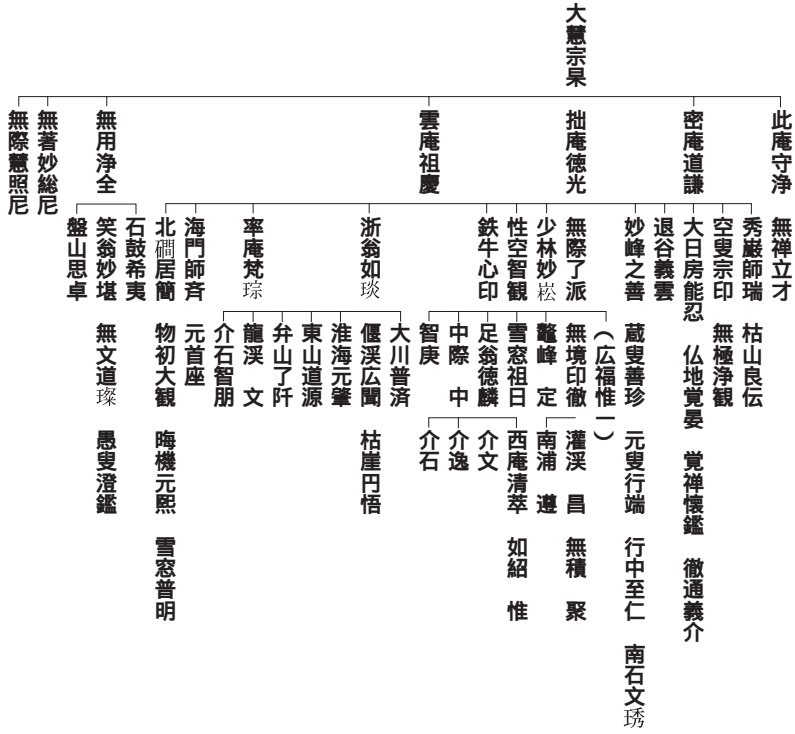
【臨済宗楊岐派】



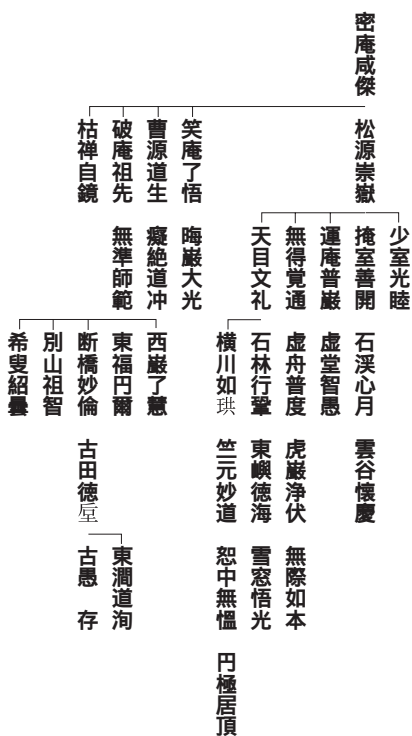
天童山の無際了派とその門流（佐藤）

天童山の無際了派とその門流（佐藤）

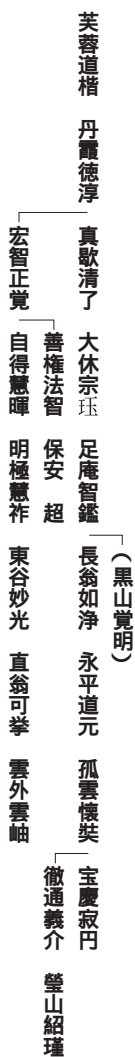
「大慧派」



〔虎丘派〕



〔曹洞宗〕



〔天台宗〕



天童山の無際了派とその門流(佐藤)